

三宅剛一差出・下村寅太郎宛書簡（下）

酒 井 潔・加 瀬 宜 子

I

「三宅剛一差出・下村寅太郎宛書簡（上）」として、まず 23 通の葉書・封書が酒井潔の翻刻・校訂により公表されたのは平成 15 年（2003）の『人文』第 1 号誌上であった。当初は残りの 33 通の公刊についても翌年の同誌第 2 号で完了する予定であった。しかしそれから六年を要したのは、酒井の多忙と二度の大病を別にすれば、次のような事情があったからである。

下村寅太郎博士が生前保管していた三宅剛一博士からの来信の閲覧を私に可能にして下さったのは、平成 7 年（1995）1 月に下村が九十二歳で逝去した後、（下村夫妻には実子がいなかったこともあって）その書斎の整理を任された竹田篤司・明治大学教授であった。博覧強記でしられた下村の残した膨大な遺稿、書簡（来信）、メモ等を一つ一つ整理し、年代や執筆事情等の見通しをつける作業は、多大な時間と労力を要するものであったに違いない。最初に竹田教授から酒井に提供された三宅差出・下村宛書簡は 56 通であったが、その後も竹田教授による整理・調査が進むにつれてさらに多くの書簡が発見され、総数は 106 通に上ったのである。

『人文』第 1 号に掲載分の書簡では、戦前から戦中そして終戦直後までのものが主だったが、その後発見されたものについては、戦時中の 16 通を除けば戦後の書簡である。それらは、三宅が東北大学の理学部から同法文学部に配置換えになった昭和 21 年 9 月より、京都大学教授を経て、学習院大学に勤務した時期までを含む。〔なお、最終書簡 106 については、昭和 40 年（1965）秋より前のものとのみ推定される〕。

しかし可能性としては、もしその後も竹田教授による下村の遺品の整理が進めば、三宅書簡もさらに発見されそうな気配ではあった。そのため、「三宅差出・下村宛書簡（下）」の公刊については、あるいは竹田教授による整理の完了を待ったうえで行ったほうが良いようにも思われた。

そのような矢先、平成 17 年（2005）6 月竹田教授が癌のために急逝されたのである。そのことは実質的に、下村の書斎と遺稿の調査を許されていたほとんど唯一人の方の喪失を意味する。したがって、三宅書簡が今後も発見される可能性が全くないとは言い切れないもの

の、現実にはその可能性はほぼ零に近いと言えよう。また三宅は京都大学を定年退官後は、学習院大学に勤務し、そして昭和 40 年（1965）の定年退職の後も神奈川県大磯に暮らしたが、この晩年期には下村宛書簡は、仮に存在したとしても相当減少したものと推定できる。なぜなら三宅は同じ神奈川県の逗子に住む下村とは、郵便に頼らずとも、実際に会ったり電話で話したりできたであろうからである。以上の理由から、本誌上において、残る全 83 通について翻刻と校訂を施し、公表することにした。

翻刻の入力、書簡の整理、全書簡一覧表の作成は加瀬が担当し、各書簡の校訂や編者注、そして解題は酒井が担当した。

書簡の発信年代については、消印から読み取りにくかったり、全く解読が不可能である場合には、内容から推定し、年代の古い書簡から順に番号を付した。ただ、先述のように『人文』第 1 号の出た後さらに 83 通もの書簡が発見され、その中には同第 1 号に収載されたものより以前の書簡も存在する。そこで全書簡に新たに 1 から 106 まで通し番号を付け直した。それに伴い既発表書簡のうち何通かについては、番号が当初のものとは変わったが、その場合には旧番号に〔 〕を付したものを併記し、『人文』第 1 号に掲載されたどの書簡について、番号が変更されたのかが明らかになるようにした。

II

さて、全部で 106 通の書簡（来信を読んだ後は、師西田と同様、これを破り捨てたという三宅と異なり、最後まで保管していた下村の性癖のおかげで貴重なドキュメントが残されたと言えよう）から読み取れる哲学的、あるいは哲学史的な意味とその射程、大正から昭和中期にかけて三宅と下村から見た西田幾多郎及び（西田門下としての）京都学派の雰囲気と人間関係について、これをわれわれは〈自由で真摯な哲学徒のネットワーク〉という視点から見ることができると思われる。

三宅も下村も京都帝国大学哲学科において西田幾多郎に師事し（三宅は大正 8 年卒、下村は大正 15 年卒）、以来終生師への親しみの感情、師の学問への尊敬の念をもち続け、西田門下では最もアカデミックな学風を代表した。〔ちなみに、一般のジャーナリズムには、高坂正顕、西谷啓治、高山岩男を京都学派の右派、三木清、戸坂潤を左派と呼び、それに対して三宅と下村を中央派と呼ぶ向きも一部にあるようだが、はたして彼ら自身がそのような右・左・中央などという意識を有していたかは甚だ疑問である。少なくとも三宅や下村からすれば、彼らはいずれも京大で同じ師の薫陶を受けたかけがえのない旧友なのであり、またそれゆえに、政治的主張に多少の差異はあったとしても、常にその消息や安否が気遣われる存在であった。そして窮状に際しては救援の手を差し伸べることを躊躇しなかったのである〕。年齢では三宅が七歳上であるが、昭和 9 年（1934）晩秋の京都で初めて会った時から相互に

尊敬と親しみを感じた。このときの感動を下村は日記（昭和9年11月21日）に記している：「・・・妙心寺から楽友会館まで話乍ら歩いてしまう。四方八方の話から、数理哲学の話になり、闇中路上に杖で式を書くと云ふ風である。話は、批評だか自説だか質問だか判らない様な Stil である。如何にも東北で独り離れて考へこんで、これを語り、現はす術のない多年の風習と氏独特の風格があり、感銘が深かつた。・・・それから Husserl, Heidegger, Becker, Kaufmann, etc. の印象などそれぞれ興味あり。・・・氏に対し敬意と親愛の感をもつ。帰つてきたのは二時に近い」¹⁾。

実際、書簡の行間には、三宅が下村を親しさゆえに時に軽く冷やかしたり冗談めかしたりするのを、下村はおそらく受け流し、先輩格の三宅の真意をよく理解し、三宅を立てていたのであろう、その感触がうかがわれ、微笑ましい。それは、気のおけない同士のやり取りなのであり、とくに一人離れた仙台にあった当時の三宅にとって、下村は大事も愚痴も本音で語れるほとんど唯一の友人だったであろう²⁾。

しかしそれ以上に二人を結びつけた契機は、二人の哲学観や学界での立場などに見出される共通性であろう。兩人とも、西田門下にありながら、いわゆる「絶対無」の系譜には属さず、草創期には数理哲学を専攻した。東北帝大の理学部で科学概論を講じた三宅は数理哲学から現象学へ進み、戦後には独自の「人間存在論」を標榜する。下村は科学史・精神史に進み、晩年はレオナルド・ダ・ヴィンチやブルクハルトなどの研究に従事した。西田幾多郎に対する敬慕の念でも、三宅と下村は、同門ながら戦後転向した務台理作らの場合とは異なり、終生肝胆相照らす間柄であった。なお、三宅は『人間存在論』（1966）の中で、西田哲学がその動機の真摯さにもかかわらず、論証に関してある種の飛躍を免れていないと批評しているが、これがいわゆる西田批判とは同じ範疇に属さないことは明白である。

また戦前から戦時にいたる思想的激動に際しても、三宅は東北帝国大学に、下村は東京文理科大学に在職し、京都からは遠隔の地にあつて、母校や京都学派の時局に呼応した一連の動きを冷静に見据えることができた。しかし東京は、仙台からみれば（当時は八時間を要したとはいえ）、京都よりはるかに近く、三宅も上京の度に下村の自宅を訪問し語り合った。

学問に厳しく、世間的な権威への反骨を信条とした三宅だが、決して頑迷固陋ではなく公正にして温情の人であった。下村は三宅の性格を「内面的には非常に繊細鋭敏な豊かな情感の持ち主」とであると紹介している³⁾。こうして二人の間には「良質の」友情が一度も損なわれることなく五十年、生涯に渡って続いたのである。昭和57年（1982）10月8日に三宅は逝去したが、学習院創立百周年記念会館での葬儀、そして日本学士院での葬送式に臨んで下

1) 竹田篤司『物語「京都学派」』中央公論新社2001年、261頁。

2) いま一人三宅生涯の盟友をあげれば（先輩格の）高橋里美（1886－1964）である。

3) 下村「三宅剛一——ある講演会での紹介の辞」（『遭逢の人』：下村寅太郎著作集第13巻「エッセ・ビオグラフィック」みすず書房1999年、159頁）

村が読んだ弔辞はそのことをよく示している（下村寅太郎著作集第13巻、455 - 462頁）。

今回公表する書簡（24～106）においても、三宅と下村の共通の体験や、共同研究、あるいは学会における共同プロジェクト、大学での授業や自らの勉強について、そして同門の師友の消息、さらには学生や知人の人物紹介などが綴られてゆく。仙台の風土や哲学的状況などについても三宅はときに雄弁に語り、ときに愚痴をこぼし（下村に聞いてほしいとでもいうように）、東京に出張する日程を告げ、下村を訪ねたい旨を弾むように書き送るのである。時候の挨拶などにしてもけっして型通りのものではなく生の感覚の吐露なのだ。温暖な岡山県南西部鴨方の出身である三宅にとって、仙台の暗く長い冬とその寒さは本当に疎ましかったのであり、春の到来を心底から待ち望むのだった。それにしても、このように本当のことを言い、語り合いたいとお互いが思うことができ、しかもそれが生涯続くという友人関係は、今日はおろか当時でも稀有のことではなかったか。

戦前から戦後にかけての社会、経済、政治の激変や、大学や学界の混乱を乗り越え再建にも関わった三宅と下村の生き様を映す本書簡全106通は、それゆえまた第一級の歴史資料でもある。次に、そこに触れられている主な歴史的事実を概観しておこう。

III

i) まず戦前・戦時の「日本諸学振興委員会」について：これは昭和11年（1936）9月文部省教学局が「国体・日本精神の本義に基づき我が国諸学の発展振興に貢献し、延して教育の刷新に資する目的を以て」設けた学術機関（『人文』第1号書簡[6]注ii）であり、昭和16年からは「自然科学」部門も設けられた。活動として学会や公開講演会を開催した。三宅は「昭和十六年度自然科学部臨時委員」に任命された。『報告第十五篇（自然科学）』（昭和17年11月刊）には三宅や下村の報告もそれぞれ掲載されている。本書簡集でも、各地で開催される委員会への出欠や共同研究などが話題に上がっている⁴⁾。

戦後、連合国軍総司令部（GHQ）により、郵便物の開封・検閲が行われ、三宅と下村の間の文通も例外ではなく、開封され遅配されるものが出た⁵⁾。政治とはほとんど無縁と思われるような一哲学教授の私信まで検閲されることに、三宅もやりきれなさを滲ませる。

ii) 「公職追放命令」について：戦時中「京都学派の四天王」とも呼ばれ、座談会「世界史の立場と日本」を主宰した高坂正顕、高山岩男、西谷啓治、鈴木成高に対して、三宅と下村は一定の距離を置いた（『人文』第1号書簡[17]、[22]）。しかしそれは政治的立場に関する限りであって、同じ京都帝国大学哲学科で学び西田幾多郎の薫陶を受けた門下生として、

4) 書簡6（1941.12.5）、書簡7（1942.2.23）、書簡14（1943.3）、書簡23（1944.6.25）注参照。

5) 書簡44（1946.6.23）、書簡45（1946.8.16）参照。

彼らの行く末に三宅と下村は無関心ではいらなかった（書簡 44）。昭和 21 年（1946）5 月高坂が、8 月高山が「公職追放命令」により京大を免官され、さらに翌昭和 22 年 7 月には西谷が、9 月に鈴木が「教職不適格」と判定され京大を追われた。とくに「教職不適格」の判定とは、「適格審査委員会」が学内に設置され、同僚によってその適・不適格が審査されるという、当事者たちには酷い政策であった。京大文学部における「哲学」の審査委員長は山内得立であり、「西洋史」のそれは原随園だった⁶⁾。三宅も下村も高坂、高山、西谷、鈴木への一連の処遇について、彼らの戦時中の政治的言動を今更批判するよりは、むしろ同情を惜しまなかったようである。そして失職した彼らを、自らの勤務する大学（東北大学法文学部、東京文理科大学）へ呼ぼうとしたのであった。

iii) 「教養部」の設置問題について：昭和 23 年（1948）頃から全国の大学において新制大学への移行に伴う諸問題が起きる。当時の三宅が所属した東北大学でも「教養部」発足の混乱が、また下村のいた東京文理科大学でも新制大学への改組、及びそれに伴う改称問題の混乱が生じている。とくに「教養部」については、理念の問題に加え、誰が担当するか、つまり各学部は新教養部に何人を、そして誰を供出するのかといった一連の深刻な対立を生じた。東北大学の法文学部の場合は、これに三学部（文、法、経済）独立の問題も絡んでいた⁷⁾。

iv) 人事について：しかしこうした歴史の大波に翻弄されながらも、三宅は「学」としての哲学という理念（これを積極的な意味でアカデミズムと呼ぶことができよう）を堅持し、人事には所謂政治的な要素を一切遮断し、純粹に業績と学者としての資質を選考基準にすえて最善をつくそうとする。「情実を離れて客観的に銓衡したいと思つて居ります 日本のも教授に人を得なければ駄目だと思はれます」（書簡 47、1946. 12. 9.）。例えば東北大学法文学部倫理学講座の高橋譲の定年退官（1947. 3. 31）に伴う後任人事に際して三宅は下村に意見を求めたが、その人選の基準は「学問、人物の両面について」なのだった。また哲学研究のスタイルについて、翻訳ばかりやって論文を書かないのでは困るとか、外国のものの紹介ばかりやるのではなく、そろそろ自分独自のものを打ち立てなければ駄目だ、とも強調している（書簡 104、1958 - 64. 7. 20）。

v) 東北大学の哲学教室の代表としての三宅について：昭和 21 年 9 月に法文学部に移籍してからの三宅には、東北の哲学界全体の指導者的存在として、学生・院生の指導や若手研究者の進路上の世話などの“義務”が生じるが、これについても三宅は公平に考え、フェアに対処した。「科学研究費総合研究」の「代表者」として、あるいは全集の監修者（例えば『ディルタイ全集』の計画）として、仙台の若い同僚や卒業生に翻訳や執筆の機会を与えたり、また彼らのために東京の下村への紹介状を書いたりしている。教室人事に際しても東北大の哲学が全体としてうまく機能するように配慮した。例えば哲学第二講座（古代中世哲学史）の

6) 竹田、前掲書、196 - 204 頁。

7) 書簡 58, 書簡 59, 書簡 65 参照。

河野与一の後任人事では、助教授の真方敬道を昇格させ、卒業生の中で三宅が最も評価していた松本彦良を助教授に採用した。つまり三宅は全国から広く人材を得ようと努めつつ、同時に東北大学の卒業生にもチャンスを与えようとしたのだった。

vi) 京大哲学科との関係について：母校京大の哲学に対する三宅の態度は次の三点にまとめられるであろう：1) 師西田幾多郎の人と哲学に感謝と尊敬の念を持ち続けた、2) 同門の先輩、同輩、後輩との善意の交友を維持した（先述のように、たとえ政治的な立場が異なっている、同窓の友として遇した。ただその場合でも、彼らの哲学が拠って立つ前提そのものへの内在的批評を三宅は怠っていない（『人文』第1号書簡[23]）。3) そして公職追放令や教職不適格の判定に際しては、京大哲学の伝統を守らねばという危機感と、その行く末を案じる気持ちを強くした。「それにしても一局に当る人の反感から京都の哲学を見限ってしまふといふのも心ないことのやうに思はれ・・・」（書簡47、1946.12.9.）と三宅は下村にその胸中を語っている。

IV

前章Ⅲで本書問集の歴史的背景について概観したが、もう少し立ち入ってみよう：公職追放処分となった高坂(1946)、教職不適格と判定された西谷(1947)を東北大学法文学部へ呼ぼうと思う、と三宅は下村に相談している。失職し生活の糧を失った同門の面々に同情し、その窮状を救おうとしたのである。（もっとも西谷も高坂もその後間もなく京大に復職し（西谷1952、高坂1955）、仙台へ赴任することはなかったが）。また下村も西谷、高坂、高山を東京文科大学へ呼ぼうと尽力した。本書簡集でも絶えず同門の師友の健康や安否を気遣う三宅の人柄がうかがえる。三宅は京都では彼らを訪ね、仙台では彼らを迎えた。昭和29年(1954)4月哲学哲学史第一講座教授に就任し、京都に33年ぶりに戻った三宅は、同門の面々との旧交を温めるかのようでもあった。学風上の立場や政治的傾向を異にしても、旧友への親愛の情を惜しまない三宅の存在。それは京大哲学科の古き良き草創期の雰囲気、その最後の一瞬の輝きであったに違いない。

三宅は京都帝国大学において（大正5年(1916)～8年(1919)）西田幾多郎を直接の指導教官としたが、隣接講座の朝永三十郎、波多野精一らにも学んだ。また在学中の先輩には山内得立、務台理作、土田杏村が、同級生に濱田與助が、一年後輩には三木清らがいた。卒業の二年後に京都からは遠く離れた新潟高校へ赴任し、さらに二年後(1924)に東北帝国大学理学部へ移り、以来三十年を仙台で過ごした三宅だったが、西田ら旧師の学恩への感謝の念、母校の京大哲学科への（純粋な）帰属意識では他の誰にも引けをとらなかった、と言えよう。

昭和21年(1946)理学部から法文学部哲学第一講座へ移籍した三宅は、名実ともに東北哲学の代表者、ひいては戦後日本の哲学界のニューリーダーの一人となった。そこに、京大

哲学科の再建を担った山内得立からは協力依頼が重ねて寄せられた。三宅は、仙台での勤務と相反しない範囲で協力を惜しまなかった。三宅は集中講義の要請にも応じ、また母校の戦後の一種独特な雰囲気や或る違和感を感じながらも、後輩の学生たちとの接触も気にかけてのだった（書簡 58、1948. 4. 24、書簡 62、1948. 12. 23）。

戦後日本の哲学界の再建に向けた三宅と下村の活動に関して次の二点が注目されよう。一つは、昭和 28 年の「科学基礎論学会」の設立と機関誌『科学基礎論研究』の発刊であった。三宅と下村は同学会の発起人となり、下村は会のネットワークの幹事役を務め、三宅に協力を依頼した。もう一つは昭和 24 年 10 月の日本哲学会設立であり、ここでも三宅と下村は委員を務めた。その初代委員長（1949 - 50）は天野貞祐、第二代委員長（1950 - 53）は務台理作であって、戦後の学界再興にあたっても京大哲学科の出身者が主導的な役割を果たした。同会事務局についても、当時下村が兼担を務めていた学習院大学が十年の長きにわたり、これを引き受けた（1950 - 60）。また文部省の科学研究費総合研究にも積極的な下村は三宅の参加を請うのだった。三宅と下村は揃って学界をリードした。

ところで、今日と事情の異なる当時の様子の一つに、哲学者たちと出版社の緊密な関係があるだろう。八坂浅太郎の起こした弘文堂書房が京都学派を支えたことはつとにしられているが、同社の西谷能雄が東京から仙台まで赴いたり、三宅も上京した際に同社に泊めてもらったりしている。弘文堂書房は京都学派の学者たちの情報の集散点でもあったのだろう。

戦前から戦後にかけて、当時の社会や戦争をめぐる情勢や、軍部に対する三宅の厳しい批判的スタンスについては『人文』第 1 号掲載の書簡（例えば、[17]1945. 1. 10）に現れているとおりである。今回公表する書簡の多くは戦後のものであるが、大学内でも新制大学をめぐる混乱が研究者たちを直撃していることがうかがえる。敗戦後占領軍による主導の下に、帝国大学やその他の旧制大学、そして旧制高校や旧制中学が廃止され、代わって所謂 6・3・3・4 制が導入される。だが、先述の如く、「教養部」の設置政策によって、二年の教養部、二年の専門課程、二年の大学院修士課程というシステムが、その「理念」も必ずしも定かにされぬまま、各大学に押し付けられていった。そして既成の学部から新しい教養部への教員の配置換えが深刻な混乱を招いた。とくに下村の属した東京文理科大学は東京高等師範学校に吸収合併され、「東京教育大学」と改称されるに到る混乱の渦にあった。後に 1990 年代に所謂大綱化に従って多くの国立大学で教養部が廃止され、既存の他学部へ吸収されたり、新学部へ改組・転換された経緯を思えば、まさに歴史は繰り返すと言わざるを得ない。

V

最後に、本書簡集を通じて読み取ることのできる三宅の哲学観、つまり「哲学」という学問はどのように研究されねばならないかという問題について、簡単に確認しておきたい：

まず三宅哲学的方法的柱ともいうべき、厳密な論証（論理の飛躍は絶対許さない）という格率があげられる。多産な下村から次々と送られてくる著書や論文に対して、三宅は、下村の直観的ともいうべき理解力や議論の速さに好意的な感想を述べるが、他方、言葉を選びながらやんわりとその「急行列車調」（『人文』第1号書簡[23]）、つまり主張の根拠付けが必ずしも十分ではないと思われる点を指摘している。高坂正顕の書作についても高坂一流の（どんな難解な哲学をも噛み砕いて示し得る）「顎の力の強さ」（下村『遭逢の人』著作集第13巻、170頁）に感嘆しつつ、だが「どこかうますぎる」（書簡49、1947.3.9）と首を傾げている。しかしそれは批判のための批判ではなく、立場や特徴を認めあった上での、哲学そのものをめぐる率直な感想であり、改善への促しなのである。

三宅は、少壮期の数理哲学や新カント派の研究、フッサール現象学の研究、そして中期の『学の形成と自然的世界』（1940）に結実する西洋哲学史研究を経て、戦後法文学部に移籍する前後から、彼独自の「人間存在論」の構築へ向け徐々に助走を始めてゆく。それとともに三宅哲学の展開（あるいは転回）を考える上で注目すべきは、イデアリスティッシュな要素や論理的な要素に対して、むしろその根底に何らかの「経験的なもの」を看取り、その記述に努めるという方法的価値観への移行が模索され、その経過が本書簡集にもうかがえる点である。「〔ヒュームを演習で扱うことによせて〕今頃自分の考が経験論に同感するところが多くなったことに気がつきます」（書簡54、1947.9.6）／「とにかく僕はだんだん経験論的な見方に親しみを覚えるやうになりました」（書簡62、1948.12.23）。こうしたいわば〈経験論的転回〉は、よく見られるような、若い時には観念論的だったり理想主義的であった人が、年齢を経、世の中を知るにつれて経験論に転じた、という類の話ではない。いま詳述する余裕はないが、三宅のそうした「経験的現実」への志向はむしろ生来のもので、幼少時に生家の没落により「死の意識」、「世間的なもの一切への嫌悪感」（長男・三宅正樹教授）をいただくようになったことに由来している。そこには三宅特有のベシミズムが定在するとともに、学問への妥協を許さぬ彼のリゴリズムもまたこの原点からきているように思われる。

京都学派あるいは西田幾多郎門下生にあって、三宅は日本思想に深入りしなかったほとんど唯一の存在だった。哲学者三宅にとって理由は明快であって、「哲学」はギリシア起源の、つまり西洋のものであり、論証性と体系性を属性とする「学」(Wissenschaft)であって、それはまず自然的世界を問いの主題としながら形成されたからである（それがギリシアからカントまでの哲学史の本流である）。そんな三宅が或る人物を評して親友下村にふと吐露した次の言葉は注目すべきである：「僕としては佛教的な方面へばかり頭が向いてゐさうなのでそれでは少しどうかといふ懸念もあるのですが・・・ 西洋思想を批評する人には西洋的なものには kritisch でありながら東洋とか佛教とかには頭から平身低頭ただ有難がつてゐる傾向があり これでも困ると僕は思つてゐるのです」（書簡53、1947.8.24）

また本書簡集は、「学者」というものを三宅がどう考え、どう生きたかをよく示しており、

興味深い。大学では講座の長として若手や後進の世話と指導にあたり（人事や科学研究費共同研究の人選なども含まれる）、学期中は講義と演習の準備に追われ、同時に学生の論文指導等に当たらねばならない。そして学会や文部省関係の会合への出張、さらに出版社や学会関係者や（下村などの）友人から頼まれた原稿の執筆、と引きも切らない。夏など学校の休みは、自分の好きな読書ができる待望の時間なのであった（それも体調や用事で妨げられることがしばしばあったが）。自由になる時間の比較的多かった理学部時代(1924-46)と異なり、法文学部に移ってから(1946-54)は東北哲学界の代表としての責務が加わる。そこには東北大の哲学を発展させねばならないという使命感もあった。しかし当時の関係者が一様に証言するように、これほど多忙だったにもかかわらず、三宅は学生などの来訪者には時間を割き、決して時間がないという素振りは見せなかった。それは京都に移ってからも変らなかったようである。京大の哲学の伝統を守らねばならないという責任感、京都学派の面々のなかでも人一倍強かったのである。三宅はことさらに良き教師であろうと意図したわけではなく、彼自身の学問観と人間としての良心から学生に接したのであるが、これも多くの証言によれば、三宅を訪ねた若き哲学徒たちは心動かされ、先生に親愛の情を抱かずにはいなかった。三宅には天賦のパイディアの才が備わっていた、といえよう。

三宅は、学者は行政や一般向けのものばかりやっていてはいけない、外国の学者のものばかりやって、「齢重ねれど学問は自分のものにならず」というのではいけない、自分がどう考えるかを問題にしなければならないと信じ、且つそう教えた。原典の厳密な読解も、そのためのものであった。このような意味で、西田の言う「自ら考えよ」Selbst denken という格率を三宅は真直ぐに受け継いでいるのである。

学習院大学の教授を務めていた頃(1958-65)、京大哲学科の後輩にあたる小島威彦（昭和2年卒）が、旧幕臣の三男という出自による人間関係を活かし、学者、政界、財界、大学人からなる「国際哲学研究会」を設立した。小島は外国の著名学者の招聘や研究会の組織作りを進めようと、三宅にその「会長」就任を要請した。しかし三宅は小島の中に、およそ学者には異質の一種胡散臭さを感じ取ったのかもしれない。下村に次のように伝えている：「私はさういふ事業的なことには全く興味が無いのです。そればかりでなくさういふ事業団体の会長となる（別に外的に働くのでなくても）のは自分の気持ち一大げさに云へば学究としての自分の志操に反することです。事業は事業として、哲学の傳達普及及び宣伝の仕事として意味はあるでせうが それは私のたずさわるべき事ではないと思ふのです。先師の本や論文を外国語に訳して出すこともいいことではあるでせうが、師に対して我々の第一義的にやるべきことは先師の哲学の研究検討と、師が考へたことを自分で考へることによって自分の道を見出すことだと思ひます」（書簡 104, 1958 - 64. 7. 20.）。哲学の研究は「一般の読者聴衆に対して哲学を説く」ことと同じではない。むしろ哲学者が先人の業績をふまえたうえで自分はどうか考えるのかを問い、自分の哲学を構築するのでなければならない。そのためには哲

学者自身がもっとわが身を削って勉強しなければならない。だから国際哲学研究会というような場も「同輩に対して発表をし、批評をきき、真剣に論議する」場でなければならない。六十余年を哲学の勉強に捧げて悔いなかったといわれる三宅の信念から発する言葉だった。

生前、ジャーナリズムには一切とっていいほど書かず、発表や執筆も自分が本当に納得したとき以外は断り、減多に書かなかった三宅であるが、しかしそれは単なる固陋や人付き合いの悪さから来るものではない。むしろ三宅ほど立場の違いを超えて信頼され、多くの友人に恵まれ、そして後輩や学生に慕われた哲学者はいなかったし、今後もおそらく出ないのではあるまいか。

学問としての厳しさ、それはまた同時にひたむきに問い究めることであり、しかもそれが「哲学」であるからには、問いは哲学する者その人自身から発する問いでなければならない。しかし三宅のリゴリズムは、人間を人間としてその弱さや未熟さのままに受け入れ、人を人として遇する良心の立場からするものでもあった。三宅の著作やまた本書簡集にも垣間見られる機知やユーモア、あるいは鋭い人間観察、そこから来るやんわりとした皮肉、そこに定在するのはペシミズムのためのペシミズムではなく、人を刺し傷つけるそれでもなく、どこまでも良心からするペシミズムであった。晩年の労作『道徳の哲学』(1969)が示唆するように、三宅哲学にとって「良心」への視点こそ「超越」への視点にほかならなかった。哲学することと生きること、読書を行じ、他の学説を批評し、自分の考えを鍛え、そして他者を人として遇し共感するがゆえにみせるほのかな温かさ。本書簡集は、そのような三宅の人と哲学が現代のわれわれに宛てた静かなるメッセージでもあるだろう。

付 記

書簡の配列、日付、宛名などの扱い、また翻刻にあたって書簡本文の文字、語句、表記などの処理などについては『人文』第1号掲載の「三宅剛一差出・下村寅太郎宛書簡(上)」の「凡例」において示したとおりである。

本誌への掲載を御許可くださった御遺族の明治大学名誉教授三宅正樹氏、ならびに下村克郎氏にあつく御礼申し上げます。とくに三宅正樹氏には私の三宅剛一研究に常に多大な御理解と御助力をいただいているが、本書簡集についても貴重な御教示をいただいた。

下村の遺稿の整理中に本書簡群を発見され、調査・翻刻のために閲覧を快諾され、様々な資料や証言を下さり、本書簡の翻刻・校訂の作業を常にあたたく見守りサポートして下さった竹田篤司教授(明治大学商学部)は、平成17年(2005)6月3日膵臓癌のため急逝された。御享年七十歳。教授は、故下村寅太郎博士の愛弟子の一人として早くからデカルトを中心とするフランス思想の研究や西田幾多郎研究、そして多くの翻訳書で知られ、また『下村寅太郎著作集』全13巻(みすず書房、1988-1999)の編集を主宰された。晩年は新版の『西田幾多郎全集』全24巻(岩波書店、2003-)の編集者の御一人として書簡集を担当され、そ

の完成に意欲を燃やしておられた。その広く深い学識と確かな鑑識眼、推敲を重ねた流麗な文体、そして飾らず温かなお人柄を想えば、御逝去はまさに学界の痛恨の損失であると言わざるをえない。私が教授に初めてお会いしたのはちょうど二十年前の晩秋の京であったが、以来御交誼と激励、そして多くの御教示をいただいた。訃報はまさに晴天の霹靂であって、深い痛惜の念におそわれた。いまはただ教授のご冥福を改めてお祈りするばかりである。

その他にも本書簡集の翻刻や校訂の諸段階において御助力や御教示をいただいた方々にも、いちいちお名前はあげないが、深く御礼申し上げたい。

三宅差出・下村宛書簡：参照資料一覧

〔本書簡集に最も直接に関係するものに限定した〕

- 和泉良久『無限論Ⅰ』（創文社 1966）
- 白井二尚『白井二尚論攷抄』（白井光郎・世界思想社 1999）
- 白井二尚「留学当時の思い出」（『哲学研究』第 550 号（1984）、551 号（1985））
- 学習院大学五十年史編纂委員会編『学習院大学五十年史』上下、平成 12 年（2000）
- 学習院大学文学部編『学習院大学文学部研究年報』
- 木田元『闇屋になりそこねた哲学者』（晶文社 2003）
- 教学局編纂『日本諸学振興会研究報告』第 15 号（自然科学）、昭和 17 年（1942）11 月
- 京大以文会『会員名簿』昭和 61 年（1986）
- 京都大学文学部哲学科編『哲学研究』
- 『京都大学文学部学生便覧（講義題目）』
- 小島威彦『百年目にあけた玉手箱』第 6, 7 卷（創樹社 1996）
- 酒井修「追悼 三宅剛一先生を偲ぶ—京都時代の思ひ出—」（『理想』1982 年 10 月、161 - 163 頁）
- 酒井潔「西田幾多郎と三宅剛一」（『学習院大学史料館紀要』第 12 号 2003、1 - 67 頁）
- 酒井潔「岡山出身の哲学者三宅剛一の生涯と思想Ⅰ—若き三宅におけるライブニッツと現象学の受容」（山陽放送学術文化財団「リポート」第 35 号 1991、1 - 4 頁）
- 酒井潔「西田幾多郎と三宅剛一—「歴史」ということをめぐって」（『西田哲学会年報』第 5 号、2008、21 - 43 頁。）
- 下村寅太郎『西田幾多郎—同時代の記録—』（岩波書店 1971）
- 下村寅太郎『遭遇の人』（南窓社 1970）
- 下村寅太郎『下村寅太郎著作集』第 13 卷「エッセ・ビオグラフィック」（みずず書房 1999）
- 竹田篤司「下村寅太郎の百年」（『下村寅太郎著作集』第 13 卷）
- 竹田篤司『物語「京都学派」』（中央公論新社 2001）
- 竹田篤司「新発見資料に基づく「京都学派」の基礎的研究—西田幾多郎から下村寅太郎まで—」（科学研究費補助金研究成果報告書、平成 13 年（2001）7 月）

- 『東北大学五十年史』（1960）
- 東北大学法文学部略史編纂委員会編『東北大学法文学部略史』（昭和 28 年（1953））
- 『東北帝国大学一覽（自大正十三至大正十四）』
- 中村元・武田清子監修『近代日本哲学思想家辞典』（東京書籍 1982）
- 新田義弘・河本英夫「哲学と反復—〈現象学運動〉の形成と変貌」（『現代思想』2001. 12 臨時増刊 青土社）
- 日本哲学会編『哲学』
- 林竹二「法文の思ひ出」（『東北大学法文学部略史』1953）
- 三宅剛一「思い出すまゝ」（『西田幾多郎全集』「月報」昭和 28 年（1953）4 月）
- 三宅奈緒子『風知草—三宅奈緒子歌集』（短歌評論社 1998）
- 三宅正樹「あとがき」（三宅剛一『経験的現実の哲学』弘文堂 1980）
- 遊佐道子『伝記西田幾多郎』（『西田哲学選集』別巻一、燈影舎 1998）
- A.Heinekamp (Hrsg.), Leibniz Bibliographie, Klostermann, Frankfurt a.M. 1984.



三宅剛一 昭和 25 年（1950）頃



昭和 43 年（1968）箱根にて
（右から）三宅剛一、下村寅太郎、下村知恵

三宅剛一差出・下村寅太郎宛書簡

1 (『人文』第1号 [1])

2 (『人文』第1号 [2])

3 (『人文』第1号 [3])

4 (『人文』第1号 [4])

5 (『人文』第1号 [5])

6 (『人文』第1号 [6])

7 昭和17年(1942)2月23日付 [葉書]

東京市杉並区和泉町四七五 下村寅太郎様

仙台中島丁五〇 三宅剛一

先日は Haldane¹⁾ の本御送り下さいましてどうも有りがたう 我々が知ってゐるのは J.S.Hal. でこの先生が J.B.S.Hal. といふので中々まぎらはしい話です 私の生物哲学²⁾ もものになりさうありません

「科学史の哲学」³⁾ が大評判で大へんうれしく思つて居ります いまに精神史的科学史学派などといふものが出来るかも知れませんね

例の振興会⁴⁾ の講演は面白い腹案が出来ましたか 僕の方は三十分の話とは凡そ不似合ひのもので やってみれば自分には面白いやうに思はれるけれど他人にはまるで興味ないものでせう⁵⁾

やっと学校の講義⁶⁾ が終り少し時間が出来ましたが これも短い生命です

クザヌスは私だけは少くとも一部ほしいと思ひますが他の人々にはそのうち聞いておいて希望者があつたら願ひしませう⁷⁾

1) John Scott Haldane (1860-1936) イギリスの生物学者。

2) 書簡13 (『人文』第1号書簡[10]) (昭和18年1月17日付) でも三宅は(近代科学における)生物学の重要性を指摘する。

3) 下村寅太郎『科学史の哲学』(弘文堂書房、1941年11月)。

4) 日本諸学振興委員会。書簡6 (『人文』第1号書簡[6]) 脚注ii参照。教学局編纂『日本諸学振興委員会研究報告』第十五篇(自然科学)(内閣印刷局昭和17年11月10日刊)には、三宅が「十九世紀に於ける科学哲学の趨勢」(16-32頁)、下村が「科学の重層的構造について」(220-230頁)と題し、それぞれ同会での講演原稿を寄せている。

5) 第一回自然科学会が昭和17年(1942)3月24-26日東京帝国大学にて、第一回自然科学公開講演会が同年3月26日共立講堂にて開催された。

6) 三宅が大正13年(1924)5月から昭和21年(1946)9月まで所属した東北帝国大学理学部における「科学概論」の講義。

二月二十三日

今日あたり大分寒さが和らぎ庭の雪もとけさうです。

8『人文』第1号〔7〕

9『人文』第1号〔8〕

10 昭和17年（1942）8月中旬または下旬付〔推定〕〔封書・便箋2枚〕

東京市杉並区和泉町四七五 下村寅太郎様

仙台中嶋丁五〇 三宅剛一

御手紙ありがたう 今年の東京の暑さは相当のものであったやうですが御元氣の様子で何よりです こちらもまだ中々暑く勉強もあまりやれません 汗を流しながらでもどんどん仕事をするといい人々も多くあることでせうが私などはどうもその仲間ではなささうです

公用の件は別に義務はなくてたゞ「名譽」だけといふのですから私でよければ御受け致しませう

例の諸学振興会の委員会⁸⁾が九月一日にあるといふ通知を受けましたが東京の暑さを思って今度は欠席することにしました 東京へ行く楽しみは友人と会ふことですが この頃はどうかやうやら東京の方からこちらへ出かけて呉れる風向きになったので 地元で会へるといふ甚だ都合のよいことになったので当分その方に従ふことにしませう

休暇も殆どつきようとし何もやれないので辞書原稿でもと思ふのですがこれまた独学〔で〕非常に悪くあゝと嘆息するばかりです それにつき甚だ御面倒ですが いつか文理科へ出かけられたときそちらに Pauly-Wissowa, *Realenzyklopädie der kl. Altertumswissenschaft* の中で $\phi \upsilon \sigma \iota \varsigma$ の項の出で居る巻があるかどうか一度見ておいて下さいませんか もしあったら「自然」の項の参考のためちょっと拝借してみたいと思ふのです

東北御旅行の日どりはいつ頃になりさうですか 一緒に行けたら大にいいのですが今度はどうもムツケしいでせう

では御大事に

三宅剛一

下村寅太郎様

7) 授業の教材のこと。当時下村の勤務する東京文理科大学では、下村の指揮のもと研究室（助手）で一括してテキストを購入していた。竹田篤司編「下村寅太郎の百年」（『下村寅太郎著作集』第13巻、みすず書房1999年）。

8) 三宅は「昭和十六年度自然科学部臨時委員」に任命されていた。

11『人文』第1号 [9]

12 昭和17年(1942)9月21日消印 [葉書]

東京市杉並区和泉町四七五 下村寅太郎様

仙台市中島丁五〇 三宅剛一

御手紙有りがたう、いよいよ二十五日に東京御出発に決定しましたよし、こちらで御会ひ出来るのを楽しみにして御待ちして居ります 仙台ではいつまで居られますか こちらでも松島位はどうしても見ておかねばならぬので少し時間がほしいと思ひます 仙台以後の御予定はどうなつてゐますか 北海道はもう少し寒くなりかけてゐるでせうから 多少その用意も必要かと存じます⁹⁾

13『人文』第1号 [10]

14 昭和18年(1943)3月付 [推定] [封書・便箋3枚]

東京市杉並区和泉町四七五 下村寅太郎様

仙台市中島丁五〇 三宅剛一

先日は御手紙をありがたうございました 少し御身体を悪くされたとのこと何だか多少心配ですが大丈夫でせうか 勉強の方も少し息をいれてゆっくりして休養なさるのが第一と存じます 御出京¹⁰⁾以来筆に講演にデモニッシュな活動をされたこと故一と息いれる時に達して居るのではないか、とこれは又休息ばかりして居る小生の推察です

いづれにしても当年の時世では健康が生活のモチで無理は出来ないわけですから呉々も御大事になさって下さい

容体診察をかね上京でもしたいものですがいまのところちょっと出かけかねます 例の自然科学会が六月下旬東京にある筈ですからその前に委員会¹¹⁾もあるでせうし四月か五月頃には上京するかも知れません

私の本が國民学術協会で表彰されることになったさうで私にも西田先生から知らせて下さいました 恐らく西田先生の推薦といふことでさうなつたのでせうが 全く予期しないことで 今でもあゝいふ本をひろひ上げる協会があつたのかと意外の感じがしました(西田先生の推薦の動機はどうやらそこら辺にありさうですね)でもまあ大に感奮しておくつもりです¹²⁾

9) 昭和17年(1942)9月下村は妻知恵を伴い、北海道を旅行する。竹田編「下村寅太郎の百年」。

10) 昭和16年(1941)3月下村は、高坂正顕の後任として、東京文理科大学助教授に就任していた。

11) 日本諸学振興委員会自然科学会。

序ですが先日京都の教授会¹³⁾で私の論文の審査が〔以下紛失〕

．．．

差上げましたがその後「科学史研究」を偶然開いてみるうちそこにちゃんと「辞典」の計画のことが書いてありそれをまるで見てゐなかつた自らの迂カツさをあきれた次第です 更に二三日桑木さんの署名入りの趣意書が来ました。貴方には遠慮のないまゝにあゝして勝手なことを云ひましたがこの様子ではまだひつつかまることを覚悟しておかねばなるまいといふ気がして居ります しかし何れにせよ私の本音は前に申上げた通りなのですから何かのときは私のためよくかばって下さることお願い致します

東京はもうよほど暖かでせうね こちらはまだまだ〔以下紛失〕．．．

15 昭和 18 年（1943）3 月 31 日消印〔葉書〕

東京市杉並区和泉町四七五 下村寅太郎様

仙台市中島丁五〇 三宅剛一

拝啓 その後御身体は如何ですか 既に弘文堂の方からお傳へしたかも知れませんが例の文部省の委員会が四月六日にあり、国民学術協会の集まり¹⁴⁾が九日夕にあるので両方をかねて六日に上京致します いまの予定では八日に鎌倉の西田先生をお訪ねしたいと思って居りますが御一緒にどうでせうか もし御都合が悪くて私だけ行っても八日の晩は御宅に御厄介になりたいと思って居りますが御差支ないでせうか

16 昭和 18 年（1943）4 月 4 日付〔葉書〕

東京市杉並区和泉町四七五 下村寅太郎様

仙台市中島丁五〇 三宅剛一

先日、八日に鎌倉まゐりをする様に申し上げましたが 八日は少し都合が悪いことになりましたので 七日に行くつもりです 七日は水曜日ですが学校がない日でしたら一緒に如何ですか 私は多分十二時すぎの汽車で東京を立って 鎌倉へゆくことになるでせう いづれにしても八日の晩には御宅へ御邪魔したいと思って居ります。

四月四日

明晩の夜行で仙台を立ちます。六日中には電話で弘文堂に連絡する筈です。

12) 昭和 18 年（1943）2 月、財団法人国民学術協会昭和 18 年度「国民学術協会賞」受賞が決定し、推薦した西田も喜んだ。西田差出三宅宛封書昭和 18 年 2 月 13 日付、酒井潔「西田幾多郎と三宅剛一——伝記的研究の試み」（『学習院大学史料館紀要』第 12 号、2003 年）53 頁を参照されたい。

13) 昭和 18 年 2 月京都帝国大学文学部教授会は、『学の形成と自然的世界』により、三宅に文学博士の学位を授与することを満場一致で可決した。

14) 昭和 18 年（1943）4 月 9 日東京丸の内では表彰式があり、受賞した三宅他二名にそれぞれ表彰状並びに賞品として賞牌と副賞壱千円が贈呈された。

17 昭和 18 年（1943）4 月 23 日付〔葉書〕

東京市杉並区和泉町四七五 下村寅太郎様

仙台市中島丁五〇 三宅剛一

先日は大へん御世話になりました あの日は無事に上野から乗車して帰りました 帰仙後の二三日ひどく寒く、旅行の疲れもあって少し風邪気味でしたがもう元気になりました

きのふ西谷（能）¹⁵⁾君が来てまだ滞在して居ります「哲學年鑑」を西谷君に？して御送り致します どうも有難うございました

先日御話のあった法文学部の聴講生（これが専科生に当る）のことをきいてみましたが、選抜試験に國語讀文、外国語、及び（法学通論、經濟通論、哲学概説中の一つ）があり競争は中々はげしい（十五人に一人とか）さうです。外に専攻生といふのがあり、これは擔任の教授が相当の学力ありと認めたものを（其他大学の卒業生など）〔入〕れるので原則として一学期を期間とし、繼續するには毎学期出席許可を得る必要があるさうです。もっと具体的なことが必要な〔とき〕は又きいてお知らせ致します

四月二十三日

18 昭和 18 年（1943）5 月 27 日付〔推定〕〔封書・便箋 2 枚〕

東京市杉並区和泉町四七五 下村寅太郎様

仙台市中島丁五〇 三宅剛一¹⁶⁾

御ハガキ拝見致しました 東北旅行はどうも秋になるらしいとの事でせっかく青葉城下の初夏を御見せしようと思つてゐたのに残念です しかし私は今のところとても北海道行きの御伴は出来さうもないので その方は「失望」したわけではありません

高坂君が三十日に来仙せられるので哲学の連中と滞仙中のプランを考へてみましたが何しろ三十日午後文化講義、三十一日平泉見物といふわけで仙台でゆっくりしてもらふことは出来なささうです あなたが御一緒にでも来られる様ならとそれを楽しみにして居たのですがこれはあきらめる外ない次第です

この頃は授業労働とその準備で日がたつてしまひ 自分のことは何も出来ません 外の人々はどうしてあゝうまく仕事が出来ると不思議でなりません

クザヌスの代金おそくなって済みませんでした まだ少し未拂の人もありますが 面倒ですから十四部代五十六円為替で御送り致します

この頃はいかにか、古本は見つかりませんか ホールデエンの本はもう暫く拝借しておいてよろしいでせうか

15) 西谷能雄は、京都の出版社である弘文堂書房の編集者。京都学派の面々と交流があった。

16) 封筒に「書留、仙臺大學病院内 211」という印が押してある。

それでは又、奥様によろしく 子供¹⁷⁾が御邪魔して御ち走になりましたさうでどうも有が
たうございました

五月二十七日

三宅剛一

下村寅太郎様

19 『人文』第1号 [11]

20 昭和19年（1944）3月5日付〔封書・便箋（現存4枚、途中欠損）〕

東京都杉並区和泉町四七五 下村寅太郎様

仙臺市中島丁五〇 三宅剛一

拝啓、しばらく御無沙汰しました 御元気でせうか

先日弘文堂の人が来て大兄の御尊父様が御亡くなりになって京都に歸ってゐられると
のをき、驚きました¹⁸⁾ 父君が生きてゐられて 京都に歸ったりまた東京に御迎へしたりす
ることの出来る御身分を羨しく思つてゐたのですが¹⁹⁾ 大兄もまた遂にその幸福を失はれ
たのかと同情に堪へません いつか御宅に行つたとき奥の部屋で声がしてゐたのが父君では
なかったかと思ふのですが その時の感じではまだ中々お元氣のやうに思ひましたが 御病
氣はどういう風だったのでしょうか

待望の「無限論の形成と構造」²⁰⁾御送り下さいまして誠に有難うございました ごたごた
した用事があつて一通り目を通すまでに暇がかゝり御礼がおくれてしまひました まだ精讀
はしてゐませんが大部分の論述に対しては 啄木ではないが ふる里の山に向ひていふこと
もなし といふ気持ちです たゞその古里の山河が美事な照明や氣の利いた展望台を得て一
目瞭然誠に見通しがよくなつてゐるので快く一めぐりして懐しい思ひを味はひました

歴史的敘述の部分は手に入つたものだと感じました コントラストによって輪割を浮き出
させる下村式スタイルがよくその効果を發揮してゐると云ふべきでせう これまではっきり
しなかつた点で大に啓発せられたものが少くありません 數學基礎論の部分もこれほど明確
に原理的な観点をよく捉へた敘述を得たことは我国で始めてのことだらうと思ひます

最後の二章は筆者の哲學的思想の表白としての力のはいつたものだと思います たゞこの
部分はいづれもっと色々な問題と聯関させて ausführen されることであらうと期待して居り

17) 昭和17～18年長女奈緒子は東京女子大学大学部国文科に在學していた。

18) 昭和18年12月31日下村の父・下村利三郎没、享年71歳。

19) 三宅は新潟高校在職中の大正11年（1922）8月13日郷里・岡山県鴨方町の父嘉六を失つてい
る。享年67歳。

20) 昭和19年2月下村の『無限論の形成と構造』（弘文堂書房）が刊行された。

ます 無限の二つの型を無限の二側面と考へる考方は全く同感です 象徴といふ思想もほゞ理解出来る気が致しますが 超越者といふものを考へるにはそれに至るべき哲学的な誘導が相当に必要ではないかといふ気がします (本書にもそれは勿論ないではありませんが) まだこの当りは精しく拝見してゐないので何とも云へませんが その辺のところに残された問題があるかと思ひます。全体として誠にまとまりのよい そして中々スマートな作で一夏?のうちにこれだけのものを作り上げられた手腕に [途中欠損]・・・

・・・まいと思ふのですがどうでしょうか それでクロネッカーを引合ひに出してありますが それはクロネッカーから云へば逆手をとられた形で Betonung のおき方が逆になってゐるのではないでせうか

一六一頁、「形式化としての記号化は記号によって一定の思想を置換へるのではなく、正に記号的に構成するのである」 記号の選び方から云へば構成にちがひありませんが、しかし Beweistheorie で解析の公理系を記号化するときは、ヒルベルト自身、普通の数学を ausmachenする Gedankenの Abbildenだと云つてゐる (*Die Grundlage d. Math.*, 1928)やうに、数学の推理そのものを記号的に寫す意味があり、さうでなければ証明論の意味はなくなると思ふのです。尤もそれ位なことは今更いふまでもないことですが、この辺の叙述は多少誤解のおそれがありさうに思はれます

一七八頁、公理主義では存在は要請的存在であり、それは思惟可能性を究極的制約とする、さうしてそれを与へてゐるものは純粹思惟の外にはないとあるのは正にその通りですが、無矛盾性即思惟可能性といふとその思惟は正に可能性に於てみられたる思惟であり、かゝる思惟について未完結性といふことがいへるかどうか

$\{0\}, \{0\}\cdots\{0\}$ の形をとる思惟は勿論未完結ですが、思惟可能性といふときの思惟とそれとがすぐ結びつけられるものでせうか 無矛盾なるものは思惟可能なるもので、かゝるものは存在するといふときの可能は純粹に論理的な可能であり、作用性とか過程性とかを顧慮しない意味での思惟ではないでせうか。

ラッセルは order といふものを認めてゐますが ラムゼー其他は最早それを無視して居り、まして公理主義としては要請せられる自己整合性即存在は未完結的な思惟にかゝりなく考へられてゐるのではないでせうか

証明論そのものの思惟は inhaltlich な推理でそれは勿論過程性をもつものですが それと思惟可能といふときの思惟とは別なものだと思ひます 思惟可能なるもの、整合的なものの「存在性」の要請を「支へてゐる」ものはむしろ一つの Glaube であり、~~それが論理的には Postulat といふ形で現はされるのではないでせうが~~ この Glaube そのものは無矛盾性の証明によって begründen されるものではないのでせう

全体の論旨から云へばこんなことはたゞ言葉じりのやうなもので大したことではありませんが 讀過の際漠然と感じたまゝを書いてみました へんな思ひちがひをしてゐたら御教示

を願ひます

次第に色んなことが窮屈になって来ましたが 甘党の下村先生この間に虜していかになし居らるるや？ いつどういふことが出て来るのか 先のことは暗でたゞ一日一日を過してゐる有様です

交通が不便になって何だか東京も急に遠くなったやうな感じです ヤンキーの飛行士が和泉町のあたりを素通りする様にさせたいものです

先日少し暖かくなったやうでしたがこの二三日又寒くなって来ました

そちらは如何ですか 御身体をお大事に

三月五日

三宅剛一

下村寅太郎様

21 昭和 19 年（1944）3 月下旬付〔推定〕〔葉書〕

東京都杉並区和泉町四七五 下村寅太郎様

仙台中島丁五〇 三宅剛一

拝啓、少ししのぎよくなりました 御変りありませんか

筆まめな學兄よりこゝしばらく御便りがないので少し心配になって来ました 東京へ出かけることも六ヶしくなったのでせめて手紙でも話をしたいと思つてゐます 出来るだけ細しい長いお手紙をいたゞきたいものです

今週あたりから休みにになりました、弘文堂の世界史講座もホソボソ存在を續けるらしいのでヒストリスムスのことでも少し勉強しようかと思つて居ります²¹⁾

先日御高著への御礼の手紙は着いたでせうか この頃は手紙を出してもいつ着くのか、果して着くのかといふ気がしてなりません

仙台はいつまでも寒く、毎年のことながら彼岸になつても春らしくならぬのはいやな気もちです

22 昭和 19 年（1944 年）5 月 29 日消印〔封書・印刷挨拶状〕

東京都杉並区和泉町四七五 下村寅太郎様 智恵様

仙台中島丁五〇 三宅剛一

21) 昭和 19 年（1944）弘文堂の世界史講座のために三宅は長編論文「歴史主義と近代ヨーロッパ」を書き下ろした。戦局の悪化のためか出版されることなく、未定稿のまま遺品に含まれていたが、平成 14 年（2002）京都哲学撰書『三宅剛一 人間存在論の哲学』において初めて公表された（酒井潔編、燈影舎、78-128 頁）。

謹啓 新緑の候愈々御清祥の段奉慶賀候
陳者今般山田光雄様御夫妻の御媒酌により孝長男啓一郎と剛一長女奈緒子との婚約相整ひ
本月十四日仙臺に於て結婚の式を執り行ひ申候
就ては當日御來駕をお願い申上く可の處時節柄其の運びに至り兼ね候間
甚だ略儀ながら書中を以て御挨拶申上候
昭和十九年五月吉日 敬 具

星 島 孝
三 宅 剛 一

奈緒子は本当に御世話様になりました。又先日は得がたい何よりも有がたいお祝ひを頂き
まして、感謝の外なく存じます。三宅は上京致します度御世話様になり皆様のお心をひたす
ら感謝申上げて居ります
落ちつきましたらゆっくりお礼をなど思ひつゝ、つい失礼申上げて参ります 文世

23 昭和 19 年（1944）6 月 25 日消印〔葉書〕
東京都杉並区和泉町四七五 下村寅太郎様
仙台中島丁五〇 三宅剛一
（こちらの哲学卒業生の松本²²⁾といふのが上京の際お訪ねしたいと云って居りましたから
その節はどうか宜しく願ひします。）
拝啓 先日の御手紙拝見しました
「近代科学の哲学的問題」は小生との合同研究といふことゝなりました由、どうもこれは
下村委員に一つやられた形です とに角主体は下村先生といふことゝし 小生は補助といふ
ことに願ひたいものです
それにしても近く御来仙の御予定とのこと、鶴首してお待ちして居ります 成るべく早く
御出かけ下さい 宿は引受けますから少しゆっくり滞在して東北の文献でもあさられたら
いい、でせう

24 昭和 19 年（1944）7 月 22 日付〔推定〕〔封書・便箋 3 枚〕
東京都杉並区和泉町四七五 下村寅太郎様
仙台中島丁五〇 三宅剛一
拝啓、雨ばかり降って陰気なことですが御変わりありませんか 例の文部省の研究題目に
つき今日通告があり、請書と同時に研究要項と助成金使用予定計算書を至急に出せと云って

22) 松本彦良（1919－1957）。第一高等学校、東北帝国大学卒。昭和 25 年（1950）、河野与一の退官にと
もなって、東北大学法文学部哲学第二講座（西洋古代中世哲学史）助教授となる。三宅はその将来
を嘱望していたが、脳腫瘍のため 38 歳で急逝し、三宅を悲嘆させた。

来ました これは大兄の方へも来て居ることゝ存じます 私だけでは何分さっぱり見当がつかず返事を出すまでにはかねて御約束の相談をしなくてはなるまいと思ふのですが 御都合がついたら出来るだけ早く御来仙を願ひます とにかく何日頃御出で下さるか御一報下さい

昨日弘文堂の大洞君が来て その話では末綱さんも御一緒に御来仙せられるとのことで、もしさうなれば末綱さんの方は旅館か御宿でせうから御来仙の日が決ったら私から宿を予約しておいても宜しい。大兄には是非小宅に泊っていたゝきたいと思つて居ります 一週間近い滞在なら助成金をもらへますから長期の方が好都合です

とにかく至急に御都合御知せを願ひます 私はその間はお勤めは全休で毎日家に居ります 尚御来仙の折お手数ながら前一度御借した Haldane の *Sciences and Philosophy*²³⁾ をご持参下さいませんか

まだ色々申すべきことはあるやうですが近く御目にかゝれることもあてにしてその時に色々

七月二十二日

三宅剛一

下村寅太郎様

25 『人文』第1号 [12]

26 昭和19年（1944）8月17日消印 [葉書]

東京都杉並区和泉町四七五 下村寅太郎様

仙台市中島丁五〇 三宅剛一

御手紙只今拝見、金澤ならといふことで私は出席する様に通知し、宿も文部省にたのんでおきました。出来たら金澤で一緒になりたいものです²⁴⁾ 成るべく御出かけになるやう。私は十四日の午後着十七日朝出発としておきました。一緒になれたらどこかで一晩位落ついてもよろしい。

それから文部省から丁度今日助成金を交付するといふ通知がありました。金はまだです。（三、〇〇〇円）

この節の旅行はあまり感心しないのですが 暑中どこへも行かないので苦しい旅行も一つの轉換になるかと思つてゐます

23) J.S.Holdane, *The Sciences and Philosophy: Gifford Lectures University of Glasgow 1927 - 1928*, London 1919.

24) 昭和19年（1944）9月金沢で開催された日本諸学振興委員会自然科学会に、三宅は下村と共に出席している。『人文』第1号書簡 [12]、及び編者脚注。

いま世界史講座の歴史主義²⁵⁾を書きかけてゐるのですがどうもお役目みたいで力が入って来ない感じです。

しばらく御休養をおすゝめ致します

27 昭和 19 年（1944）8 月 25 日付〔封書・便箋 3 枚〕

東京都杉並区和泉町四七五 下村寅太郎様

仙臺市中島丁五〇 三宅剛一

拝啓、照り續いて雨がほしいと思つてゐたら二日ばかりいやといふほどの豪雨でした。そちらは如何でしたか。どうもかうなると雨にも風にもびくびくしてゐなければならず困つたものです。

金澤行きはどうしましたか。便りがないところを見ると少しあやしいやうですね。

今日文部省の大臣官房會計課といふところから金參千円送つて来ましたので、とりあへず半分の千五百円^(ママ)だけ銀行の小切手で封入致します。もし書物など適当なものが見つかりましたら、どんどん(?) 買つておいて下さい。私の方では古本を探す機会も少ないのでいゝものがあつたら出し合せて買つてもいゝと思ひます。私の方では現代の科學論といふことにしましたが別にしっかりした見通しがあるわけでもなく、まあ十九世紀の末ポアンカレ、マッハあたりから目ぼしいものを一通りやってみようといふ位にしか考へて居りません。現代のものはどうもこれはいふほどの科學論も（西洋に於ては）見当たらず、思想の系統のやうなものを考へるか sachlich に問題を見てゆくかする他ないかも知れないと思ふのですが何かよい御考へはありませんか。とに角本を見つけておいて下さい。科學論といっても広いわけですが研究の方はとに角本は成るべく広い範圍で物色したいつもりです。

金澤で御会ひ出来れば此上ないのですがいづれにしても歸途は東京に立寄つて二三日日本探しやら共同研究者の御高見拝聴やらをしたいと思つて居ります。多分東京への途を信越線にとり、松本から家内の実家に立寄り食料を少し仕入れて来ることになるでせう。東京にバクゲキでもあれば旅行の予定もどうなるか分りませんがまだそれ程のこともなさうですね。

いづれにしても何かの形のカタストローフはさけ難い気がします。しかし日本民族そのものはまだまだへばつてしまふ事はあるまいと私は思ふので少し圖太くかまえてゐていゝのではないかといふ気がしてゐます。たゞ日本人といふものが何かある経験からも何ものをも學ぶことができない人間であればそのときはもうおしまひですね。

フランスといふ国がどうなるか、この頃在佛²⁶⁾當時持つてゐた寫真入りの鐵道旅行案内を

25) 書簡 21、編者注 21。

26) 三宅は昭和 5 年（1930）5 月からのドイツ留学（フライブルク、ベルリン）の後、昭和 7 年（1932）2～3 月パリに滞在した。その後米國經由で同年 7 月中旬横浜港に歸國した。臼井二尚「留学當時の思い出」（『哲学研究』第 550、551 号）。

出して見て感慨を覚えた次第です〔結局〕のところヨーロッパ全体としてはロシヤといふ未知項を除いては大した新秩序は実現せずに終るのではないでせうか

お大事に

八月二十五日

剛一

下村学兄

28『人文』第1号[13]

29『人文』第1号[14]

30『人文』第1号[15]

31『人文』第1号[16]

32『人文』第1号[17]

33『人文』第1号[18]

34 昭和20年（1945年）2月9日付〔葉書〕

東京都杉並区和泉町四七五 下村寅太郎様

日立市日立製作所クラブ宿所 三宅剛一

御変りありませんか しばらく御便りがないのでどうかと思って居ります 福島経法専門学校生徒に話をするを頼まれ、それも勤労の現場日立でとのことでのふこちらに来ました 仙台はきのふひどい雷で電車不通でしたが、この朝は眼の前の海に一ぱい陽光が輝いてたいへん暖かです

水戸あたりまで学兄に御出ましを願って落ち会ふことも考へたのですが、今の東京を出られるのも色々面倒かと思って遠慮しました。今日午後話をして、こゝにもう一泊、それから歸仙の予定です

先日の手紙はつきましたか 二月九日朝 日立にて

35『人文』第1号[19]

36『人文』第1号[20]

37『人文』第1号[21]

38 昭和20年（1945）7月16日付〔推定〕〔葉書〕

長野縣上伊那郡飯島村南仲町五九、大西氏方 下村寅太郎様

仙台市中島丁五〇 三宅剛一

あれから無事御歸りでしたか 京都の御宅の方も片づいたでせうか

仙台も去る十日本式の空襲を受け私の家の近所も二三ヶ所焼けましたが私の方は無事にすみました 理学部の建物は本館全焼、私の部屋はなくなりました。法文は研究室と図書館が残り木造は全部やられました 街の様子は東京のひどい部分そっくりになりました この数日艦載機の来襲で殆んど毎日朝から警報の連発です 仙台もどうやら都市としての戦列に加ったやうです 藤原（松）、高橋（里）さんの家も焼けました

河内君は無事、市役所の勤務とのこと。

諸学振興から助成金の予定書その他を出す様に云って来たので、独断で四人分の研究要項を書き予算五、〇〇〇円を請求しておきました 火災で数日間郵便が出せず今日出した有様です 荷物をしばっていつでも逃げ出せる様にして暮して居ります まあ焼け出されるまではこゝに居るつもりです 時間はあるのですが落ついて本が読めません 少し慣れればよくなるでせう

そちらはどうですか 信州²⁷⁾ならカン砲射撃の心配はないからいゝですね

いづれ又書きます

七月十六日

39 『人文』第1号 [22]

40 昭和20年(1945)11月12日付 [推定] [封書・便箋5枚]

東京都小石川区大塚窪町 東京文理科大学哲学研究室 下村寅太郎様

仙臺市中島丁五〇 三宅剛一

先日は不便な旅行をおして御出かけ下さって久し振りでゆっくり御話することが出来ました 毎夜おそくなり、引續いての汽車でさぞ疲れられたこと、思っております それに今頃は又信洲の方へ出かけられた頃かと思ふのですが 御役目減私御苦労様です

先日の御話のこと²⁸⁾、木曜日に大學に行き高橋さんに話しました 私はまあ行ってもよいと思つてゐると申しました そのとき高橋さんは色々話してゐましたが 来年から法文の方へ来てもらふことになるなら止まるだらうかと云ふので 私としてはそれをも否といふ理由もないのでそのときはまあ止まることになるでせう と答へておきました

27) 昭和20年4月戦局の激化にともない、図書疎開のため、東京文理科大学哲学教室「分室」が長野県上伊那郡飯島村飯島国民学校に設置される。下村自身も同月同地に転居。

28) 昭20年9月3日付の書簡39(『人文』第1号[22])において三宅は、二十一年間在籍した東北帝国大学理学部から他大学へ転じたいという心中を下村に吐露し、「何かお考へおき下さって、御心当たりでもあったらお知らせ下さい」と懇望していた。下村は早速これに応じ、務台理作(当時学長)と下村(当時哲学教室主任)のいる東京文理科大学への移籍の可能性を三宅に提示したものと推定される。

昨日（日曜）高橋²⁹⁾さん来宅、来年停年の小山さん³⁰⁾の後任詮衛委員（高橋さんの他、高橋穰³¹⁾、細谷³²⁾、石津³³⁾）の間で話したところ行かないで止まらせたいといふ意見であり、細谷君が今度の私のことは全然話さないで小山氏に同氏の希望的な内意をきいてみたのださうです。そのとき小山氏は三人の名をあげその中には末席として私の名もはいつてゐたさうです。それで高橋さんはこれまで（小山氏の意向につき）その点で懸念をもつてゐたのがとに角私もその意中の人物のうちにはゐつてゐるのだから 委員會で決定すれば多分その通りに成るであらう さうすれば来年四月から小山氏のあとといふことで来て呉れないかとのことでした 私としては先日御話した通り高橋さんからの慰留だけなら今度は振りきつて行かうと考へてゐたのですが 法文の哲学科としてとに角さういふ相談をしての上であつてみれば それを振りきつてしまふといふことはどうも出来かねましたので そんならこのまゝ仙臺に止まることにしようと思つたのでした

折角務臺君とお二人で親切に私のことを考へて下さつたのに、さうして私としても思ひ切つて一度新鮮な氣分で御一緒にやつてみたいといふ氣持がしてゐたのですが どうもこちらの哲学の方へも従来の誼しみもあり さうして話されてみると辞はりかねた次第です

こちらの哲學入り³⁴⁾はまだ決定したといふわけではないのですが 私としてはとに角そのやうな回答をしたこと故 そちらの御話は一先づ御辞退申上げる外ないかと存じます 私の東京移住後のことまで親切に考へて下さつた御厚意を無にする様で誠に心苦しく また自分としてもせつかく何となく心勇むやうな若々しい氣分の芽立ちを折つてしまふ様で残念にも思ふのですが 住みつくともなく住みついた仙台といふ土地³⁵⁾がどうやら私には宿命のやうになったのかも知れません 務臺君にはそのうちに又私から手紙を書きたいとは思つて居りますが どうか先日私が申上げたことと、其後の事情とをよく御話下さつて宜しく御傳え下

29) 高橋里美は、三宅にとって岡山の六高在学時以来の最も親しい先輩で、このとき東北帝国大学法文学部哲学第三講座教授であつた（在任：大正 13 年（1924）～昭和 23 年（1948））。

30) 小山鞆絵（おやま・ともえ：1884－1976）：東京帝大卒。東北帝国大学法文学部哲学第一講座（西洋近世哲学史）教授（在任：大正 12－昭和 21）。

31) 高橋穰（たかはし・じょう：1885－1968）：東京帝大卒。東北帝国大学法文学部倫理学教授（在任：昭和 5－22）。退官後成城学園総長、成城大学学長を歴任し、昭和 28 年から昭和 33 年まで学習院大学哲学科教授。三宅はその後任として昭和 33 年 4 月学習院大学哲学科に着任する。

32) 細谷恒雄（ほそや・つねお：1904－70）：東京帝大卒。東北帝国大学法文学部教育学講座教授（昭和 10）、同教授（昭和 24）、昭和 24 年教育学部長となる。後哲学講座教授（在任：昭和 30－42）。

33) 石津照璽（いしづ・てるじ：1903－1972）：東北帝国大学法文学部宗教学講座教授（昭和 18 年より）。

34) 昭和 21 年（1946）9 月 26 日付辞令により、三宅は、東北大学法文学部哲学第一講座教授に任官された（定年退官した小山鞆絵の後任）。

35) 三宅が旧制新潟高校から高橋里美の後任として東北帝国大学理学部科学概論担当助教授として仙台に移つたのは、大正 13 年（1924）5 月のことであつた。以来 21 年がこの時点で経過していた。

さるやう願ひます

東京の方も一落つきしたらまた一度上京して皆様に御会ひしたいと思つて居ります
ではとりあへず事情御知せまで

十一月十二日

三宅剛一

下村寅太郎様

41 『人文』第1号 [23]

42 昭和21年(1946)4月28日付 [葉書]

横須賀市逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台市中島丁五〇 三宅剛一

暖かで気持ちのよい季節になりました 御元氣のこと、思ひます 一昨日弘文堂の西谷君が来てそちらの様子をき、ました 僕の方もいま休みで、五月末にならねば新学期は始まらない様です かういふとき氣楽に旅行でも出来たらと空しい想ひをして居ります

西谷君にもちょっと言傳をしておきましたが例の文部省の研究³⁶⁾のこと、大分前にあの委員会が廃止になるからと云つて来たので共同研究者を代表して研究状況を研究費の支出(残りなしとす)を報しておきましたところ 先日又残務整理のため報告論文を五月末日迄に出せと云つて来ました 学兄の方へも来ましたか 論文未完成の場合はその事由並に完成見込の期日につき報告せよといふのです この前研究状況を各個に出すつもりで出したら共同で出して呉れと云つて再提出させられましたので 今度は諸氏に一度私の方に報告を送っていたゞき一緒にして提出しようと思つて居ります それで報告論文でも又は出来まいといふ始末書でもどちらかそのうち御送り願へないでせうか 僕の方はまあ未完成といふことにしようと考えてゐます

先日「潮流」³⁷⁾から二人でやって来てとうとう六月中に書く約束をさされ大に後悔してゐるところです

仙台の桜も散りかけました

四月二十八日

43 昭和21年(1946)5月3日付 [封書・便箋4枚]

36) 日本諸学振興委員会自然科学会。『人文』第1号書簡[12]参照。昭和20年10月廃止。

37) いわゆるジャーナリズムには滅多に寄稿しなかった三宅であったが、昭和21年に(1946)『潮流』六月号に「科学論と哲学」を發表した。三宅『経験的現実の哲学』(弘文堂1980)「あとがき」。

横須賀市逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台市中島丁五〇 三宅剛一

お手紙ありがたう この頃は京都の方の様子もまるで聞けないで居りましたので お手紙を大へんうれしく思ひました

新学年に数理哲学の講義をされるさうで誠によいこと、およろこびしたい気持です お考へをまとめられる上に非常によい機会となることでせう 数理哲学にせよ何にせよ哲学はやはり文科の学生でないと通じないことを私は痛切に感じて居ります 私も今年は特殊講義³⁸⁾として現代の数学基礎論といふやうなことをやることにして居りますが、暇がなく古いノートにたより勝ちとなり 格別なこともやれなささうです しかし私には基礎論といふものに色々と片づかない問題がありそれが相当にはっきりした形をとって来てゐることは面白い事に思はれます 哲学としては半世紀ばかり前からのものは形式的のもので大したものとは思はれませんが問題としてみると相当に意味がある様に考へられるのですがどうでせうか 理学部にしても東北は極端に非哲学的で時には自分の存在をコッケイなものに感じて居ります

理学部の人と学問的なことを話すことなど近来殆んどなくなりました それでも数学は比較的よい人があるので勉強してきいてみたいとも思つて居るのですが 中々そこまで行きません

今度哲学研究に書くもの³⁹⁾も例の数理哲学の歴史的研究といふやうな形でまとめたいと思つて居ります本⁴⁰⁾の一部にするつもりのものです テムポの早い日本の学界でこんなことをやってゐるのは気のきかない話ですが どうも一通りやっておかないと気がすまぬやうでカントあたりまでやってみるつもりです⁴¹⁾ なるべく今年中位に一通りやり上げたいつもりで居りますが中々六ヶしいかも知れません まだ残つて居るところとしてギリシャでアリストテレスに於ける論理学と数学との関係といふやうなことも考へてみたと思つて居りますが本に入れられる様にやれるかどうか疑問です そんなことで何かよい参考書はないでせうか 長沢氏⁴²⁾にお会ひの節同氏にもちょっと御尋ね下さいませんでせうか

38) 三宅が理学部から法文学部哲学第一講座教授に転任したのは昭和 21 年 9 月 26 日付であるが、すでに昭和 18 年 9 月 30 日付で兼担となり法文学部で講義を行つていた。

39) しかし結局この論文が『哲学研究』に発表されることはなかった。

40) 三宅剛一『数理哲学思想史』（弘文堂書房 1947 年 9 月）。

41) 同書の最後「第三章 合理主義の発展とそれの批判」は、「一 ライプニッツ」、「ニライプニッツからカントまで」、「三 カント」からなる。

42) 長澤信壽(1893-1972):大正 15 年(1926)京都帝国大学哲学選科卒。ギリシア及び中世の哲学を専攻。立命館大、龍谷大、九大、帝塚山大で教えた。著書に『プラトン』（西哲叢書、弘文堂書房 1936 年）等がある。

まだスピノザも英佛の方のものも残ってゐますが⁴³⁾たいていにしてきりあげたい気持ちが強くして居ります

弘文堂の文庫中の数理哲学⁴⁴⁾はいつ頃出るのでせうか あの文庫は中々よい教養の書だと思ひます

Dutens のライプニッツ⁴⁵⁾が買へさうなお話で、是非買って置いて下さい こちらにも勿論ありません。近頃本屋のカatalogで見ますと 例のアカデミー版⁴⁶⁾のが38年にも一冊近く又一冊位出るようなことが出てゐましたが 續けて完成させるつもりなのでせうかね ドイツもライプニッツの完全な全集一つ出来ないやうでは心細いものです

最近の「文化」⁴⁷⁾にライプニッツを書いた人は堀内操といふ女の人で卒業(研究)してから三年位になる人です 前にあなたのライプニッツを照會した人です 中々研究に熱心な勉強家です

私の「近代科学の思想系譜」⁴⁸⁾を読んでくれる人があるとのこと 別刷が残って居りましたから一部あなたに宛てお送りしますからどうかその方にさし上げて下さい

オッカムについてお知せ下さった本は私もどこかで見て丸善に注文しておいたと記憶して居りますが この頃の洋書の輸入の様子では来るかどうかわかりません Nominalismus についてはその後一二の文献を手に入れましたがまだ読む暇がないで居ります 色々読みたいものは一ぱいあつても本がないのと語学が足りないのとでどうすることも出来ません。

河野君⁴⁹⁾の話で、Jagodinsky といふロシア人の発表したライプニッツの未刊の論文⁵⁰⁾(マーンケ⁵¹⁾に出てゐました)を同君が寫眞にとって歸つてゐるので希望があるならタイプか何かして分けようかとのことでした 私はぜひ頼むと云つておいたのですが もし出来るようならあなたにもとお分してもらふ様に話してみるつもりです しかしヒヤウヒヤウたる

43) 三宅『数理哲学思想史』(弘文堂書房 1947 年)の「第一章 数学的合理主義」は、「一 ギリシア」、「二 近世」からなり、さらに後者は「一 デカルト、二 スピノザ」からなる。

44) 昭和 23 年 3 月弘文堂書房のアテネ文庫として出た下村『科学以前』のことか。

45) Louis Dutens (éd.), G.W. Leibniz Opera omnia, Genève 1768. なお、Olms 社から復刻版が出るのは 1989 年のことであるので、この時点では初版であつたと推定される。

46) Gottfried Wilhelm Leibniz Sämtliche Schriften und Briefe, Berlin 1923 - .

47) 東北帝国大学及び東北大学法文学部哲学教室の紀要にあたる。

48) 東北帝国大学『文化』第 5 巻第 11 号、昭和 13 年(1938)。

49) 河野與一(1896-1984)。東北帝国大学法文学部哲学第一講座(1942-46)、次いで第二講座で教授(1946-50)。昭和 25 年(1950)退官し、岩波書店に勤務する。岩波文庫としてライプニッツの哲学的著作の翻訳『形而上学叙説』(1950)、『单子論』(1951)を刊行した。

50) Jagodinski, *Leibniz' Philosophie. Das Prinzip der Bildung. Erste Periode 1659-1672*, Kazan 1914, S.422-26; Abdruck von Leibniz: *De contingentia* (Grua, 302-6)

51) Dietrich Mahnke (1884-1939), *Leibnizens Synthese von Universalmathematik und Individualmetaphysik*. Erster Teil. 1925 Neudr. Stuttgart - Bad Cannstatt 1964.

河野君のこと故いつやって呉れることやらわかりません Mahnke でみるとライブニッツの形而上学上の発展を知る上に重要な論文らしいですね。

近頃ひとに聞きましたら臼井君⁵²⁾はしばらく前病氣して居ったといふことですが今はもうよいのでせうか お会ひの節よろしくお傳へを願ひます

哲学研究のライブニッツ⁵³⁾どうか遠慮なく御批評をお聞せ下さる様に願ひます 六月号で完成の予定ですが終りのところはしどろもどろになりさうです

田辺さんはじめ皆様お元気でせうか

時々お便りを下さるならば非常にうれしく存じます

五月三日

三宅剛一

下村学兄

44 昭和 21 年（1946）6 月 23 日付〔推定〕〔封筒なし・便箋のみ 5 枚〕

六月十四日の消印のある御手紙 昨日着、拝見しました 学兄よりの御手紙は どういふものか今度共に二度ケンエツにかゝってゐます 今後はなるべく速達でよこして下さいをお願いします こちらからの東京宛のものはハガキでも度々ケンエツされるらしいですが逗子なら大丈夫でせう 見られたって内容的には少しも困ることはないのですがおくれてしまふのがいやです 書かうとすると色々なことがあり何から始めてよいやら迷ふ次第です 東京の食事情については色々な噂をきゝますが学兄も務台君もお元氣の様子で何よりです 共同研究のことは井上君⁵⁴⁾からは何の返事もなく 末綱さん⁵⁵⁾は「理想」に書いたものを送るからそれで間に合せてくれとのことでしたがその「理想」も一向届きません しかしまあ務台君の云ふ通り 文部省から又何とか云って来るまではそのまゝにしておくつもりです 先日河出の増村といふのが来て哲学叢書のことを頼んでゆきました 自分は書けさうもありませんが こちらの卒業生中で相当やってゐる者が三、四人あり その連中に話して書くやうにすゝめてみるつもりです 増村はこゝの哲学出身ですがまだ新マイらしく出版のことはさっぱり知らない様ですね とにかくいつか御会ひしたとき委しく御相談ませう

52) 臼井二尚(うすい・じしょう:1900 - 1991)。京都帝国大学哲学科で西田幾多郎に学ぶ(大正 15 年(1926)卒)。専門は社会学。京都帝国大学社会学講座教授、戦後京都大学文学部教授。1930 - 1932 年のドイツ留学では三宅と同行することになる。フッサールの演習やフインクの勉強会にも三宅と共に参加し、以来三宅とは生涯にわたり交友が続いた。

53) ライブニッツについて三宅は「ライブニッツにおける個体と世界」(『哲学研究』278 - 279 号、(昭和 14 (1939))) を発表していたが、ここで言う論文は不明。

54) 井上清恒:慈恵医科大学教授。昭和 21 年昭和医大生理学教室教授。『生物学』(内田老鶴圃 1947 年)。

55) 末綱恕一(すえつな・じょいち:1898 - 1970)。数学者。下村、三宅と親しく、また下村を通じて晩年の西田とも交友があった。書簡〔5〕編者注 i 参照。

相談といへばその他にも色々と話したいことがたまって居り 一度出京したいのは山々なのですが 汽車の混雑だのその他の厄介な連中のことを考へて躊躇してゐる次第です でもそのうちに勇氣を出して出かけるかも知れません 行くことになったらお知らせします

京都のことは色々と噂にきいてゐますが真相は不明、桑原君⁵⁶⁾が少し前に京都に行ったといふので同君から高坂、高山君のことなど聞きました 公人として一頃の活動振りからみて止むを得ないところでせうが 大学としてはまことに惜しいことだし両君にもお氣の毒な氣がします⁵⁷⁾ 尤も高坂君などは又どこかに大に働く場所を見つけるでせうから實際生活としては困ることもないでせうが 学界としては大きな損失であり京大にはひどい痛手ですね 京都学派も全く形を変へることになるわけですが どうも一頃少し派手になりすぎてゐた感じですから 早のびした枝が風に折られたといふことなのかも知れないですね 西田さんによってあの地に下ろされた根はさうたやすく抜けるものではないでせうから 又新しい形で力強く伸び上がって来ることでせう

桑原君の話では学兄あたりにどうやら白羽の矢が向いてゆくのではないか といふ評判ださうですが いかゞでせうか それにしてもせめて西谷君には留まってもらひ度いものですね

先日岩手縣の千厩といふ町に波多野さん⁵⁸⁾をお訪ねしました いかにも老人らしくはなつてゐましたが それほど弱つてはゐられず なかなか元氣でした すぐ前の田圃に蛙がしきりに鳴いて いかにも平和な風景でしたが 部屋の様子は何となく味氣ない感じでした 当分そこにゐるつもりださうです 朝仙台を出て歸ったのが夜の一時過、その後二日ばかりは半病人のやうに疲れてしまひました それで又少し旅行におち氣がついた様な次第です

こちらで六月で講義を終ります 演習だけはあとしばらくやることになるかも知れません 理学部の後任に前に野田君⁵⁹⁾を推せんする様田辺さんから頼まれて居たので 部長に様子をきいてみたのですがどうも助教授はおかないで講師ですませるつものやうです ずっと前私がまだやってゐる間、科学概論の席が空いたら助教授の Sitz を他にまわしてくれとい

56) 桑原武夫 (1904-88) : 仏文学者。昭和 18 年から東北大学法文学部西洋文学第二講座助教授。昭和 23 年 11 月京都大学人文科学研究所へ転任。

57) 連合国軍総司令部 (GHQ) の公職追放命令 (「G 項パージ」) により昭和 21 年 (1946 年) 4 月に高坂正顕が、8 月高山岩男が京大免官となる。さらに翌 22 年 7 月には教職追放指令により西谷啓治が、9 月には鈴木成高がそれぞれ「教職不適格」と判定され京大免官となった。

58) 波多野精一 (1877-1950) は大正 6 年 (1917) 三宅が京都帝大三回生の時、西田の招聘で宗教学講座に着任。三宅は管円吉と二人で波多野のプロティノス演習に出た。戦局の悪化のため昭和 20 年 3 月末岩手県千厩町に疎開していた。昭和 22 年玉川学園大学学長。

59) 野田又夫 (1910-2004)。このとき母校の大阪高校教授だったが、山内得立の主導した人事により昭和 22 年 (1947) 京都大学文学部西洋哲学史講座助教授に任官された。竹田篤司『物語「京都学派」』(中央公論新社 2001)、212 頁。

ふ申出があり教授会でそれを承認したことがあるといふ部長の話で、ずい分ひとを馬鹿にした話だと憤慨してゐる次第です⁶⁰⁾

例の適格審査⁶¹⁾といふのが手間どるとかで私の轉籍⁶²⁾ものびる様です いまのところ月給だけを理学部にもらひに行つてゐる始末です

新聞に出た雑誌の広告で御両兄のプロダクティヴィティに敬嘆してゐる次第、「潮流」五月号の巻頭論文⁶³⁾だけは拝見しました 堂々たるものだと感じました

西田全集⁶⁴⁾の計画があるさうですが 出すならあまり急がず あらゆる点で吟味して眞にいゝものにしてもらひ度いものです ガサガサした帳面のやうなものを出されたのでは困ると思ひます

「哲論」の西田さんの日記は面白く讀みました⁶⁵⁾ 絶筆の中で私の論理は学界から理解せられず否まだ一顧も与へられないといふ言葉のあるのは 全十巻から成る西田哲学解説書の出ようといふ事實と照し合せると奇妙に感じさせられます いつかハイデッガーが「名声とは要するに誤解の別名だ」といふやうなことを講壇の上から云つてゐたのも思ひ出され⁶⁶⁾ ナカナカ六ヶしいものだと思います それにしても日本の学界に人の少ないとの御言葉は同感です いろんはかない空だのみやえら振りが洗ひ落されてみると今さら實質の貧弱さが痛切に感ぜられますね

仙台も今年はカラ梅雨の氣味であのジメジメと降り續く雨の日をみないで大に氣もちがよろしい 米は半減、遅配の氣配も見えて来ましたが 当分どうやらやつてゆけさうです 庭は隅々まで耕され、大部分は栄養不良ながら種々雑多な野菜がのびて 私の方もいまに自家産のジャガイモ、カボチャがたべられさうです 高温多照といふ好條件で もう少し待てば食べ物ももっと出て来さうに思はれます

若菜君は一度訪ねて来ました 物の言ひ方にどこか末綱さんに似たところがあつて面白く思ひました

この頃毎日一度正樹に英語を教へてゐます この節の学校の先生は何とかかんと云つて

60) ちなみに昭和21年(1946)9月に法文学部へ配置換えとなつた三宅の後任(但し、非専任講師)は、和泉良久である(著書に『無限論I』創文社1966)。しかし和泉の後任は置かれなかつた。

61) GHQの教職追放指令に基づき、「適格審査委員会」が各大学や学部内に設置されたことによる。

62) 理学部から法文学部への配置換えのこと。しかし同年9月26日には辞令が下りる。

63) 下村「科学と文化の性格」(『潮流』昭和21年6月)。

64) 安部能成・天野貞祐・和辻哲郎・山内得立・務台理作・天野貞祐・和辻哲郎・山内得立・務台理作・高坂正顕・下村寅太郎編『西田幾多郎全集』全19巻第一版、岩波書店1947。編集作業の主宰者は下村であり、東京文理科大学哲学教室挙げて協力した。

65) 西田幾多郎『哲学論文集 第六』(岩波書店1945年12月刊)。「後記」で編者下村は西田の日記を引用した。

66) 1930年(昭和5)5月から翌年9月まで三宅はフライブルクに留学し、フッサール邸での演習と並行して、大学ではハイデッガーの講義を聴講し、個人的にも交流した。

は休むことばかり考へてゐるらしく困ったものです 夏には京都に歸省されますか もし京都へ行かれる様でしたらそのとき御知せ下さい お留守に東京へ出ない為に。

務台君によろしく

六月二十三日

三宅剛一

下村寅太郎様

45 昭和 21 年 (1946) 8 月 16 日付 [推定] [封書・便箋 3 枚]

横須賀市逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台市中島丁五〇 三宅剛一

先日はお手紙ありがたう 木崎の講習からも歸つてゐられることと思ひます⁶⁷⁾ 僕も縣でやってゐる公民大学講座といふものに引出され 四ヶ所で一回づゝやることになりあと仙台と石巻で二十二日に終ります それで永いあひだの懸案(?)の東京ゆきをその後でいよいよ決行しようと思つてゐるところですが 三日ほど前に突然千葉さん⁶⁸⁾が歸つて来て、近いうちにこの家に来ることになってゐるので早速どこかへ家を探して引越さねばならず その方の都合で日はまだはっきり決めかねてゐるといふ状態です 千葉さんは今のところ市内の親類の家にあつて 一度訪ねてみましたがまったく見ちがへる程弱つて、すっかり老人らしくなり床の上で話しをしました 僕の方の引越し先はどうやらすぐ近所に家内の同郷の人の家を半分借りられさうです⁶⁹⁾ 田舎家めいたのんびりしたこの家を出るのは名ごりおいしいわけですが これで僕も戦後の住宅難の片はじを体験することになりました

どうせ会ってから話せること故今日はたゞ旅行のことだけを書きませう いまの予定では大体二十四日、五日頃に出かけるつもり 何はともあれまづ逗子の幻の家⁷⁰⁾にかけつけます

仙台を朝六時五分で立つと十六、二六分上野着 (少し古い時間表ですが多分変更はないつもり) ですから、これなら明るいうちにたどりつけるので好都合ですが出発の朝が早すぎるので少しどうかと思つてゐます 夜の汽車で仙台発もあり これは朝五時頃上野着でこれも相当にこたえるし どうしたものかと楽しい? プランをねつてゐる始末です (やっぱり朝六時発にした方がよいやうに思ひます なるべく大兄御在宅の日にゆくのがよいと思ひますが 文理大に出られて逗子に歸られるといふ日に一緒に行けたらそれもいゝし、とに角そち

67) 昭和 21 年 8 月下村は下伊那哲学会で指導をしているが、これと関係するのだろうか。

68) 三宅の当時の住まい (中島丁五十番地) は、東北帝国大学法文学部心理学講座退官後満州に渡った千葉胤成のその留守宅であつた。『人文』第 1 号、書簡 [22] 編者注 vi、vii 参照。

69) 仙台市中島丁四十五番地。

70) 昭和 21 年 (1946) 二月、下村は神奈川県横須賀市逗子町桜山柳作 2077 (現在の表示は逗子市桜山七丁目三番地 12 号) に転居していた。

らの御都合を一度お知らせ下さい、ちゃんと指令してもらへばなを結構です

先日弘文堂の西谷君来宅、前借つきで本を出す話の誘惑を多少感じ古い原稿を引出して眺めたりしてゐるところです 河出の方へは僕からもあとでハガキを出すかも知れませんが序があったら例の先生に知らせておいて下さい

仙台では立秋の声をきくのは何かしら淋しい気もちです 家のものが丹精したカボチャもボツボツ食べられるやうになり 秋の畑の収穫だけはこの家で食膳にのせることができさうです 向うの家が都合よく決まれば月末頃引越すことになるかも知れません

お宅の地図は前に一度書いてもらったのがある筈ですが どうかもう一度道順を書いて下さいませんか

奥さんによろしく

八月十六日

三宅剛一

下村寅太郎様

先日の御手紙もケンエツされました なるべく速達で願ひます

46 昭和 21 年（1946）9 月 29 日付〔封書・便箋 5 枚〕

横須賀市逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台市中島丁四五 三宅剛一

御手紙ありがたう 岩波の布川君に托された「饗宴」⁷¹⁾もたしかに頂きました あの文章を読んでときどきにあなたからきいた話などを思ひ出し懐しい氣がしました 歸仙後たしかハガキを書いた筈ですが匆忙の際で何を書いたか思ひ出せません とにかく出かけたときは別な家に歸って来ました 二三日は片づけや何かでつぶれ 狭い住ひにどうやら机や本箱をすえました 書斎兼應接間兼寢室の八疊、玄関の三疊、茶の間の六疊がわが家といふわけで逗子の山莊より二人多いのですから⁷²⁾相当なものです でも何か氣楽でもあります 多分もう務台君から御きゝのこと、思ひますが 数日前山内さんがやって来て京都の近世哲学史をやってくれといふ話⁷³⁾（尤もその前に手紙をもらってゐたのですが）で、僕自身としては肌に合はない東北の風土にも、どことなくだれてゐるこゝの大学の空氣にも心をひかれるところが少なく 京都に行つて若がえった氣分になりたい氣持ちもあり、しかしこゝで決定

71) 下村「アメリカ哲学の一背景—ロイスの母—」（『饗宴』第 3 号、日本書院、昭和 21 年 8 月）

72) 下村は妻知恵とのあいだに子はなかったが、当時の三宅は妻文世、長女奈緒子、長男正樹と四人暮らしだった。

73) 五年先輩の山内得立から三宅に対し、京都大学文学部哲学哲学史第四講座（西洋近世哲学史）教授に着任してほしいとの懇請があった。山内は、昭和 21 年 8 月公職追放命令で免官となった高山岩男の後任として、同第一講座教授となっていた。

したばかりの法文に対しても義理を感じざるを得ず、客観的にも二年後に迫る高橋さん⁷⁴⁾の後のこともありこちらの哲学としても困ることはよく解ってゐるので少し迷ったのですがとに角こちらでどうしても困るといふのならそれを振り切って出てゆくことはできかねると思つてゐました 山内さんが歸つたあと高橋さん其他哲学関係の人たちで どうも行かれては困るといふわけです さう云はれてみると僕としては義理にも人情にもそれでもといふことは言ひかね それに従ふ外ないといふ事情です それで僕の場合も大体この前のあなたの場合⁷⁵⁾と似た結果になったわけです 京都としても今度は廻りあはせがよくないといふものでせうかね それにしても西谷君もどうもあぶないといふ話だし 哲學の名地京都の惨状を想ふと他人事としてすませないものを感じる次第です 東北では講師としてならよろしいといふので もし京都でそれを希望するなら講義だけにでも行ってみようかとも思つて居ります さうでもなるとあなたにも御苦勞をねがふことにもなるかも知れず 楽しい空想がえがかれる—— いづれにせよ母校の哲學をどうにか相当のものとして維持させたいものです

ある方面から聞いたところでは鈴木君もあぶないのではないかといふこと、どうなのでしょう か いろんな点から考へて我國の學界にかくも人がなかつたのかとこの頃痛切に感じて居ります ある程度のタレントはあつても早熟小成、浪費とスポイルで枯れ去るのが大部分、いかにも貧乏国の情けなさですね 間ののびすぎた仙臺の空氣も小忙がしい東京の空氣も大に警告を要するといふわけです

「ライプニッツとその時代」⁷⁶⁾は細谷君が暉峻澁三といふ訳者に依頼し原稿はとうに出来てもう印刷にかゝつてゐる筈です 丁度具合が悪く金子君にお願いできなくて残念です デイルタイと云へば *Leben Schleiermachers* を引受けてゐた立沢さん⁷⁷⁾が亡くなり、そのあとを服部英次郎君に頼みたいからといふことを先日大坂の創文社の人から細谷君に云つて来てゐます 訳者としては勿論結構ですが服部君もいつまでも翻譯ばかりやつてゐないで本式の研究にはいる氣にはなれないものか ちょっと情けない氣がします 京大で今度カトリック方面からの出資で中世哲學の講座ができるといふことを山内さんが云つてゐましたが 服部君も訳ばかりやつてゐないで何かを書いてでもゐたら 丁度適役だったでせうが あれではどうか、むづかしいかも知れませんか

74) 高橋里美 (1886-1964) は昭和 23 年 (1948) 東北大学を定年退官する。

75) 下村も昭和 21 年 11 月、京大への復歸を懇請されるも固辞。竹田「下村寅太郎の百年」。

76) Wilhelm Dilthey, *Leibniz und sein Zeitalter*, in: *Gesammelte Schriften*, Bd.III

77) 立澤剛 (たつざわ・つよし: 1888 - 1946): 東京帝国大学卒業後、岡山の第六高等学校に赴任した (1912 - 1922)。大正二年 (1913) 六高に入学した三宅は、クラス担任でドイツ語教授であつた立澤の薫陶を受け、以来二人の間には生涯親しい関係が続いた。三宅がデイルタイを知つたのは、デイルタイに心酔していた立澤による。立澤は後に第一高等学校教授となり、『ニイチェ ツアラツストラ』(大思想文庫、岩波書店 1936) 等の著書を残した。

この頃小山⁷⁸⁾さんの使ってた研究室——おびたゞしい書物の上にフトンや世帯道具まで押しこんであったのを少し片づけてもらって 机とイスだけをつかってゐるのですが 仙臺の電車では中島丁から大学まで片道一時間かゝるので出かけるのがおっくうです それでも卒業論文を読まされたり次第に雑務がふえて来さうです

先日布川君⁷⁹⁾が来たとき西田先生の手紙を出してほしいと云ってゐたさうですが——僕は同君に会はず——手紙も全集に入れることに決めたのですか 編輯委員よりもつねに本屋が先がけするやうな様子で少しへんですね

今年は仙臺も珍らしく天気のよい初秋でした そろそろ栗の季節に近づいて来ました 栗でも食べに出かけて来るわけにはゆきませんか 食べものも少しづゝ自由になり汽車もそのうち乗り易くなるでせうからお互に会へる機会も多くなることと思ひます

どうも手紙では書ききれないことが多い氣がしますが今日はこの位にしませう

奥さんとお二人御丈夫でゐられますように。

九月二十九日

秋が来てやせるといふのでは心細し、十分の御休養切望します

三宅剛一

下村寅太郎様

47 昭和 21 年（1946）12 月 9 日付〔封書・便箋 3 枚〕

横須賀市逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台市中島丁四五 三宅剛一

その後お変わりありませんか 寒くなって研究室泊り⁸⁰⁾も楽ではないでせうが逗子の冬はちょっとうらやましいですね 仙台の冬はゆううつです

今日は京大出の一二の人について御考を伺ひたいと思ひます 東北の倫理は高橋穰氏⁸¹⁾が昨年三月停年になり後任を考へねばならなくなりました 私も銓衡委員の一人になってゐるのですが京大出で下程君⁸²⁾と片山正直君⁸³⁾とが候補者にあがってゐます（その他にも東北出の人もありますが） 下程君は一度会っただけですが手堅い人物のやうな印象をもってゐま

78) 小山軾絵：東北大学法文学部哲学第一講座での三宅の前任者。書簡 40 編者注 30 参照。

79) 布川仁左衛門（1901－1996）：法政大学卒業の前年、岩波書店に入社し、企画・編集を担当した。

80) 下村は昭和 20 年 10 月、疎開先だった長野県飯島村から単身上京した。諸所に寄寓の後、研究室にベッドを入れて寝泊りした。

81) 高橋穰：東北大学法文学部倫理学講座教授で、昭和 22 年定年退官。書簡 40 注 31 参照。

82) 下程勇吉（したほど・ゆうきち：1904－1998）：京都帝国大学哲学科卒業（昭和 5 年）。京都大学文学部教授、松蔭女子大学学長などを歴任。フッサール現象学から出発し、後に独自の哲学的人間学を標榜した。

83) 片山正直：京都帝国大学哲学科（宗教学専攻）卒業（昭和 3 年）。後に関西学院大学教授となった。

す　しかし同君は京都の教育學の教授になるのではないかといふ噂があり　その点を先づ確かめねばならぬのですが　それはそれとして同君の学問特に人物についてお考へをそのまゝお知せ下さいませんか　片山君の方は僕は全然知らず何とも判断のしようがないのですが學問、人物の両面について出来るだけ委しいことを知りたいと思ひますので　御存知のところをお知せ願ひ度く存じます　東北出身の者の中でも考へにはいつてゐる者もありますが、情實を離れて客觀的に銓衡したいと思つて居ります　日本の大学も教授に人を得なければ駄目だと思はれますので御面倒でせうがお考のまゝをきかせて下さい

先日来弘文堂の人たちが来仙、京都の審議會⁸⁴⁾の様子も幾らかきゝました　どうも面白くない成り行きのやうに感じます　それにしても局に当る人の反感から京都の哲学を見限つてしまふといふのも心ないことのやうに思はれ　現在の條件の下に於ても出来るだけよい方に向けてゆきたく、またさうなつてほしいと思ひます

この冬休みに弘文堂に約束したもの⁸⁵⁾をなるべく仕上げたいと思つてゐるのですが　僕の仕事のテンポでは一ヶ月半くらゐでどれだけやれるかあやしいものです　講義は哲学史はおそく始めたのでロックとパークレーで今学期は終りさうです　特殊講義は英佛の十九世紀哲学をやつてゐます

御身体お大事に

十二月九日

三宅剛一

下村寅太郎様

48　昭和 21 年（1946）12 月下旬付〔推定〕〔葉書〕

横須賀市逗子町桜山二〇七七　下村寅太郎様

仙台市中島丁四五　三宅剛一

早速御返事をありがたう　あれだけでも大凡の見当は分る氣がします　風邪で中耳炎になられたとのこと　この頃どうも人々の身上に激変が多いので少し心配です　無理にも暇をつくつてしっかり御静養なさる様切望します　山莊も暖房はあまりうまく行かないらしいですがカロリーの方からでも元氣をつけてもらひ度いものです　僕の方でも家ではコタツ、学校では貧弱な電熱機でどうやらやつてゐます

今日から休みになり　持ちこしの仕事⁸⁶⁾にかゝらうと思つてゐます　前に讀んで⁸⁷⁾忘れた

84) 昭和 21 年の「公職追放」命令の前年に GHQ が出していた「教職追放」指令により、京都大学文学部内にも「適格審査委員会」が置かれたのだった。書簡 44 注 57、61 を参照。

85) 翌昭和 22 年（1947）に三宅が弘文堂書房から出版した『数理哲学思想史』のこと。

86) 三宅『数理哲学思想史』弘文堂書房 1947 年 9 月。

87) とくに『学の形成と自然的世界』（弘文堂書房 1940 年）にかかわるものであろう。

本を一つ一つもう一度讀まねばならぬかと思ふとかなりおっくうです そのうちまた下村文庫のものの拝借申込みをするかも知れません 先日的大雪がまだ庭に残り寒い風がふいてゐますが小生はこの頃わりに丈夫です

49 昭和 22 年（1947）3 月 9 日付〔推定〕〔封書・便箋 5 枚〕

横須賀市逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙臺市中島丁四五 三宅剛一

拝啓だんだん春らしくなってきました お変わりありませんか この頃になると逗子の山荘は気持ちがいい、でせうね

先週で講義を終へほっとしてゐます これで二ヶ月位も休暇があると大いにいいのですが今度は試験だの何だので何をする間もなく過ぎ去ってしまひさうです どうもアルバイトクラフトが減退して一週間ぐらゐ何をするでもなしに過ぎてしまひます

さういへば近頃になって僕もメガネを外さねば小さい活字がみえないやうになり ひごろおかしく思つてゐた老人たちの仕ぐさを自分でやらねばならなくなりました 講壇の上で自分の書いた原稿を見るのにメガネを外してみねばならぬのはちょっとコッケイな姿です しかしさういふ老人めいた感慨はあなたには多分まだフレムトな氣がするでせうから この位にしておきませう

先日高坂君の新著⁸⁸⁾をもらひ一部分を讀んでみました 相かはらずうまいものだなあと感心しました しかしなにかまだびったりしない感じで どこかうますぎるといふ氣もちです 高山君の「文化国家」⁸⁹⁾はこれはまた依然たるものですね 哲學者の國家論政治論は今日直前の問題や標語から一度身を退いて しっかりした方法論の上に根底からやらねばならぬのではないでせうか 尤も今日さし迫つた生活事情の下書かれたものに対してさういふ注文をするのは無理でせうが しかしかつての大東亜哲学や戦争哲学のことを思ふと 哲學が認識論的反省をもたないと どうも信用のできないものになるやうに思はれます 西田哲学は直觀的のやうでも「自覺に於ける直觀と反省」以来一つの哲学認識論乃至方法論をもつてゐたと思はれます

この頃は何をおやりですか 西田全集の編輯の進行の具合はいかゞです こちらの本屋できくと西田全集を手に入れることは中々難かしいらしく 研究室用に三部ばかり頼んでおいたのですが本屋の方でも自信がなささうでした 自分のも注文しておいたのですが もしこちらで手に入らなかつたら あなたの方にもお願いするかも知れません 本といへば例の

88) 高坂正顕が昭和 22 年（1947）に出版したのは、『政治、自由及び運命に関する考察』（弘文堂書房）、『西田幾多郎先生の生涯と思想』（弘文堂書房）、『スピノーザ』（玄林書房）である。ここで三宅が高坂のどの著書を指しているのかを断定はできないが、文脈から一番目の書と指定される。

89) 高山岩男『文化國家の理念』（秋田屋 1946 年）。

デュウキもヒュウムも研究室の方からそちらの研究室に頼んだのですが 出版社との連絡がうまく行かぬらしくまだ送ってこないさうです 演習のテキストの不自由なものには閉口ですね

この休暇中に例の数理哲学思想を書きつゝけたいと思つてゐるのですが パークリの Analyst あたりからやり始めるのでどこまでゆけるか 考へてゐるカントまでは行けないかも知れません それについて Boyer, *The Concepts of the Calculus* がもしお使いでなかったらしばらく拝借できないでせうか こちらの数学にもないのでちょっと見たいと思ふのです 理学部からの續きの仕事はこの位で打ち切りにしたいと思つて居ります⁹⁰⁾

仙台にも太陽だけは春の光になりましたが 冷たい風はまだ当分つゞくでせう ひどかった冬がどうやら過ぎて行つたのはとにかくほつとした氣もちです

汽車の旅はまだまだ当分楽になりそうありませんね コーヒーと甘い洋菓子をたべすきなだけ煙草をすえる日はいつ来るか ゆつくりと汽車の座席にすはつて快よい旅行ができる日はいつ来るか ??

お便りを下さい 御健康を祈つて居ります

三月九日

三宅剛一

下村寅太郎様

50 昭和 22 年 (1947) 3 月 30 日付 [推定] [封書・便箋 5 枚]

横須賀市逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙臺市中島丁四五 三宅剛一

御手紙拝見 しばらく御便りがないのでどうしてゐられるかと思つて居りましたが天下泰平のうちにも相変らず多方面に活躍してゐられる様子で安心しました

Boyer の本たしかに拝受どうも有がたうございました

ライブニッツ、パークリからカント辺りまでの数理哲学は結局微積分の基礎が中心問題のやうです 旧稿は走り書きで粗雑、徹底的にやり直すほどの根氣もなく つまらぬものになりさうです

基礎學⁹¹⁾の雑誌刊行の企てについては先日弘文堂の方から下村末綱両兄の名で通知がありました 計画としては誠に結構で全幅の賛意を表する次第です 編纂委員に小生をも加へて下さる由 光榮の至りです 何も役には立たぬかも知れませんが東北大学との連絡係り位は

90) 三宅は『数理哲学思想史』の「序」(昭和 22 年 5 月)でこう記している:「しかし自分としては、理学部にあつて過ごしたながい年月を想つてこの書をささやかな記念としたい心もあるのである」。

91) 「科学基礎論学会」の創立 (1953 年) 及び同学会誌『科学基礎論研究』のこと。

勤まるかと存じます プラン等については特別に意見ありません やって行くうちに考へつく点があったら御相談致しませう

数日前京都の文学部長からこちらの部長あてに近世哲学史の講師⁹²⁾に私を頼みたいが差支ないかといふ問合せがあったことを事務から知らせて来ました いきなり事務的な交渉で片づけようとするやり方には少々驚きました 尤も前に話があった際講師位ならといふことを云ってあったので 特にあらためて意向をきく必要はないと考へたのかも知れません（たゞ白井君からは大分前さういふ事に決定したから宜しくたのむといふ私信があり、私はその時になってみないと解らないと云ってやってはあるのですが） とにかく前言に対する責任があるので今度だけは行くことにしようかと考へて居ります 行くとしても夏休み後にしたいつもりです あまりいゝ氣もちではありません

學校改革について文理科では主動的にやってみられる様ですが こちらはまだ何のこともありません 高橋さんが山形高校の校長に懇望せられ、はじめは多少その氣もあったやうですが最近東京へ行って各方面の意見をきゝ 務台君などの考もきいて歸ってからはネガティブになってゐるやうです 山形はたゞ家庭の事情で都合のよいところがあるので一應考慮したわけであらう とに角高橋さんもあと一年で退くので現に欠員のところと合せ新しい陣容を整へるのは大仕事です

大島君⁹³⁾のことはまだ會議にも持ち出してゐないのですが アルバイトか何かで何人にもなっとくいく形になってゐないと全く未知の人では中々委員諸氏の注意をひくことが難しいだらうと思はれます こちらの出身の者もあれこれ話に出てゐますが形勢はまだコントンたる状態です

そちらの哲學は大分多勢の志望者があるやうですが こちらは今年は人数も少なく試験の成績も中以下程度の者が多く氣勢あがらざる有様です 志望は英文學が圧倒的で御時世の感を深くさせられます ヒュウムは前に二十五部位お願ひした筈で もしその位送っていただければ好都合ですが二十部位でも宜しい 代金は本が着いたら早速集めて送らせませう それで宜しいでせうか その他にもカントの *reine Vernunft*⁹⁴⁾の残本があったらほしいのですが 一度助手にでも調べさせて当方の研究室に知らせて下さいませんか 僕の演習として昨年 *r. Vernunft* を使用しやうと Deduktion の前まで進んだきりなのでもう一年續けて使用することにしました

特殊講義はやはり十九世紀哲学、今度はドイツ哲学をやるつもりです 去年は英佛をやり

92) 京都大学文学部における非常勤講師（集中講義）のこと。

93) 大島康正(1917-1989)のこと。昭和12年(1937)京都帝国大学文学部哲学科卒業。下村の尽力により、昭和26年(1951)東京教育大学倫理学助教授となる。

94) Immanuel Kant, *Kritik der reinen Vernunft*.

ました 哲学史の先生⁹⁵⁾も次々に哲学者のお客たちを送り迎へしてゆくことになり落つかないことです

外国書の翻訳出版が難しくなりディルタイは又々トンザです 「歴史的理性批判」といふのだけが前に許可を得てあったので近く出る筈です⁹⁶⁾

仙台も大分暖かくなって来ました これだけは文句なしにうれしいです 尤もいま同居してゐる家の人が信洲から家族をよび寄せるので近いうちにどこか家を探して引越さねばならぬらしいのでまた一苦勞です

三月三十日

三宅剛一

下村寅太郎様

51 昭和 22 年 (1947) 4 月 27 日付 [封書・便箋 5 枚]

横須賀市逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台市中島丁四五 三宅剛一

拝啓、季節はづれの寒さもうやう去ったやうですが 相変わらずお元氣のこと、想像します 「科学とヒューマニズム」[『ヒューマニズム論 I ヒューマニズムと諸文化』(みすず書房 1947 年 3 月)]をどうも有難う 論題は筆者の「學風」を表はしてゐるやうですね

さて 例の倫理學の後任教授のことですが色々考へてどうもこれならといふ人を思ひつかずにゐるのですが この頃しきりに次のやうなことを考へてゐるので あなたに御相談したいのです それは西谷啓治君⁹⁷⁾が適格になった場合こちらに来て呉れないだらうかといふのです これは前には可能性の少ないことと自然に感じてゐたのですが 必ずしもさうと決めてかゝるべきでもなく一應當てみてはと思ふ様になりました 何やかでこちらの文科も弱体化の傾向が感ぜられるので西谷君のやうな人に来てもらへたらと思ふのです 審査会の容子はどうなつてゐるのでせうか御きゝではありませんか 適格となつた場合先づ京大への復歸が問題となるのでせうが感情的な問題もあり西谷君に京大に止まる意志があるかどうか いまの京都の哲学の空氣では西谷君としてあまりすゝまないのではないかと想像されるのですが どうでせうか

九大の宗教に引っぱられてゐるといふやうな話もきゝましたがそれも事実かどうか僕には解りません いつかあなたの話に西谷君はもと倫理の方をやりたい希望をもつてゐたといふ

95) 法文学部での三宅の所属は、正式には、昭和 21 ～ 23 年は「哲学第一講座」(西洋近世哲学史)であり、昭和 23 ～ 29 年は「哲学第三講座」(哲学概論)であつた。

96) 『人文』第 1 号、[9] 編者注を参照。

97) 西谷啓治は京都大学文学部宗教学講座教授であつたが、「教職不適格」と判定され、免官されるこゝとがこのとき少なくとも予想されていた(実際の退官は昭和 22 年 7 月)。なお、「適格」は原文のママ。

ことをきいたので 出来たらはこちらに来て倫理を持ってもらひ度いと僕は思ふのです これはいまのところ僕一人の考ですが西谷君なら他の人々も異議はないだらうと思ひます それで適格審査会の方がうまく行きさうかどうか それがうまく行った場合こちらに来てくれさうな可能性があるかどうか あなたの御考へをきかせて下さいませんか もし相当に可能性があると御見込みでしたらとりあへず電報で御知らせ下さい あなたの御見込として結構です さうしても話しが始まることにでもなったら大いに御助力を願ひ度いのです こちらの倫理は学生も少なく西谷君には舞台が小さすぎるかも知れませんが あゝいふ人がやれば次第に充實しても来るでせうし 福岡よりは東京との関係からだけでもこちらの方がいいのではないかと思ひます 尤も九大と約束が出来てでも居るなら強いてとも云へないですが。

前便で京都の講師のことを書きましたが あれからちきあと山内さんから僕と高橋部長とに手紙が来ました 僕は秋の十月頃なら参ってもよろしいと返事しておきました 宿舎や何かのことを考えると ありがたくないお役目です 仙台からのお上りさんたちが汽車の中でスリに胸のポケットを切りとられたといふやうな話をきくと 旅行も相当に勇氣を要するといふ氣がします 弘文堂と約束した本も春休みにどうやら原稿を一まづ書き上げました ところがこの頃は弘文堂の御来仙もなく そのまゝ机の上につんであります 紙のない文化国家、「悦びをもち得る余地と閑暇」のないヒューマニズム ——寒い春といふわけですね

おついでに僕には住居も無くなりさうです いまの家は田舎から家族が来るので出てほしいといふのです どこかの片隅を見つけてもぐりこむまで落つかない氣もちでせう 前大戦後のドイツの學者たちの生活が我々にやって来たといふわけでせう

正樹はこの頃盛んに植物の採集をやつてゐます 牧野富太郎先生⁹⁸⁾が一ばんえらい學者だと思つてゐるらしいです 奈緒子はこの三月から母校の第一高女に勤めて居りますが⁹⁹⁾上級生徒がハリキッて研究会をつくり先生としてヘーゲルの辨証法だの、社会科學だのについて意見？を述べねばならぬさうで大いにあわててゐます

仙台も桜が満開です 北の国もこの頃にもなると自然のテンポが急で老書生をおきざりにしてゆく感じです 湘南の先生は満員電車で春をおっかけてもクタビレないエネルギーをもってゐられることと想像して居ります

四月二十七日

剛一

下村寅太郎様

98) 牧野富太郎 (1862-1957) : 植物分類学の世界的権威。昭和 26 年第一回文化功労者。『牧野日本植物図鑑』他。練馬区名誉区民。

52 昭和 22 年（1947）6 月 1 日付〔封書・便箋 4 枚〕

横須賀市逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台市中島丁四五 三宅剛一

お手紙拝見しました 西谷君自身がさういふ心境であるのなら止むを得ません 僕としては残念ですが。多分この秋には京都へ行くことになるでせうからその時ゆっくり話をきいてみませう 倫理の方はそれまでには決定してゐるのでせうけれど

石津君¹⁰⁰⁾が先日京都へ行って来て僕にあんたが京都へいなくてよかったといふやうなことを、彼地の空氣から感じたと云ってゐました しかしこの石津先生は僕が雄弁になったといふやうなへんな勘をもつてゐること故その感じもあまり当にはなりません

學兄の概論の盛況をきくのはまことにうれしく これこそ眞の雄弁なりと申したいところです しかし花形役者はとかく過勞になりがち故その点大いに用心して下さい

數學會の話しはこちらから行った和泉君（小生の後へ理学部の講師をやつてゐる男）にききました 基礎論のために一部会が出来るやうになったことは 何にしてもいいことです

「基礎科學」の編輯のこと、第二号を「当方で」といふのは「下村一家」のことでせうか僕には何もいゝ考が出て来さうありませんがとにかく心に止めておきませう プランが出来たらおもしろ下さい 自然弁証法といふやうなことは僕にはあまりよく解りません 何か一つのシエマによって科學の理論の展開が出来るものかどうか甚だ疑問に思ひます 實際に理論を立ててみて呉れなくては 「…でなければならぬ」と云はれてもすぐに信用しかねます 東京方面の若い哲学徒の間にも唯物論・唯物弁証法といふやうなことが流行してゐるやうですが かけ声だけでなしに實質のある哲学を提供してもらはねば何とも申せませんね 一つのアンチテーゼとして唯物論をもち出すことは安易でもあり意味がないでもないでせうが その唯物論そのものが甚だ「観念的」では妙なディアレクティックになるわけです この前のマルクス流行のときとにかく自分でも一應當てみようかと思つてゐながらそのまゝになつてしまひましたが 今度は十九世紀哲學の一部として、暇があつたらのぞいてみたいと思つてゐます

いま特殊講義で十九世紀のドイツ哲學をやつてゐますがまだフィヒテが終らない状況です からヘーゲル以後まで行けるかどうか疑問です¹⁰¹⁾

田辺さんの近況についての御報告何か心を打つものがあります¹⁰²⁾ ずっと前に千ヶ瀧の山

99) 長女奈緒子は昭和 22 年から同 36 年まで宮城県立第一高等女學校教諭として勤務した。

100) 石津照爾。書簡 40 注 33 参照。石津は後に第 11 代東北大學長（1963－1965）となる。

101) この講義のための準備の一端は、昭和 26 年（1951）アテネ文庫の一冊として弘文堂書房から出版することになる『十九世紀哲學史』にも活かされている。

102) 田辺元は京都帝國大學哲学科を昭和 20 年 4 月に定年退官した後、群馬縣吾妻郡長野原町北輕井沢大學村に転住した。

内さんの別荘で夏を過したとき裏軽井沢のあたりを通ったときの情景を思ひ出します 鎌倉での寸心先生の悠々たる生活を考へ合せると 小乗と大乘とでもいった感じがなくてもありません 最近の田辺さんの書くものは読みづらくてあまり読んでゐませんが何か内から生れて出て来るといった感じがなく 僕には親しみにくい氣がしますが學問に打ちこんだ態度はえらいと思ひます ながらく磐手縣の田舎で不自由な生活をしてゐた波多野さんも住宅を提供するといふことで小原¹⁰³⁾の玉川学園に移られたやうです この頃の老先生たちの生活はいたましい氣がしてなりません

仙台ではまたホトトギスの鳴く季節になりました 逗子の山莊の初夏をしのび お二人の御健康を祈ります

六月一日

三宅剛一

下村寅太郎様

53 昭和 22 年（1947）8 月 24 日付〔封書・便箋 4 枚〕

横須賀市逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台市中島丁四五 三宅剛一

御手紙ありがとう 自分ではあまり書かないでゐながらしばらく御便りがないとひどく待遠い氣がします お変りなく活動してゐられる様子で大慶、小生ものらくらと病氣もしないでやって居ります 「西田哲學」¹⁰⁴⁾をどうも有難うございました これはまことに天下の推賞すべき快心の好手引書、僕自身にも大いにためになり一気に読み通しました

この夏休みの中に 勉強のために何か書いてみたいと思ひ現実と歴史いふやうなことを考へて居ります（歴史学の歴史です）¹⁰⁵⁾ 何かの意味で西田哲學への Stellungnahme をやらねばならず あちこちと本を開いてみたりしましたが 絶対無は捉へることができぬとある通り 中々手におへません しかし全く限定されてしまひたくもないが さてこちらからどう限定してよいか ハラが決らぬ有様です

西田全集は丸善にも呉々頼んでおいたのですがついに手に入らず まだ見ることも出来ないで居ります まことに御面倒ですが一部でも入手出来るやう御口添えを願ひます これは圖書館にも是非數部そろえておきたくと思ふのですが 前に高橋さんの話では布川君¹⁰⁶⁾に話して十部位廻してもらへるといふことでしたがそれもまだ一部も来ません いづれこちら

103) 小原国芳(1887－1977)：京都帝国大学哲学科に学び波多野精一の指導を受け、大正 7 年(1918)卒業。

昭和 4 年(1929)現在の東京都町田市に玉川学園を創設した。

104) 下村『西田哲學』『二十世紀教室』1 白晝書院(昭和 22 年 6 月)

105) 昭和 23 年(1948)「現実と歴史」(『哲學研究』第 376 号)。この論文は酒井潔編『三宅剛一 人間存在論の哲學』(京都哲學叢書第 23 卷、燈影舎、2002 年)に収載されている。

106) 布川角左衛門。書簡 46 注 79 参照。

から布川君にも言ってやるつもりですが 御序の節に「東北大学」のためにどうかして呉れる様に傳へておいて下さい ついでですが例のヒュウム、本だけは大分前に二十數部送って来ましたが 実に妙なことに何度きいてやっても定價を知らせてくれず 研究室の連中も困って居ります これもそちらの助手からでも本屋に云ってやらせて下さることをお願いします 定價さへわかればいつでも送金します 助手君からこちらの研究室へハガキで定價を知らせてもらへればそれも結構

基礎科学の第一号¹⁰⁷⁾が近く出るよし、鶴首して待つて居ります 朝永君に書かせたのは大てがらです 僕自身もお手傳ひしたい気もちは十分あるのですが書くことは別で、これは当分出来さうもありません 他の連中で書けさうな人をと考えへてはゐるのですが さうなるとどうもこちらは人がないのです、とにかく出来たものを拝見した上またよく考へてみませう。

文部省に出したもの、かへしてもらへるなら どうか受取っておいて下さい あれは全く間に合せてどうてい活字にする代物ではありません 今度の本¹⁰⁸⁾?? これも旧作で赤顔ものですが?? で一まづ理科学的な対象からお別れし新領域に足を踏み入れたいと考へて居るのですが 例のスローモーでまだ三四年せねばものにならぬのではないかと情ないことを考へております

京都へは十月の中頃に出かけることになるでせう 山内さんから秋の哲学会¹⁰⁹⁾で話をせよと云って来たので、何も外から私などが行つてやらなくてもよからうと 話したいこともないので断つてやったのですが 関係方面で相談会で決まってるからぜひやれと 何か僕が向うのとりきめに責任でもあるやうなことを云つて来ました 早速そのとききっぱりと断つておけばよかったのですが ほったらかしておいたため 向うではやることにしてゐる様子です

あれこれお話したいこと山々なれど手紙では書けず 水いらずで話せるときをまつことにします 宿は友人の横田といふのが京都の師範学校長をやつてゐるので その家に泊めてもらふことにしております 旧西田邸にも行つてみたいとそれも楽しみの一つにして居りますが artist 静子さん¹¹⁰⁾に食事の世話をしてもらふのではとその方は御遠慮申すことにします

先日何とかいふ學生(?)が下村先生から照会状をもらつて来たといふので留守の研究室に手紙をおいてゆきました

今年の夏はなが雨のあと急に暑くなり 頭がぼんやりしてものを考へることとか むづか

107) 昭和 22 年 (1947) 湯川秀樹、朝永振一郎、田宮博、末綱恕一、三宅剛一、下村寅太郎により『基礎科学』創刊。昭和 28 年科学基礎論学会設立。同誌は「科学基礎論研究」と改称された。

108) 三宅『数理哲学思想史』弘文堂書房、昭和 22 年 (1947) 9 月刊行。

109) 昭和 22 年 10 月京都哲学会で三宅は講演 (「現実と歴史」) を行う。

110) 京都市田中飛鳥井町の西田幾多郎の遺邸には、三女静子が一人で住んでいた。

しい状態、講義の開始もせまりやゝあせり氣味になりました

それから、いつか御相談しました倫理の後任のこと センコウ会で色々やった結果 文理大へも講師として行ったことがある矢島羊吉¹¹¹⁾といふ人に大体内定しました 僕としては 佛教的な方面へばかり頭が向いてゐさうなのでそれでは少しどうかといふ懸念もあるのですが 素質はいゝ人らしいのでとにかく同意した次第です 西洋思想を批評する人には西洋的なものには kritisch でありながら東洋とか佛教とかには頭から平身低頭たゞ有難がってゐる傾向があり これでも困ると僕は思つてゐるのです

いまこちらを追ひたてられてゐるので来月の始め 數軒となりの家へ引越し また同居します 戦敗れて學究机をおく所なしといふわけです

八月二十四日

三宅生

下村寅太郎様

54 昭和 22 年（1947）9 月 6 日付〔葉書〕

横須賀市逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台市北五十人町五五 三宅剛一

先日はお手紙ありがたう「若き西田先生」¹¹²⁾も拝受、はじめの方を少し讀みました 京都時代の先生を思ひ出し懐しい氣がします 高橋さんはいよいよ山形校長に決定 これからは向ふが主でこちらが兼任となります 高橋さんあてのはいづれ僕からとゞけます

西田全集¹¹³⁾は布川君から高橋さんのところへ十部送ってくれ、我々の間で一部づつ分け三四部を大学で買っておくことにしました 御配慮下さった僕の分はこれで手に入るになりました。一々に解説をつけるのでは大仕事ですね でもいゝ勉強にもなるでせう

明日表記のところへ引越し二階二間をかりて同居します 去年東京から歸るといまのところへ越して居たので丁度一年になります 荷物運びの手傳ひで初秋のいゝ日を過すのはおしい氣がします 今度のところ町名は別ですがやはり中島丁の通りです こゝもいつまで居ることやら。

去年から一年何をしたかと考へてみると何もしてゐないのです ヒュウムは idleness と いふことを幸福の一條件としたといひますが それでもあれだけやつてゐるところをみると相当勉強家であつたらしいですね 今頃自分の考が経験論に同感するところが多くなつたことに氣がつきます

111) 矢島羊吉(やじま・ようきち:1907 - 1986)。昭和 23 年 2 月東北大学法文学部倫理学講座教授に就任。

112) 下村『若き西田幾多郎先生―「善の研究」の成立前後―』人文書林、昭和 22 年 8 月。

113) 『西田幾多郎全集』第一巻、岩波書店、昭和 22 年（1947）7 月、下村「後記」。以後下村は毎巻のように「後記」を書く。

九月六日

55 昭和 22 年（1947）9 月 27 日付〔葉書〕

横須賀市逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台市北五十人町五五 三宅剛一

涼くなりました お元気でせうか 今日京都ゆきの予定をお知らせします

十月四日（土）朝早く仙台発午後上野着、荷物を弘文堂にあづけてから、もし御都合が良しかったらその晩逗子の山荘で泊めていただきたいと思って居ります 翌日は少し用事もあり東京驛に出やすいところで泊り、六日朝東京発で「下洛」の予定、東京でゆっくりしたいのですがそれは歸りのときに残しておかうと思って居ります、汽車は常磐線が一両日中開通とのこと故どうにか予定の通りに行けること、と考へて居ります

九月二十七日

56 昭和 22 年（1947）10 月 20 日消印〔葉書〕

横須賀市逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

京都市上京区小山南大野町 師範学校官舎 横田純太方 三宅剛一

先だつては御世話になりました 予定通り八日から講義を始めもうあと二回ほどになりました 學生と話をするのもなくたゞノートを讀んで講義するだけで至って気のぬけたものです 西谷君を一度訪ね、また高坂君の家で高山、西谷、鈴木の諸君と一タ碁、將棋の会をやりました 高山君は濱松に月末に立つらしく鈴木君も移轉のことで頭をなやましてゐる様子でした¹¹⁴⁾ 田中美知太郎君¹¹⁵⁾ともちょっと会ひました

二十七日神戸まで行き同日夜行で東上 二十八日晚は下馬町の姪の家に泊り二十九日午後に弘文堂に行って予定をつくるつもりです 二十九日（水）は文理科に来られる日でせうか暇があったら文理科へも行くかも知れませんが 二十九日文理科に来られるかどうか弘文堂へ通知しておいて下さる様願ひます

57 昭和 22 年（1947）11 月 18 日付〔封書・便箋 2 枚〕

横須賀市逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様¹¹⁶⁾

仙台市北五十人町五五 三宅剛一

114) 昭和 22 年 9 月鈴木成高も「教職不適格」と判定され京大を辞したばかりであった。

115) 山内得立の主導した人事により、昭和 22 年（1947）田中美知太郎は京大文学部哲学科の古代哲学史講座助教授に任用された。また同年には、同中世哲学史講座助教授に高田三郎、同近世哲学史講座助教授に野田又夫が任用された。竹田、前掲書、212 頁。

116) 封筒の表に「来週火曜文理大」と、下村のものと推定される字で記されている。

先日は御世話様になりました 一日の晩に仙台に歸って来ました

今日の新聞でみると逗子の火薬庫が爆発し桜山方面にも影響があったとのことですが御宅は如何でしたか 多分窓ガラスがビリビリとした程度であつたらうとは思ひますが丁度學兄が東京出勤の御留守とのことでしたせうから奥さんはびっくりされたこと、思ひます ことによると下村家所有物となるかも知れなひあの山莊にも被害はなかつたでせうか。

歸ってから一週間ばかりはふだんの自分の身体にならない様な心地がしてゐましたが特別ひどく疲れるでもなくまた元の日常性に復歸し 寒い朝夕の往復に身をかゝめながらやって居ります 寒いと云つてもまだそれほどではなくむしろ来るべき酷寒の予想におびえてゐる有様です

「自宅」の二階からみる山々の紅葉もしだいに枯々として来ました 西の方の旅から歸つてみると「東北」の侘しきといったやうなものをしみじみ感じます かういふ土地に永い間住んでゐるうちに自分自身も知らぬ間に相当に東北的に風土化せられることとせう

そのうち旅行も少しは楽になることとせうから、せいぜい「南方へ」、ドイツ人が憂愁をはらしに南の地へ出かけたやうに時々は出かけることにしませう

では又、御気げんよく、奥さんによろしく。

十一月十八日

三宅剛一

下村寅太郎様

58 昭和23年(1948)4月24日付〔推定〕〔封書・便箋5枚〕

横須賀市逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台市北五十人町五五 三宅剛一

御手紙ありがたう こちらからもすっかり御無沙汰しました そのうち新居が決つたといふやうな通知があるかも知れぬと心待ちにしてゐたのですが これは中々困難のやうですね

僕の方もいつになったら二階の間借りから一軒の家に移れるのやら。それでもこの二階からは廣々とした眺めがきいて、点々とした古ぼけた家々の庭に色々な花が咲いてはしだいに若葉になってゆき、川をへだてた小山の肌が青くなつてゆくなど、眼を楽しませてくれます。

僕の方も学年末には、論文、リポート、入学試験等々と雑事が重なり 少しほつとしてゐるうちに又講義が始まりました

今度は概論をやるので先週第一回をやりました 特殊講義は「社会の認識」といふ題にし ておきましたが準備が間に合はないので「六月開講」といふことにしました 「自然的世界」から「歴史的社会的的世界」への切りかへをやらざるを得ない点、「悩み」は同じです 去年京大で無理にやらされた公開講演¹¹⁷⁾でその方に手をつけようとしたのですが 物にならず、

慣例による「哲研」への掲載¹¹⁸⁾も無期限に延ばしてもらってゐる始末です。人間の世界はどうも捉へにくいですね。いまの我国の唯物論、唯物史観ばかりに対しては全く同感です。ギリシア哲学の出さん¹¹⁹⁾が一足とびに共産党入りをするといふやうなことも、あの人の印象と思い合せて全く突飛な感じですが、東京に居ると「仙」人の国仙台などちがった空気があるのかも知れないといふ氣もします。科学の方の本が思ふ様になく文献も知らぬので全く手探りの状態です。一度会って色々と話したいものです。

京都への講義出張¹²⁰⁾のこと御苦勞様です。まあ一度御つとめとして行ってやって下さい。僕は学生との接觸もなくつまらなく終わりました。試験の答案を見せられましたが、まるで話にならぬやうなものばかりで、がっかりしました。尤も答案を出したのは五六人しかゐりなかつたのですが、京都行きはいつになりますか。

人文科学委員会で松本君¹²¹⁾が入選しました由、僕もカン誘した者として喜んで居ります。河内君は卒業論文にヘーゲルの *Logik* の Wesen のところを書き、間ぎわに大努力をやたらしく、思ったよりよく出来てゐりました。一生けん命にやったところはいゝと思ひます。いま哲学の副手といふことになってゐます。傍ら千葉さんが校長をしてゐる新制中學の英語の先生で週三日位行って居ります。中々はりきつてゐるやうです。一時はパンフレット左翼みたいになるのではなゐかと思はれることもありましたが中途から本氣で勉強するやうになり、ヘーゲルに熱中してゐます。

Schelling のプリント早速河内君にでも希望者を調べさせてみませう。僕は今度演習で例の Hume の *Enquiry* を使ってみることにしました。

基礎科学のことでは、機会ある毎にたれかれに頼んではゐるのですが、どうも思想的感覺の乏しい仙台学者のことで、一向に成果があがりません。僕自身の旧稿には役に立ちさうなものは余りなく、何か書くとすれば少し集中できる時間が必要なので、当分「仙臺」にのせておいて頂きたいのです。これまでやって来た *historische Studien* といった風なものから何か自分自身の思想確立に行かねばならぬハメになってゐる様で、苦しい氣がします。諸先

117) 昭和 22 年 10 月京都哲学会講演「現実と歴史」。

118) 『哲学研究』第 376 号 (昭和 23 年)。

119) 出隆 (いで・たかし 1892-1980) : 岡山県津山市生。津山中学、六高、東大と進んだ。古代ギリシア哲学専攻。東京大学教授。昭和 23 年 (1948) 日本共産党入党。昭和 26 年東京都知事選挙に立候補するため東大を退職。当時の東北大学における三宅の弟子の一人だった故清水正徳教授 (1921-2004) の回想によれば、三宅と出は同じ岡山県出身という誼もあって、晩年は (その政治的立場は別にして) 将棋をさすこともあったという。

120) 昭和 23 年、下村は京大文学部で集中講義 (「数理哲学」) を行う。

121) 松本彦良については書簡 23 注参照。次行に見える「河内君」とは河内久雄のこと。東北大『文化』15-2 (1951 年)、『山形大学紀要 人文科学』第 6 巻第 2 号 (1967 年) にヘーゲル論理学に関する論文が掲載されている。

輩が三十台、四十台で苦しみ且つ切り開いたものを、氣力衰へた五十台になってやろうといふので、心もとない次第です 今さら哲學といふ學問の難しさを痛感せざるを得ません

それにつけても若い人がふらふらと哲學に入ってくるのをみると気の毒なやうでもあり困ったことだとも思ふのです こちらでも今年は新入生十六七名で空前の多人數ですがこの頃の學生は卒業まで續けてやるのかどうか分らぬ様なが多く 子供らしい顔をならべた新入生をみて当惑に似た感じをもたざるを得ません

大學新制度で文科が法経と独立しようと計画しようとしてゐるのですが どうなるのかが見通しはつきません 二年の教養学部、二年の後期それに大學院とバラバラの新制度で、ニワカ造りの教課をならべて 實際にうまく行くものかどうか。見まわしたところ周囲の連中たれにも定見は無ささうです 文理大は務臺君のやうなしっかりした學長が居るので心強いでせう 學長自身は大へんでせうがね

西田全集編纂委員会から先生の手紙を送ってくれと、云って来たので とってあっただけを送っておきました 色々な時期にもらった手紙を読み返してみても感慨を覚えたことでした

先日倫理の矢島君が来て少し話しました ヌーボー式の先生ですね こちらの哲學も相續く人事に全く多忙です

もうすぐ五月ですね 逗子のあたり眼のさめる様な新緑になってゐることです

御大切に

四月二十四日

三宅剛一

下村寅太郎様

59 昭和 23 年（1948）8 月 1 日付 [封書・便箋 4 枚]

横須賀市逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台市北五十人町五五 三宅剛一

先日は御手紙ありがたう 御元氣の様子で何よりです 會議で逗子から御出張では大へんですね 中島丁からでさへ有がたくないのですから。

務臺君いよいよ學長を止めることに決定したさうで同君自身は再び書齋にかへれて喜んでゐることです その気持ちはよく解るし教授として留ることになれば下村先生もカタの荷が軽くなり これまためでたい次第ですが 学校自身、さらには日本の教育界のためには務臺君のやうな立派な學長を失ふことは大へんな損失です 後任に杉村氏といふことが新聞に出てゐましたが どうもあまりぱっとしない感じがですね

「哲學研究の栞」¹²²⁾ この休暇中にどうかしたいと目下努力中ですが「執務」時間がとかく短なりがちで能率はあまりあがりません それにつき二三のことをお尋ねしたいのです 一、近世ドイツといふのですが クザーヌスはどうしたものですか 中世の方で入れてやら

れるなら そちらに譲ってもよいのですがどうでせう 御意見御きかせ下さい 二、次に文献としては、「哲学史」ですから哲学者自身の著書を主とし、参考書は特に適当なものがあるとき、またカントやライプニッツのやうな大家の場合は代表的なものをあげるといふ程度ではどうでせうか 日本のものはなるべくあげることにすべきでせうね 三、近世初期のものは著作の題がラテン語のものが多いのですが これはその都度日本譯をつけ加へたものでせうか 四、ドイツ・オランダといふ中に例へば属籍不明(?)のもの、コペルニクスとか、広義のオランダとして Geulincx とかも入れたものでせうか、 五、哲学史の本は一般的のものは「一般哲学史」の方であげられるでせうが ドイツ哲学史に限ったものは僕の方であげておいていゝでせうか 六、テキストの出版年代は内容変化のない限り初版だけでいゝかと思ひますが出版地をも記入したものでせうか まあざっとこんな点で編纂者先生の御指示をお願いします

それから、これは別な願ひで、Heimsoeth, *Metaphysik der Neuzeit* をお持ちでしたらちょっと御借りしたいのです こちらのは僕の研究室で焼いてしまったのです¹²³⁾

「基礎科学」で何か座談会のやうなことでやるのではないかと御手紙の文面から想像し、さうなればそれを機会に一度東京に出てもよいと思つてゐましたが どうもその氣配もなさうなので 東京出はもっと氣候のよい時までまつことにしませう 尤も今秋「人文科学委員会」の哲学部会を仙台でやるさうですから その時はふるつて御来仙下さるやうに、たゞ京大への御出講とかち合へば止むを得ませんが。

逗子の山荘がどうやら名実共に下村邸といふことになりさうで さうなればまた度々あの山路(?)を上ってゆくことになるでせう

新制大学なかなか難産でこちらはまだ教養学部がどこどこになるのかさへ不安で 人事などはまるで見当もつかない有様です では又

八月一日

三宅剛一

下村寅太郎様

60 昭和 23 年 (1948) 10 月 10 日付 [推定] [葉書]

横須賀市逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台市中島丁四六 三宅剛一

122) 昭和 24 年小石川書房から出版される下村寅太郎・淡野安太郎編『哲学研究入門』のこと。三宅は「近世・現代哲学ドイツ」(150-205 頁)を分担執筆した。長男三宅正樹氏の証言によれば、三宅はそのために相当の苦勞をして資料を集めた。哲学の研究にとって重要な外国文献を、それぞれの特徴や立場を簡潔に解説しつつ紹介したきわめて有益かつ貴重な案内書である。

123) 昭和 20 年 7 月 9 ~ 10 日の仙台空襲のため。『人文』第 1 号書、簡 [20] 注 v 参照。

秋らしくなりました 御変りありませんか 今頃は多分京大に出張講義中ではないかと思ひますがどうですか 去年の京都の秋を思ひ出します 先日例の「哲学研究の葉」やっと書きあげて送っておきました 大岩君からの便りによると一週間以上たつてゐるのに未着とありましたから着いたことでせう、二十枚ばかり超過しましたが書き方のマバラなところや空所もあるので詰め合せば大した超過にはならぬかと思ひます それでも御一讀の際不要と思はれるところがあつたら遠慮なくけずって下さって結構です。

先週の日曜に表記に引越しました 前のところとちき近くで、ぼろ家ながら一軒借りられたので少しゆっくりした気持ちになりました お客さんに泊ってもらふこともできるので御来遊を待ちます

今月末の人文科学の哲学会に御来仙になりませんか

十月十日

原稿ついた由 本日大岩君から知せがありました。

61 昭和 23 年（1948）10 月 28 日付〔葉書〕

横須賀市逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台中島丁四六 三宅剛一

拝啓 秋も大分深くなって来ました 山荘のあたりはさぞいゝこととせう こちらはもう寒いです 平凡社の辞典の「形式主義と直観主義」どうやら書き終へましたのでそのうち発送します 「公理主義」といふ項目は別にあること、思つてあまり説明しませんでした。もし予定されてないならどうかこの項目の一つ加へてもらつて下さいませんか

この頃選舉熱がさかんで少しくすぐったい気持ちです

十月二十八日

62 昭和 23 年（1948）12 月 23 日付〔封書・便箋 3 枚〕

横須賀市逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台中島丁四六 三宅剛一

お手紙拝見しました 御元氣で何よりです 今年十二月になつてもへんに暖かい日が續きましたが今日あたり又寒いやうです 京都の出張講義御苦勞様でした¹²⁴⁾ あそこの哲学科の空氣は京都の秋の空ほどになつかしいものではありませんね

アテネ文庫の座談会¹²⁵⁾のこと先日西谷能雄君からも申して来ました 「物質とは何か」といふ題は僕には難題ですが諸兄の御話をきく役目でよければ参加させてもらひませう 實は

124) 昭和 23 年（1948）10 月下村は京大文学部にて集中講義を行う。書簡 58 注参照。

125) 三宅剛一・下村寅太郎・渡邊慧・朝永振一郎『物質とは何か』（アテネ文庫、弘文堂書房 1949）

この冬休み中に一度東京へ出て新築成った下村邸をもみたいと思ってゐたところ≡なので
よい口実として利用（？）することにしませう 僕自身「物質とは何ですか」ときいてみた
いといふこともあるのです 西谷君への返事には一月十日頃から二十三日頃の間ならよい
と申しておきましたが二十日をあまり越さない方が好都合です

新制大学の問題はこちらも中々きまりがつかず 特に師範の合併については文部省のあい
まいさと師範のエゲツナサで はたできいてゐるのも不愉快な有様です とにかくあまり有
難くない「新制」です¹²⁶⁾ 近日中審査委員として高木（貞）（心理）さんなどが来るさうで
す 法文三学部の独立も懸案になってゐるのですが どうなるのか解りません

家は古家ですがとにかく同居でないので家族の者が氣が楽さうです 家主にや、サク取さ
れてはゐますが。英国から本が来るらしいので楽しみにしてゐます はたの者からロマン
チック・エンゲリシズムだと云はれてゐますが とにかく僕はだんだん経験論的な見方に親
しみを覚えるやうになりました

近いうちお会ひできるのは何より楽しみです 座談会の日どりが決ったら早速西谷君から
知らせてくれる様に願ひます

二十三日

三宅剛一

下村寅太郎様

63 昭和 24 年（1949）1 月 22 日付〔葉書〕

横須賀市逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台市中島丁四六 三宅剛一

拝啓 先日は色々御世話になりありがたうございました もう一度逗子に行きたいと思っ
てゐたのですが 十七日の夜には鈴木君が話があるといふのでカマ田の久保井君の家に行っ
て泊ったので とうとう逗子のあの懐かしい部屋にかへれないで東京を立てしまひました
十八日夜水戸につき二泊して二十日夕歸仙しました

宮本君のことにつき至急に御知せを頂きたく待つて居ります 甥のところでメイケイ会報
を見たら昭和十一年卒業となつてゐたやうですがさうなのでせうか 歸つてみたら松山の方
からまた手紙が来てゐたり 早い方がよいと思ひますので宮本君の内意が解ったらすぐ御知
せ下さい。帰ってみると仕事がたまつてゐて正月の休みも終つた感じです 奥さんにどうぞ
よろしく

二十二日

126) 他方、下村が在職していた東京文理科大学でも、東京高等師範学校との合併による新制大学設置
問題が、理念、校名、人事その他をめぐつて難航していた。

64 昭和 24 年（1949）2 月 18 日付〔推定〕〔封筒・便箋 3 枚〕

横須賀市逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台市中島丁四六 三宅剛一

先日はお手紙ありがたう 座談会のあと病氣になられたさうで、どうもあの晩家に歸られてから少し元氣がないやうでしたがやっぱり何かさわったものと見えますね それでも大事に至らずにすんだことは大慶の至りです

宮本君のこと本人がさういふ氣持ちなら致し方ありません 別に松山の方にたれかを推薦する義理があるわけでもないのですから

相原君¹²⁷⁾は大坂に話があるさうで 同君の事情を考へると無理にとは云へぬ次第です 京都大坂共に思ふ様にゆかなかつた場合はこちらに来てもらひ度いと思ふのですがまづあきらめる外なさうですね どうもいゝ人はよそにとられてしまひさうで 困ったものです

座談会¹²⁸⁾の筆記数日前に来て少しづ、筆を入れかけましたが来客や講義の準備にせまられたりして延び延びになり 今日最後の講義をすませて早速家に歸りどうやら一通り書き入れを終わりました

小生の発表甚だ前後の連絡がなくその場その場の思ひつきでどうもうまくツヂツマが合はない様です 下村先生はいつも總論的に話しをすゝめ、平素の持論をちあんともってゐるので大いにサッサウとしてゐます どうも全体甚だ散漫で鈴木君¹²⁹⁾のねらひとは大分かけ離れたことになったかも知れませんね

学校の講義は終つても卒業論文、レポート試験などと面倒な仕事がたまってゐてなかなか息をつくところに行きません それにしても 休みにになったことは何とでもうれしく これから何をやったものかなどと考へることも楽しみです

先日は家内への御贈物、家内一同へのライフなど御送り下さいまして御芳志まことにありがたうございました どうか奥様にもよく御禮を申し上げて下さいます様願ひます

二月十八日

三宅剛一

下村寅太郎様

127) 相原信作：1903 年生。昭和 2 年（1927）京都帝国大学哲学科卒。下村の一年後輩。唐木順三、淡野安太郎らと同級。後年、学問上緊密であつた三宅の知人や友人の論文を集めた三宅剛一編『現代における人間存在の問題』（岩波書店 1968）に、相原は「マルクス主義の一考察」と題する論文を寄稿している。大阪大学教授。訳書にランケ『世界史概観－近世史の緒時代』（岩波文庫 1949）

128) 『物質とは何か』（アテネ文庫、弘文堂書房、1949）。書簡 62 注 125 参照。

129) 鈴木成高のことであらうか。昭和 26 年（1951）11 月弘文堂書房から創文社が分離独立したとき、鈴木は創文社顧問になっている。竹田編「下村寅太郎の百年」、「1948（昭和 23）年」の項も参照。

65 昭和 24 年（1949）4 月 29 日付〔推定〕〔封筒・便箋 4 枚〕

横須賀市逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台市中島丁四六 三宅剛一

御手紙拝見いたしました けふから一週間ばかり休みが續くので少しほっとして居ります
淡野君¹³⁰⁾の学位論文のこと色々考へてみました 著書も手許にあったので大体読んでみ
ました こちらも三学部独立といふことになり教授会も別々になったので 論文審査につい
ては必要の場合法科の人の意見を徴するといふことになるらしいのです それにしてもその
方が専門家といふことで、出ようによっては中々面倒なことになるかも知れません?? 法科
の人は少し毛色のちがったものに対しては恐らく懐疑的になりがちでせう?? しかし決定は
哲学の方にあるわけです

それで哲学として考へて十分自信がもてるかどうかといふ問題になるのですが さうな
ると僕としてはあゝいふ内容の著書に対して十分な評価をするだけの自信がどうももてない
といふのが本当の気持ちです 着眼のよさ、まとめ方にみられるすぐれた才気には感心させら
れるのですが 本当の研究といふところがどうも少し稀薄で、レディメイドの哲学思想にわ
りに容易によりかゝってゐるやうな感じがするのです。卓越した論述でもありかういふ問題
を取扱った哲学もなければならぬと思ふので 学位論文としての価値は十分あるかと思
ふのですが 僕自身の正直な感じは右のやうなものです 一つには僕にかういふ法律方面の
知識が足りないで その方面での著者の創見の度合を判断しかねるといふことも自信をも
てなくする一つの原因だと思ひます

実は「社会哲学としての法律哲学」といふ題名をみたときかなり大きな期待を持ってゐた
のですが 弘文堂から書物が送られて来て手にとったときや、期待はづれの感じを持ちまし
た 今度読んでみると論のすゝめ方は中々巧妙で啓発されるところは少くないのですが 何
かちょっとあっけない気持ちは去りません 学位論文などにそれほどむきになる必要はなく
相当な長所さへあればよいといふものかも知れませんが さういふ政治的な考慮は別として
僕のありのまゝの気持ちを申上げると右のやうなものです さうはいつでも我々の方でも学
位などのことではどうも純粹に学問的良心でおし通しかねるお義理や人情にからまれること
もあり やっぱり妥協ですませねばならぬことも起り、難しいものだと思いますにはゐられま
せん 今度は對手が大兄のことゆゑ 思ふ通りのことを申す次第です かういふ事はさう急
ぐことでもありませんので そちらでももう一度お考へになって、よい方法を見つけてい

130) 淡野安太郎（だんの・やすたろう：1902－1967）：昭和 2 年（1927）京都帝国大学哲学科卒。一高、
学習院大学・兼任東大教授（1949－1963）、学習院大学哲学科（専任）教授（1963）。ベルクソンな
どのフランス哲学や、カント、ヘーゲル、マルクス等の社会哲学を専攻。三宅とは後に学習院大学
で同僚となる。

〔備考〕封筒の底が、「OPEND BY MIL.CEN.- CIVIL. MAILS」と印刷されたテープで閉じられている。

たゞだき度い いづれお会ひして御話する機会もあることでせうから そのときまた御相談いたしませう

こちらの新制大學も難航を續けましたが どうやら形式的には決まりがついたやうです
しかし実際はにわかづくりの無理が至るところにあつてまだまだごたつくことでせう

仙台も桜は大方散りました 春が来たと思ふうちすぐに初夏といふことになりさうです

四月二十九日

三宅剛一

下村寅太郎様

66 昭和 24 年（1949）9 月 4 日付〔封書・便箋 2 枚〕

横須賀市逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台市中島丁四六 三宅剛一

お変りなくずっと御元氣のことと存じます 夏にはどこかへ御出かけでしたか

前から話にきいてゐた「精神史の一隅」¹³¹⁾がやうやく出来上ったことをお祝い申し上げます
本をどうもありがたう 目次のどれをみても、それ等についてお話をきいた色々な場面
がなつかしく思ひ出されます ロイスの母は赤倉の空氣の澄んだ山道を、クリスチアナは逗
子の往復の電車の中を、ニュウトンの藏書も東京逗子間、内村鑑三と北海道は、あれは何年
頃でしたか 御夫婦で僕の家に一泊して行かれたあの旅のことを――

今度は出来上ったものを拝見してもう一度著者の面影を――といふと変ですが 話にきいた
赤んぼが立派な衣裳をつけて来たのをみることにしませう

「教育大学」問題もどうやら正義派の方向に動いて来たらしく此上もよき解決を祈る次第
です¹³²⁾

色々書きたいことがあります但し今度にしませう

奥様によろしく

九月四日

三宅剛一

下村寅太郎様

67 昭和 24 年（1949）9 月 19 日付〔封書・便箋 4 枚〕

横須賀市逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台市中島丁四六 三宅剛一

131) 下村『精神史の一隅』（弘文堂書房、昭和 24 年 8 月）。

132) 昭和 24 年（1949）5 月東京文理科大学が「東京教育大学」に「包摂」される。

先日の御手紙拝見しました 何とか御返事をしなければと思ってゐたのですが 西谷君が来るといふことなのでそれからにしようと考えて延引してゐた次第です 西谷君昨日来仙色々様子を述べ相当にねばってゐました

新しい座談会にもう一度加はるやうにとのこと、情理をつくしての御すゝめで学兄の特別な友情とげきれいには深く感銘いたす次第ですが どうも心重く折角の御勧誘に対し申し訳ないことですが 今度はどうか御かんべん願ひたく存じます 御説の通り永ひあひだ科学概論と称する講義をやったわけですが 結局その名にふさはしいものは出来ずに終り 自然科学といふものに対するまとまった観方に達することなく終ったやうな有様です 自分でももっと考へてみたいと思ふ問題は色々あるのですが どれも徹底するに至らず それを強いて触ってゐるやうに云へば自分としてもひどく氣もちが悪くまた社会を感はすことになりさうに思はれます それにどうも座談会といふものが私の柄でないらしく 調子にのったらじれったくなったりして 生にえの考を述べたてたり 場当たりのことをしゃべったりして後で冷汗をかく思ひをしなければならぬといふことになり勝ちです

「哲学とはなにか」¹³³⁾を西谷君がもって来たのをみても どうもいゝ氣もちがしないのです 科學論なら諸家の御意見をよくきいてみたいといふ懇望はかなりあるのですがどうもそれだけでは濟まないでせうし もう一度速記にとられることを想像すると寒いやうな感じがするのです それに下村先生が出てゐてくれればそれで十分で、これは西谷君にも云ったことですが物理生物数学の人の外にもう一人自然科学との近接的な學問をやつてゐる人、例えば心理学の高木氏のやうな人を加へたら却つて面白いのではないかと 哲学からとるなら新しい人、例えば野田又夫君なんかどんなものでせう こんな代案は僕からきかないでもといふことになるでせうが とにかく僕などよりももっと新鮮味のある分子を考へていただきたく今度は傍聴席の方に廻していただき度いといふのが詐らざる本音です

「哲学とはなにか」、京都で色々細工を加へ形としては大分まとまったやうですが少しよゝ行き風になったやうですね 世間でどういふ反響を示すかみものです

十月に宗教学会¹³⁴⁾が仙台であり務台君が公開講演を頼まれて承諾してくれたさうですから同君に会はれることになります 六時間半で仙台から東京に行けるやうになったのでそのうちまた出かけたいものです

その氣もちと合はないやうな御返事になりましたが老生の心事御同情御許しを願ひます

九月十九日

剛一

下村寅太郎様

133) 務台理作・三宅剛一・高坂正顕・西谷啓治・下村寅太郎 『共同討議 哲学とは何か』(弘文堂書房、昭和24年9月)。ちなみに「新しい座談会」とは、『科学とは何か』(同書房昭和25年4月)のこと。

134) 昭和24年(1949)10月日本宗教学会第9回大会が東北大学で開催された。

68 昭和 25 年（1950）5 月または 6 月付〔推定〕〔封書・便箋 4 枚〕

横須賀市逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台市中島丁四六 三宅剛一

御手紙拝見しました、こちらからもすっかり御無沙汰して居り、どうもまた一度会って話さねばつきぬものがたまって居る気がします

さて用件ですが、西田先生の「意識の問題」はたしかに河瀬君と僕とで校正をやりましたが「個体」の論文が初めに何に出たかはまるで記憶がありません ことになる京都の何かの宗教大學の雑誌ではないかとも思はれるのですがこれも当て推量にすぎません

Vernunft in der Geschichte と「哲学研究入門」¹³⁵⁾のことは研究室の助手に話して希望者を募らせることにしておきました 英独から本が来ることになってゐるのですがどうもまだ演習の本を自由に選ぶほどにはなりません ドイツの哲学雑誌なども「丸善」に注文しておきましたが果して来るのかいつ来るのかさっぱり分かりません¹³⁶⁾

河野君の後は、現在の助教授の眞方君と近くアメリカから歸って来る松本君とでやってもらふことにしました¹³⁷⁾ 松本はこれまで特に古代をやったわけではないのではじめは大部分骨が折れるでせうが どうも性質の知れない人を探るのは不安だし、これと思ふ人は動かないといふわけでやっとかういふことに決めました 高田三郎君¹³⁸⁾のことも考へたのでした が到底動くまいといふ見込で断念しました

社会学の教授も無くて困ってゐる有様です これまで交渉した二三の人はどれも駄目になり ちょっと行づまり状態です（京都の清水盛光といふ人はどんな人が御存じでせうか）

学校は御承知の通りイールズ事件¹³⁹⁾以来まことに騒々しく會議の連続で閉口して居ります 経済の次は文学部がやかましく、処罰発表でストにでもなれば夏休みは案外早く来るかも知れませんが K.D. 系の連中の動きは中々根が深く 現在の政治的状況ではごたごたはまだ相当に永く續くだらうと考へられます 學長の高橋さんはひどい廻り合はせでお気の毒ですが案外闊志をもってゐるやうです 教養部といふヒモが出来て何かと面倒です これから

135) 下村寅太郎・淡野安太郎編『哲学研究入門』（小石川書房 1949）。書簡 59 注 122。

136) 洋書の輸入再開は昭和 27 年、と木田元は回想している（木田元『闇屋になりそこねた哲学者』晶文社 2003 年、88 頁）。

137) 東北大学法文学部哲学第二講座（古代中世哲学史）：河野興一昭和 25 年 4 月 30 日付退官、眞方敬道助教授（古典語）同年 8 月 31 日付講座担任、松本彦良助教授（論理及経験論）任官。

138) 昭和 22 年（1947）、高田三郎は京大文学部哲学科西洋中世哲学史講座の助教授として広島文理大学から移ったばかりであった。書簡 56 注 115／竹田、前掲書、214 頁。

139) イールズ事件：昭和 24 年 7 月 19 日連合軍総司令部民間情報局教育顧問ウォルター・イールズが新潟での講演で「共産主義教授は追放せよ」と発言。これに対して日本教職員組合、日本学術会議、全国大学教授連合等が反対声明を發表し、講演反対闘争に発展。東北大学でも昭和 25 年 5 月 2 日イールズの講演を学生が阻止した。第 9 代学長高橋里美は昭和 24 年 4 月から 32 年 6 月まで在任。

大学院といふものの創設まで事務的な仕事がどれだけ続くのかと考へるとうんざりします

「ユートピア設計論」は学兄年末の「ユートピア」でその具体化を待望する次第ですが確率論の方はたしかに面白いテーマだと思ひます 私が前に「数理哲学思想史」を書かうとしたときも 微積分の哲学とならんで近世の数学と哲学とにおける確率の理論の発展をもやってみたい と考へたのですが大仕事だと思つてそのまゝにしました 現代にまで及べば中々大へんでせうが哲学的には案外ネグレクトされてゐる觀もありますね とにかく大にやして下さい

この頃は学校のある間は何もやれず休暇になったら何かやりたいと思つて居ります それについて弘文堂を当にしてゐる点もあるのですがどういふものかといふ氣もします

この頃逗子の山莊はいゝでせうね 仙台も甘いものならほゞ昔しにかへったやうです どこかで會合して大に話したいものですね

ではまた、お大切に

三宅剛一

下村寅太郎様

69 昭和 25 年（1950）6 月 19 日付〔葉書〕

横須賀市逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台市中島丁四六 三宅剛一

拝啓 先日の手紙を書いた後で思ひついたことですが理科事典の一二の項目を御存知の本多修郎君（教養学部の教授で科学概論担当）にやってもらつてはどうかと思ふのですが如何でせうか、項目は「質と量」「記述と説明」です 都合によっては僕の名前を出してもよろしいが当人の名でよかつたらその方がよろしいと思ひます 尚小項目で類似のものがあつたり、もし必要でしたらもう少し本多君にやってもらつたらとも考へるのですが とにかく御意見御聞かせ下さる様願ひます

六月十九日

70 昭和 25 年（1950）7 月 30 日付〔封書・便箋 4 枚〕

横須賀市逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台市中島丁四六 三宅剛一

先日の御手紙拝見いたしました 大雨で暑さも和らいだことと思ひます 私共でも皆元気です 務臺君の還暦記念論文集御計画¹⁴⁰⁾のよし あゝもう還暦といふ年になるのかと感慨を覚える次第です 私も友人として何か書きたいとは思ひますが十一月末までにはどうも出来さうもありません この夏休みは弘文堂のため(?)の稼ぎ仕事で九月の開講の間ぎわま

140) 坂崎侃編『現代哲学の基礎問題—務台理作博士記念論文集』(弘文堂書房、昭和 26 年 5 月)。

でかゝりさうでそれから学期が始まるとまた用事が多くて中々やれません そんなことで
冬休みでもかけられるなら何か考へてみようと思ふのですが 期限は決定的なものでせう
か 筆者としては御手紙にあげられた以外別に思ひつきません

河野君の後任のことは私の手紙の書き方が悪かったかも知れませんが 現在助教授をして
ゐる眞方君といふのを講座担任とし 最近アメリカから歸った松本彦良君を助教授として
やつてもらふことに決めました、前にもそう書いたと思ふのですが。出来るならばギリシャ
のやれる既成の人をほしかったので、高田三郎君のことなども考へたのですが到底動かな
いだらうといふ話で、申出ることを差し控えた次第でした 眞方君は中世を主としてやりた
いと云つてゐるので 松本君はそのうちギリシアを勉強してもらひ、それでどうにかやって
行かうといふわけです どうも弱体化となり面白くないのですが現に居る人との折り合ひ等
のこともあり 止むを得なかったのです 服部君ほどの人なら相当のところにありさうに思
ふのですが三流様などではとても満足できる人ではなささうな気がします

学生部長などなるべく早めに止めたい、でせう¹⁴¹⁾ 金沢なども安藤君¹⁴²⁾がゐて、東北
の田舎にゐた左翼ばりの坊主くづれみたいな人物を哲学に採ったとかでへんなスタッフになる
でせう さうでなければ悪くない学校かも知れないと思ふのですが。

倫理学の人も中々六ヶしいでせうね¹⁴³⁾ 相原君などがその氣があるならいゝかも知れま
せんが とにかく人物難拂底ですね

いま最近に出たハイデッガーの *Holzwege*¹⁴⁴⁾ といふ論文集を読んでゐます 必要にせまら
れてハイデッガーのことを本にしたいと思ひ¹⁴⁵⁾ この新著から一文をつくれなかと考へて
ゐるのですが どうも可なり妙なものでことばのアクロバチックがひどく 日本語にして意
味が通じるかどうか、それに一つ一つが主としてテキスト解釈の形になってゐるので これ
をとり合わせてつながりのある思想として叙述する事も相当の藝当を必要とするやうです
根本の考は *Sein und Zeit* 以来變つてはゐないやうです

それにしても仕事を成るべく八月中頃に終りあとの半月ばかりで例の弘文堂の哲学辞典の

141) 昭和 25 年下村は東京教育大学評議員になる。

142) 安藤孝行（あんどう・たかつら 1892-1980）：昭和 11 年京都帝国大学哲学科卒。金沢大学、立命
館大学、岡山大学で教鞭をとった。アリストテレス、存在論を専攻した。

143) 東京教育大学では、昭和 26 年 3 月で定年を迎える倫理学講座教授・務台理作（1890 - 1974）の
後任人事について下村は尽悴することになる。

144) Martin Heidegger, *Holzwege*, Frankfurt a.M.1950

145) 三宅剛一『ハイデッガーの哲学』弘文堂、昭和 25 年（1950）。同書の第一部は昭和 9 年 2 月、
3 月に東北帝国大学哲学科の『文化』（第 1 巻第 2、3 号）に発表した長編論文「ハイデッガー哲
学の立場」である。この第一部に加えて、三宅は第二部として「近著にあらわれた哲学思想」を、
Holzwege がドイツで出た実にその同じ年に、「この夏休暇になってからはじめて読んで」書き下ろ
した。

項目を幾つか書きたいと思つてゐるのです その中間か終りに数日の暇をつくれたらどこかへ静養に出かけたいのですが今度はどうもそれが出来さうありません

ヨーロッパの本が買へることになって色々ほしいものがあるのですが 値だんが高くて閉口です 仙台ではまだ殆んど実物をみませんが東京にはぼつぼつ来てゐることです

夏至を過ぎると北の国ではへんな淋しさを覚えます 去年は子供にひっぱられて蔵王に登りましたが今年はまだどこにも出かけてません ヒルネをしたり時に将棋をやったりしてあたり夏休みをすごしてゐる始末です 一度お会ひして話しがしたい気がしきりにするのですがいつ実現できることやら

どうか大切に

七月三十日

三宅剛一

下村寅太郎様

71 昭和 25 年 (1950) 9 月 4 日消印 [推定] [封書・便箋 2 枚]

横須賀市逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台市中島丁四六 三宅剛一

拝啓 先日は大へん御世話になりました 三十一日午後 歸つて来ました 逗子の二日は実により心身体養の楽日でした それでも慣れぬ旅の疲れで二三日ボンヤリして過しました 講義開始までに色々やっておきたいと思ふのですがどうも馬力が出ません

哲学辞典の項目につき 決定項目 (第一回) の中で不要と思はれるものを数学自然哲学方面からひろひ出してみましたので御参考までに書いてみます

決定項目 (その七) 中 (カッコ内のものは疑問のもの)

○エクスナー、×ティンダル、○ウッジャー、○オーバーリン、○ガロア、○シュタイナー、○シルヴェスター、○ (デザルグ) ○ネイピア ○ボンスレ ○ (モンジュ) ×フーリエ
×メルカトール ×ルベーク、○ (スマッツ) ○ (ラムゼイ) ×テプリッツ ×ミリカン、
× (ヨルダン) ×フレシェ ×バウイック ×カウフマン ×ケーニヒ ×ケリー、× (コンセート)

(その八)

×ベール、×マルビギー、×ロートマン、×フィッシャー (エミール) (これは数理自然哲学者ではない筈) ×カジョリ ~~≡~~ (サートン) (シンガー) (ダンネマン) ×ホイザム、
×アッカーマン ×ヴェロネーゼ、クンマー、ケーリー、×シェルピンスキー、×ディリクレ
×ブリュッカー、(ベルナイス、) ×ボレル、×マクローリン、メービウス ヤコービ、
ルシャンドル、×アダマール、×シュタイニッツ、×シュタウト

スハウテン、×ダルブー、×デトゥーシュ ×ウィーン、× (パウリ) ×ジュール、× (ゾ

ンマフェルト)¹⁴⁶⁾

これ等は先日御話のあったやうに殆んど除去してもよいやうに思はれます 尚必要と思はれる項目で第一回決定項目中に洩れてゐるものも多くありますがこれは後に補はれるのでせうか どうも項目選定はまだまだ慎重周到にやる必要がありさうに思はれます

天気も荒模様で東北のあわただしい初秋がやって来ました

子供たちに御本ありがたうございました

奥さんによろしく

三宅剛一

下村寅太郎様

72 昭和 25 年（1950）9 月 17 日付 [推定] [封筒なし・便箋 2 枚]

横須賀市逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台市中島丁四六 三宅剛一¹⁴⁷⁾

御手紙拝見しました 僕の方も来週から講義を始めねばならず色々な会議などがあって少しユーウツです

辞典の項目について 復活要求は全部承認いたします 即ち エクスナー、オーバーリン、ガロア（シュタイナー、シルベスターは御一任）、デザルグ、モンジュ ポンスレ ネイピア ラムゼー

小生よりの新規要求、エディントン（見落しかも知れず）ボイル（ロバート）C？E？

マイエル（ロベルト）三つとも E か F、ラグランジュを D に昇格、ラスウィッツ (*Geschichte der Atomistik* の)

平凡社の理科辞典の件、しがない稼ぎとしてやってもいい氣もしますが学校のある間は中々書けませんのでカ行は無理で、科学批判、形式主義と直観主義、現象論は学兄に願ひしたく 自然哲学も眞の専門家に願った方が安全、質と量、説明と記述も他に適當の人がありさうに思はれます（十二月でよければ形式主義と直観主義はやれるでせう）先日中弘文堂辞典の「自然」を書かうとして苦勞しました 哲学者について書くのはわりに楽ですが 概念は骨が折れアト味もよくありません とにかく字引きの項目を書くのは厄介ですね 弘文堂の辞典も項目の選定は仲々大仕事で 御話の通り唯か責任者一人が中心となって精選した方がよいかも知れません 例えば第一回決定の分でも アンシクロペディストが C となつてゐて グランベールはあるがディドロもエルヴェシウスも見当らないやうで釣合が悪いと思はれるのですが さういふ例は他にもいくらかあることとせう 辞書を書かうとすると平凡な面も必要な本がなくて不便を感じます

146) ○×は下村の手による記入であると推定される。

147) 封筒が失われているが、内容から昭和 25 年（1950）と推定した。

そのためといふわけでもありませんが、Sorley, *A History of English Philosophy*がどこか古本屋で見つかったら買って送って頂けますまいか 前に神田で見たのですが つい買はずにおいたのでこちらに無いのです

今年は珍しく九月中頃になっても仙台でかなりな暑さです どうも元気がなくてだめです

九月十七日

三宅剛一

下村寅太郎様

73 昭和 25 年 (1950) 10 月 1 日付 [葉書]

横須賀市逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台市中島丁四六 三宅剛一

御手紙拝見しました 必要とナイグンクとの対立をどうにか妥協させて必要の方に従ふやうに努めるつもりでゐます 「形式主義と直観主義」は何とかやってみませう 本多君からは直接手紙を差上げるでせうが「ヘーゲル」は同君に向いてゐると思ひますから よかったら同君にやらせていたゞきたいものです 松本君はデカルト、ラメトリ、ベルグソンはやるさうです。メイアーソン¹⁴⁸⁾、唯名論などは僕がやりませう その他とにかく枚数を一応お知せ下さい 原稿紙は平凡社から送って来ました 執筆主意書のやうなもの 松本、本多君分 (文学部内松本宛でよろしい) 二部送らせて下さいませんか。Sorley の英国哲学史は出版社が分らぬので直接注文ができないのですがそちらで御分りでしたらお知らせを願ひます

家は明日あたりから着工するさうで年の暮に移轉することになりさうです。「現象論」多分本多がやります

十月一日

74 昭和 26 年 (1951) 2 月 26 日付 [葉書]

横須賀市逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台市北五十人町八一 三宅剛一

一昨日務台記念会から電報をもらひました。新しく書く暇はないので御断りする外ないと考へてゐたのですが 他の記念論文集のために書いてあつた原稿が急には入要とならない事情なのでそれを御会の論文集に廻すことにしました 四百字にして三十枚あまりのもので今日別便でお送りします (文理大内記念会宛) もし役に立つようなら御利用下さい (題目、経験的現実としての社会)

148) Emile Meyerson (1859-1933): ルブリンに生まれ、パリで活動した科学批判家。彼はコントやマッハの実証主義に反対し、先行する観念や仮説なしに科学研究は結論に至ることができず、哲学と科学のあいだに本質的な相違はない、と主張した。

二月二十六日

75 昭和 26 年（1951）3 月 27 日付〔葉書〕

横須賀市逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台市北五十人町八一 三宅剛一

拝啓 先日は大へん御世話になりました あれから親戚のところと弘文堂とに各一泊一昨日の夕方仙台に歸って来ました まだほんとうに自分の身体にならない様な氣もちです 講義は休講のまゝで休みにしました。忘れないうちに平凡社の理科事典の小生宛の項目お知らせします（原稿紙は小生のところにあるので松本に廻します）

実証主義（10） 合理主義（10） 実在論（10）で「デカルト、ベルグソン、ド・ラメトリ」の三項ははじめから松本君に御指定でしたが、上記のものもそちらで差支なければ同君にやってもらひ度いと考へて居ります 尚「自然哲学（20）」はその節学兄に願ひすることを申し出で御承諾を得た筈です いづれまた。奥様によろしくお傳へ願います

二十七日

（右の外「メイエルソン」枚数不明といふのがあった様記憶、必要ならだれかが書きます）

76 昭和 26 年（1951）4 月 13 日付〔推定〕¹⁴⁹⁾〔封書・便箋 2 枚〕

横須賀市逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台市北五十人町八一 三宅剛一

しばらく御無沙汰しましたがお変わりありませんか。学年がはりは教師にとって中々忙しい季節で、山荘の主人も東京との往復に暇のない日を送ってゐられることと想像して居ります

今年は哲学の卒業生には就職難の年——昔の状態の復活といふわけでしょう——で、こちらでも気の毒な場合が少なくありませんでした 「教育大学」ならその点もそれほど痛切でないかも知れませんが。御存知の河内も助手の年期が来てやっと私立の女学校の社会科の先生に就職しました 数学科にやる講義の準備もなかなか進まずまたお座なりな講義をやることになりさうです

演習のテキストにデカルトの英訳（Everyman's Library）を注文しておいたのが来ないので致し方なくプリントで Dewey の *Experience and Nature* をやることにしましたが、小生ウカツにもこの本を持たず図書館に一冊しかないのです、それをプリントの代台本にすれば手持ちがなくなって困るのですが もし学兄のところで空いてゐましたら一部拝借致したいのですが如何でせうか ドイツの哲学書を使つてゐると学生たちが Buch-gelehrter の出来そこなひになる傾向があるのでもっとナマ生の俗世界とタッチする考方に引き入れてやりたいと思つてゐるのです

149) 切手料金が 8 円であることから昭和 26 年（1951）のものと思われる。

春になっても風雨多く 桜もまだ咲きません 狭い庭に数本の樹を植えましたがそれもまだ葉を出さないで居ります 「十九世紀哲学史」¹⁵⁰⁾ 正誤表を封入します この外にもまだ誤植がありますが「正讀」して下さることを期待して記入しません

四月十三日

三宅生

下村寅太郎様

77 昭和 26 年 (1951) 4 月下旬または 5 月上旬付 [推定] [葉書]

横須賀市逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台市北五十人町八一 三宅剛一

御手紙拝見、務台博士記念論文集も着、御高論¹⁵¹⁾一讀いたしたいへん興味深く教へられること多々でした。

學年初めの用事も近く一通り片づくので 十二日頃出発京都当りまで圖書館見学¹⁵²⁾に出かけようと思って居ります 序に岡山の郷里まで行って来たいつもり。東京には往きに二日ばかり「公用」を主とし (十三、十四両日頃)、逗子参上は歸途 (二十二、三日頃) の楽しみに残しておきたいと考えて居ります、いづれまた予定お知らせします

建築の飯田氏には時々会ひます。講義をきかれるのは少し閉口ですが。

78 昭和 26 年 (1951) 10 月 10 日消印 [葉書]

横須賀市逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台市北五十人町八一 三宅剛一

御ハガキ拝見、理科事典の原稿のこと松本君に話しておきました 成るべく早く書いて送るとのことです (「合理主義」は既に送ってあるとのこと)。今後は平凡社から直接松本君に催促する様に云っておいて下さいませんか

松本彦良、仙台市^{コイデ}越路三四又は仙台市片平丁東北大学文学部

清水君¹⁵³⁾の話によるとこの秋北海道に御出かけの由、歸路にでも是非御立寄り下さい 出来たら旅行の日程お知らせを願ひます 一人なら十分泊れますからそのことを予定に入れておいて下さい (二人でも泊れぬことなし)

150) 三宅『十九世紀哲学史』(アテネ文庫、弘文堂書房、昭和 26 年)

151) 下村「近代科学的心情とプロテスタンティズムについて—精密科学の理念の精神的背景について」(坂崎侃編『現代哲学の基礎問題—務台理作博士記念論文集』(弘文堂、昭和 26 年 5 月) 収載)。

152) 三宅は昭和 26 年頃より東北大学図書館長の役職にあった。

153) 東京教育大学の下村門下の清水富雄か、あるいは東北大学の三宅門下の清水正徳か。

79 昭和 27 年（1952）2 月 22 日消印〔封書・便箋 4 枚〕

神奈川県逗子町 桜山^{サクラ}二〇七七 下村寅太郎様

仙台市北五十人町八一 三宅剛一

御手紙拝誦こちらもすっかり御無沙汰して居ります 風邪は大体身体の過労か何かによる
ことと思ひますが健康に十分お気をつけ下さるやう切に希望いたします

末綱さんの企画による総合研究課題は「数学基礎論」とのことですが 私はこの頃その方
面のこと全くやって居らず、一方では東北の哲学関係の者たちで昨年末総合研究をやつてゐ
て来年度も継続の申込をすることになって居り私がその代表といふことでもあり、切角御誘
ひ下さったのに済まないわけですが一応末綱さんに御断り願ひたく存じます。もし人数の点
でどうしても加勢が必要で、他にこれといふ人がないやうな場合はもう一度考へてみることに
致しませう 一人で二つの総合研究に加入していゝかどうか私には解りませんが。

大学院のこと御同様面倒なことです 近頃文部省で乗り出してからまた少し云ひ分が変り
（専攻の條件等）当分文部省内でも専攻の分け方に困つてゐる始末です はじめ哲学倫理で
一専攻としようといつてゐたところ、昨日になってまた分類の方法が変り印哲、支那哲を併
せて哲学とし倫理は心理、宗教、社会学と合して社会科学専攻といふやうなへんな具合な案
になりました これもあまり良案とは思はず決定までにはまだ変更の必要になるかも知れ
ません 今日午後から大学院の委員会です。創文社から倫理講座を無理におしつけられて
ゐるので気重く、どうも書きたくなくて困つてゐます 「実存の倫理」といふのですが高坂
くんか高山君かがやってくれないものでせうか

いつか久保井君¹⁵⁴⁾が来た時の話では学習院の高山問題¹⁵⁵⁾では安倍院長が強い決心らしい
から予定通り決行するだらうと申してゐましたが お手紙によるとさうも行かなかつたらしく
高山君がお気の毒です

この二月はひどく寒くちこまつてゐます 春には一度上京したいと思つてゐますがどう
なるか分りません 清水君とは時々話しますが大体同君のいふことをきいてゐるだけで何も
いゝ知恵をさづけることも出来ません

今年も卒業期になり面白くない論文読みをやらされてゐます この頃の学生は自分の専攻
の演習などにも出ず 話しにも来ず 論文の口頭試問の日まで殆んど顔を知らないやうなの

154) 久保井理津男。昭和 26 年（1951）11 月弘文堂書房から別れて創立した創文社社長。

155) 学習院大学の高山教授問題。昭和 26 年 10 月、学長安倍能成は教授会に諮らずに高山岩男を採用
しようとした。これに教員（勝田守一、久野収、清水幾太郎ら）および一部の学生たちが、高山は戦
争中の言動に対する反省ができておらず、昭和 26 年 10 月の追放解除の後も同義的責任が残るとして、
強く反対した。最終的には高山がいったん就任した後で辞任することになった。これをきっかけに
人事は安倍が個人的に行うのではなく、教授会で決定することになった。『学習院大学五十年史』上巻、
平成 12 年（2000）、418-419 頁。

もあり　これがアブレ学生といふものかも知れませんが　私などにはどうもその心理がわかりかねます　凡児正樹はこの頃全くの受験生で朝から晩まで「入試何々」といふやうな本にかちりついて居ります

ではまた　小生の新住所御注意乞ふ

三宅剛一

下村寅太郎様

80　昭和 27 年（1952）3 月 2 日消印〔封書・便箋 1 枚・速達〕

神奈川県逗子町桜山二〇七七　下村寅太郎様

仙臺市片平丁　東北大學文學部　三宅剛一

先日のお手紙拝見、末綱さん代表の総合研究のこと、山の枯木として参加することと致しませう　同意書二通同封致しますから宜しく御願ひ致します　題目は各自に決定する必要があるかどうか解らず自分としてもこれといふものないのですが　もしすぐ必要なら「確率論の哲学的基礎」といふやうなことにしておいて下さい　若い者たちにはまだ交渉はして居りませんが　一二参加（カゲ武者としてでも）できるかと思ひます（小生分のテーマ後でよければもっと考えてみます）

この手紙直接末綱さんに出す筈ですが学校の研究室で書いてゐるので同氏の御住所が解らず御手数ながら御傳達下さる様願ひ致します

本日学長選挙をやり高橋さんが再選しました

三宅剛一

下村寅太郎様

81　昭和 27 年（1952）8 月 4 日消印〔葉書〕

横須賀市逗子町桜山二〇七七　下村寅太郎様

仙台市北五十人町八一　三宅剛一

永らく御無沙汰して居りますが御変りありませんか　ことによるといまどこかへ御旅行中かも知れませんね　私の方は休になってからたゞぐずぐずして過してゐます　末綱研究の集まりも近くあるのではないかと待ち心地でゐるのですが　昨今の暑さでは少しおっくうです

この頃はどうも考がまとまらずものが書けなくて困ります　せめて半年休みがあったらといふ氣がします

逗子は大ハンジョウのやうですが　山荘はいかゞですか

鈴木君に御会ひのときよろしく云って下さい。

82　昭和 27 年（1952）8 月 15 日消印〔葉書〕

横須賀市逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台市北五十人町八一 三宅剛一

お手紙拝見いたしました 御元氣にて巣ごもりとのこと よき若鳥が大量に生れ出ることを祈ります ケプラーの本お急ぎでしたら郵送してもよろしいが 少しあとでよかったら私が持参ませう 少し重いがガマンして。

末綱研究の集まりは私にはむしろ早い方よろしく八月末で結構です（我々哲学の総合研究費は七月二十日頃来ました）西田全集の附録月報¹⁵⁶⁾に何か書けと云はれたので日記を読んだりして居ります 日記に色々なことが思ひ出されて興味があります 下村生がはじめて登場するところも印象的です 仙台は少し涼しみを覚えるようになりました

何か書かうと思ったことは想成らず傍見してあれこれ讀んだりしてゐます

83 昭和 27 年（1952）9 月 6 日消印〔葉書〕

横須賀市逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台市北五十人町八一 三宅剛一

昨日午後歸って来ました 今度はゆっくりとお話できて大へん愉快でした 上野では三時に五分ばかり後れて二科前に行ってみました但し御出でなく多分用事で出かけられなかったことと思ひます 上野へ行ったら博物館に友人の居ることを思ひ出し面会したら四日が誕生日だといふので西片町のその友人宅に一泊 五日朝の急行で歸って来ました

こちらは大分涼しい様ですが何か日の光が薄いようで淋しく感じます

奥さんにくれぐれもよろしく。

84 昭和 27 年（1952）10 月 26 日付〔封書・便箋 4 枚〕

神奈川県逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台市北五十人町八一 三宅剛一

御手紙拝見しました 先日は正樹が御邪魔をして大へんお世話になりありがとうございました 「近頃の若い者」の一人で何かと氣が散ってゐる様にみえます

十一月三十日に基礎科学の会があるよし多分出られると思ひます それはいいとしても講演といふのは余計なことのやうですが諸兄の名論を拝聴できるならそれも結構でせう 小生も候補者の一人になってゐる由ですが これはやはり言ふことを持っていてゐる人がよささうで学兄に願ひたく存じます 名古屋では集中攻撃を受けることゝなったさうで¹⁵⁷⁾ 身代りに推薦してすまなかつたと思つて居ります しかし僕が行つてゐたらもっとひどい目に会つ

156)『西田幾多郎全集』月報（岩波書店、昭和 28 年 4 月）、「思い出すま 三宅剛一」。

157) 昭和 27 年（1952）10 月下村は、日本哲学会第 6 回大会（於・名古屋大学）でのシンポジウム「哲学と民族——日本における哲学の在り方」で提題者（他に三枝博音、山崎正一）を務めた。

たであらうと思ひ、戦闘力のある学兄でよかった(?)と私かに思つてゐる次第、それにしても不愉快な思いをせられたことでせう その点多謝。

今度はあれと引換へといふロジックはあまり strict ではなく こゝでもやはり英気のある方が適當ではないかと愚考。僕も暇さへ得られれば、確率のことで讀んだり考へたりしてみたいと思ふのですが どうも講義の準備位しか出来ないのも、(それに何かと雑用が交り) 学兄のやうなガンバリが利かないためさっぱりやれません

先日は哲学会で務台君に御苦勞を願ひ公開講演会も具合よくやれました 発表の方は固い木の腰かけに座ってじっときいてゐるのは相当なおツトメです

戦前創元社でやりかけたディルタイ著作集¹⁵⁸⁾その後翻訳権などのことで引かかったまゝとなつてゐたのですが今度翻訳が出来るやうになった巻について創元社に交渉したところ同社ではやる意志がないとのことで、細谷君¹⁵⁹⁾(同君と僕とが編輯責任者となつてゐます)と相談し創元社に談すことにしました 多分もう話をおきゝかと思ひますが学兄と鈴木君¹⁶⁰⁾に相談して決めると創元社では申しております かなり大部のもので創元社としても考へてゐるのでせうが パット華々しくはなくても永續きするのではないかと考へてゐます元の企画通りが難しいといふことなら多少選擇して選集のやうにしてもよいかも知れませんとにかくよく御話し合ひ下さる様に願ひます

こちらは急に寒々とした様子になりました これからは逗子山莊のよい時期ですね

「基礎科学」の論文是非必要ならたれかに話してみますが期限はいつ頃なのでしょう か 何かいゝ論文の紹介解説などもよささうに思へるのですがどうでせうか 近頃の科学論の文献なども東京なら調べられるでせうからさういふものもよささうに思はれます

十月廿六日

三宅剛一

下村寅太郎様

85 昭和 27 年 (1952) 11 月 23 日消印 [葉書]

神奈川県逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台市北五十人町八一 三宅剛一

御葉書拝見、いまの予定では二十八日(金)朝仙台を立って夕刻逗子着下村山莊に御厄介になり三十日会合出席、その後のことは行き当たりばったりで決めようと思つて居ります 茶

158) 『人文』第 1 号、書簡 [9] 注。

159) 細谷恒夫。この『ディルタイ著作集』で唯一刊行された第四巻『歴史的理性批判』(創元社 1946)の訳者は、水野弥彦、細谷恒夫、坂本都留吉(校閲・三宅剛一)であった。

160) 昭和 22 年 (1947) 9 月教職不適格と判定され京大を辞した鈴木成高は、昭和 26 年 11 月創元社創立と同時に創元社顧問となつてゐた。

話会（講演会のあと）のとき小生に少しながい話をせよとの末綱氏よりの命ですがそんなことよりも皆で自由に話した方がよささうです 三十日朝が早いので小生だけ前日創文社辺まで行ってゐてはとも考へてゐます

山の神（下村用語による）はまだ山を下りるところに参らず他日を期することと致します。来月三日歸仙の予定。

86 昭和 28 年（1953）8 月 16 日消印〔葉書〕

神奈川県逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台市北五十人町 81 三宅剛一

御無沙汰して居ります お元気でゐられるでせうか 「大著」は完成に近づきつゝあることと拝察します こちらは一二日来急に秋めいた様子になりました、休み中に何かといふ野心をすててのん気にやっております 弘前の斉藤君からの便りによると八月三十一日から弘前大学の講義に出かけられるとのこと、往にも歸りにも御立寄り下さる様懇請いたします ちょっと御相談したいこともあり是非御会ひしたいのです。

尚この秋の仙台での日本哲学会に公開講演をお願い致したく、東京の幹事から傳へたことと存じますがこれも是非どうぞ¹⁶¹⁾。

お泊りは仙台近くの温泉にでも出かけては如何？

87 昭和 28 年（1953）8 月 23 日付〔封書・便箋 2 枚〕¹⁶²⁾

神奈川県逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台市北五十人町八一 三宅剛一

御手紙拝見いたしました

御旅程についての一つの私案（プラン）を参考に申上げてみませう

上野発 仙着

二十七（又は八）日 9.35（常磐線 みちのく）－ 15.52 － besser weil kürzer

又ハ 8.50（東北本線 青葉）－ 15.44 －

両方とも指定席ある筈、とっておいた方がよからん

これなら仙台で夕方ゆっくり出来てよからうと思ひます 小宅に少なくとも二泊、一泊では疲れて駄目でせう

三十日（又は二十九日）6.27 仙発 15.47 青森着 16.30 同発 17.43 弘前着

161) ちなみに、三宅は昭和 35 年（1960）～昭和 39（1964）、下村は昭和 43（1968）～昭和 45 年（1970）日本哲学会委員長（それぞれ第六代、第九代）に推挙された。

162) 封筒の裏に「アサハジニツクニホン（or ニフン）」とメモあり

朝少し早いけれど夜汽車よりは楽で 弘前大学には私も二三年前講義で行ったことがあります 学校の中に講師の人の宿舎があります¹⁶³⁾

十和田は私はずっと前一度行きました いま一番よいと云はれてゐるコースは朝青森を立てバスで八甲田山（コレは酸ヶ湯、蔦両温泉のところを通る由）を越えて来るコースです 私は別の途を行きましたが。

東京の暑さは殺人的らしいですが返子はいゝでせう 仙台もかなり涼しくなりました
御着仙の日時御一報を願ひます

八月二十三日

前便申した通り身上のことで御相談したいことあり こちらで少しゆっくり出来るよう御計画下さい

剛一

下村寅太郎様

88 昭和 28 年 9 月 26 日付〔封書・便箋 3 枚・速達〕

神奈川県逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台市北五十人町八一 三宅剛一

御手紙拝見いたしました 札幌からは二十二日の夜帰りました あちらは晴天つゞきで好季節でした 九大御出講¹⁶⁴⁾のため〔日本〕哲学会の公開講演を御辞退のことまことに残念ながら致し方ありません 東京の方で代人を選んでくれる筈です

西谷君と御話しをされ、高坂君に仙台への可能性について御一報下さった由、大へん有難うございました 歸仙以来関係の人々と話してゐますが こちらの哲学関係の人々は、とにかく後任のことを考へてみようといふまでに至り 第一に高坂君に当ってみようといふわけです 高坂君からさきの御手紙に対する返事がありましたら至急にその様子を承りたく、御手数ながら御知せ願ひたく存じます¹⁶⁵⁾

大兄九州へは何日に御立ちでせうか、都合によっては高橋さんが第三者的な立場で東京で高坂君にお会ひしたいと云つてゐますが 高橋さんは他に所用のため十二日（十月）にならねば出京出来ず 高坂君がその頃まで滞京を延ばすことはできないだらうかと申して居りました 九州御出発前にもし高坂君と連絡がつく様でしたら同君の都合御きゝ願へないでせうか（いま電話で高橋さんに話したら、出来たら十二日高坂君と会ひたいとのことでした）高橋さんとの会見のことについては私から直接高坂君に都合をきいてやってもよいのですが

163) 昭和 28 年度下村は弘前大学にて集中講義を行う。

164) 昭和 28 年度下村は九州大学でも集中講義を行う。

165) 昭和 26 年（1951）秋頃から下村は、GHQ により追放中の高坂、西谷、鈴木らを東京へ呼ぼうと尽力していた。

どうも被告¹⁶⁶⁾が口出しする様でへんなので、できたら大兄にお願ひ致し度いのです

もし九州御出発のために右のこと間に合はぬ様なら 高坂君からの返事は私の方へもらふことにしても宜しいかと思ひます。(もし奥様逗子御残留なら奥さまに取つぎお願ひいたします)とにかく九州御旅行の日程予定お知らせ下さい

颶風の被害はありませんでしたか 当地は大したことはありませんでした。

九月二十六日

三宅剛一

下村寅太郎様

89 昭和 28 年 (1953) 10 月 20 日付 [封書・便箋 4 枚]

神奈川県逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台市北五十人町八一 三宅剛一

御手紙並にハガキ拝見しました。九州に出かけることもならない御事情拝察、ユーウツなお気持はよく解ります 哲学会が終った晩に清水、小松両君が来て彼等の苦衷を訴へてゐました まことに困ったものです 相手の策略に陥ることなく 我まん強く さうしてこちらの真意を成るべく多くの人に知らせてそれ等の人々を味方にするといふ「政治的」考慮をもなされて 合理的解決にもって行かれることを切に祈つてゐます

哲学会¹⁶⁷⁾はともかく無事に終了、ほっとしてゐます 予報では東京以西からの参加者はなさうに思はれたのですが それでも九州あたりからも二三人来たりして曲りなりにも全国的らしくなりました たゞ京阪地方からは一人も来ませんでした シンポジウムは珍らしく左翼的な質問は一つもなくやゝ奇異に感じました 仙台が田舎のせいかな 連中の人数が少なかったせいかな それとも出題者の話がハームレスであつたためか 時間がなかったためもあるでせうが 質問は氣勢があがりませんでした

高坂君並に学兄との会見の様子は高橋さんから委しくきゝました 高坂君の家の事情など考へると相当難しい様に思はれます。そのうちまた高坂君から高橋さんに手紙で云つて来るさうで それによってまた考へなければならぬでせう どちらにしろ私の方は一度京都に行く意志を表明したことでもあり 気もちも変化しないのでアト後は後として 私の方のことだけを決めてもらひ度いと思つてゐます たゞこちらの困ることもよく分るので 何とかよい方策がたつことを願つて居り それについてはそのうち又御会ひして色々懇談したいと考へて居ります

166) 昭和 28 年 (1953) 8 月の時点で、京都大学文学部哲学科哲学哲学史第一講座教授について、同学部内に詮考委員会が設けられ、同年 3 月定年退官した山内得立の後任は三宅に決定していた。

167) 日本哲学会 (昭和 24 年創立。初代委員長天野貞祐、第二代委員長務台理作。三宅、下村も委員となる)。第 8 回大会は昭和 28 年 (1953) 秋、東北大学で開催された。

末綱さんの基礎論会のことはとりあへず同氏にハガキで書いておきましたが、もしかすると京都の方へ連続講義¹⁶⁸⁾に行かねばならぬかも知れず、予定の日に出られるかどうかいまのところ不明です。もし年内に講義に行くとすればその序でに会に出られる様なら私としては好都合です。

とにかく遠からぬうちに上京してお会ひできることになると思って楽しみにしてゐます。これは余事です。清水君が来た晩に桑木君とクナウス¹⁶⁹⁾とが同席話してゐるうち、清水君たちはもっとクナウスと話したいといふことで、そんならクナウス君上京の際に教育大に来てもらったらといふことも話しました。気軽に研究室に来てもらって少人数で話をきくか一緒に話す様にしたらいいかも知れませんが、若いさっぱりした青年で、我々の知らない戦後のドイツのことなどきけるのは興味があります。いづれこのことは清水君から話しがあるでせう。

この頃毎日天気がよく快い秋空です。三十年暮して来た仙台での秋もこれが最後になるかも知れません。

御身体に十分お気をつけられます様。

十月二十日

三宅剛一

下村寅太郎様

務台君が血圧が高く家の人が心配してゐるとき、ましたがどうなんでせうか。酒はあまり飲まぬ方よろしからん。

90 昭和 28 年（1953）11 月 7 日付〔封書・便箋 3 枚〕

神奈川縣逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様

仙台市北五十人町八一 三宅剛一

御ハガキ拜見。とりあへず末綱氏に返事を出しておきました。その後京都の臼井君からとりあへず非常勤講師で講義に来てほしいと云って来ましたが、期日のことは何とも云ってないので十一月二十九日の会合に引續いて京都に行ける様十二月初旬にして呉れないかと申し、やっておきました。その通りに行けば二十九日の会に出るつもりです。題目は「確率と歸納法」といふことに申し、やっておきましたが、この方面のことは全くたゞお義理に、何かやらねば悪いといふことで時々本などみてゐる様な次第で、話をするのは全く閉口至極です。成るべく黒田君¹⁷⁰⁾に長口舌をお願いして余興程度にしてもらひ度いものです。

168) 三宅は昭和 28 年 12 月京大文学部で集中講義を行う。

169) Gerhard Knauss (1930 -)。ハイデルベルクでヤスパースに師事。戦後來日し、東北大学外人教師となる。三宅が京大在職中の昭和 30 年と同 31 年の二度京大文学部にて集中講義及び講演を行う。

もし二十九日に会合をやり引續いて京都に行くことになれば二十七日頃逗子に参り つもって来た話をしたいつもりです

高坂君を仙台に迎へる話はどうか成立困難なやうです それでも、私については、今まで教授会にも出さずねばってゐた哲学関係の人々も止むを得まいといふところに落ついて来たやうで近く教授会に出される筈です

京都に行ったら新米として雑用から免恕してもらひ度く思つて居りますが この楽しみもあるひははかない夢かも知れませんね 先日京大の「学園新聞」にいやに大きな活字で私共のことが出てゐましたが¹⁷¹⁾ そんなところへ臨時講師で行くのも何だかすぐたい感じがします しかし住宅のことは気がかりなので早く現地に行つて頼んでおきたい気がしてゐます

そちらの cold? war のこと色々不愉快なことばかりだらうとお気の毒に思つて居ります 今度行ったら委しく御き、致しませう

こちらは二三日来急に寒くなって来ました 逗子はいゝでせう

十一月七日

三宅剛一

下村寅太郎様

91 昭和 29 年（1954）7 月 11 日消印〔封書・便箋 4 枚〕

神奈川県逗子市桜山二〇七七 下村寅太郎様

京都市左京区松ヶ崎泉川町十六ノ一 三宅剛一

大分御無沙汰しました お変りないことと思ひます 源¹⁷²⁾、大洞などの話では下村先生は大へん忙しいとのことですが 夏休みになったこと故もう少しは楽になられたのではないかと想像しています せっかく逗子に住んで休みを迎へながら東京の用事に引き出されてばかりいてはやりきれないでせう

僕の方は至って暇です たゞやらねばならぬ勉強がどうもやれないで空しく日を過ごしてゐる有様です きのふは高田君などの推奨している揉み療治にはじめて行つてみました 金閣寺の近くの沢山といふ家に出張しているところにゆくのですが少し腹をさすつていて、低血圧でほっておくと脳の当りに出血する危険があるといはれました、桑原々々——、しかし揉み療治をやればよくなるといふのです、揉み師は女の人ですが箱根の土井嬢の云つていた

170) 黒田亘のことか。

171) 山内得立の後任人事は早くから取沙汰されており、すでに昭和 25 年 4 月 10 日付の「学園新聞」には「西田哲学の後継者は誰に／山内教授の定年を廻つて紛糾」という見出しで報じられていた。竹田、前掲書、211 頁以下。

172) 源了圓（みなもと・りょうえん 1922－）。京大在職時（1954－58）の三宅の弟子の一人。日本思想史専攻。後に、日本女子大学、東北大学、国際基督教大学教授。日本学士院会員。

人とは違ふやうです 高田君の外足利、沢瀉の他大分熱心な人があるやうです 西谷君もしばらく通ったといふからあながち迷信でもなささうです

こちらでは西谷君高田君など一番気がおけずに話しが出来ます 哲学科の卒業生で京阪地方に居る者も相当に多いやうですが僕はまだほんの一部の者しか知りません 先日旧制大学院の学生として「指導すべし」といふ紙が一度にどっさりと持ち込まれ 数へてみたら七十五枚ありました これでは指導どころではありません

家はひどく粗末な狭い家ですがすぐ前が疏水でそれに沿うて桜並木の道があり あまり人通りもないので庭の狭さを補ふやうになってゐます 学兄の教へてくれた古道具屋はどの通りであった忘れましたがだんだんと様子が分ったら見るだけにでも行ってみたいと思つてゐます この当りは散歩にいゝ道があり、松ヶ崎浄水場から高野川の辺へはよく散歩に出かけます 休の間に一度高野山に行つてきたいと考へてゐますが これは大したことはなさうですね。

仙台への出講は九月二十日頃から一週間ばかりといふことでその往復の途次には御訪ねしたいと思つてゐます 休み中こちらの方へ来られることはありませんか 先日五條坂の辺を歩いたら古い家と新しい道とがチグハグでへんに怪しい感じがしました それにつれて学兄の幼い時のことを思ひ出したといへば甚だ失礼になるかも知れないが 實際思ひ出したのでした¹⁷³⁾。

まだいろいろ書きたいことがある気がしますが今日はこの位にしておきます
この夏の御計画はどんなですか 過勞にならぬ様切望致します
奥さんによろしく。

三宅剛一

下村寅太郎様¹⁷⁴⁾

92 昭和 29 年 (1954) 7 月 18 日付 [絵葉書「醍醐の塔」]

神奈川縣逗子市桜山二〇七七 下村寅太郎様

京都左京区松崎泉川町十六ノ一 三宅剛一

御手紙拝見、そのうち上田君¹⁷⁵⁾と相談してみませう 御手紙の着いた日近藤洋逸君が研究室に來たので原稿のことを頼んでおきました。とに角初号が出てみないと頼まれる方でも

173) 下村は明治 35 年 (1902) 京都市下京区大和大路松原下ル薬師町 240 に生まれた。そして京都市立六波羅尋常小学校、京都府立第一中学校、第三高等学校と進んだ。

174) 近藤洋逸 (1911-1980)。岡山県生。昭和 9 年 (1934) 京都帝国大学哲学科卒。科学哲学史。数学史を専攻。三宅の弟子の一人。後に岡山大学法文学部哲学科教授。『近藤洋逸数学著作集』全 5 巻、日本評論社 (1990-94)。

175) 上田泰治のことか。京都帝国大学哲学科卒 (昭和 18 年)。論理学、科学哲学。後に京大教養部教授。

見当がつかないのではないでせうか 何れにせよあの学会¹⁷⁶⁾のことで色々御苦勞様です
一昨日東京からの友人と一緒に醍醐から法界寺の方に行ってみました あの辺にはまだ古
都の面影が残ってゐるやうな気がしました。
先日の教授会で高田三郎君が学部長に選ばれました。適任です
七月十八日

93 昭和 30 年（1955）1 月消印 [葉書]

神奈川県逗子市桜山二〇七七 下村寅太郎様

京都市左京区松ヶ崎泉川町 三宅剛一

御葉書拝見、暮には神経痛で弱られた由、逗子の暖い空気でも神経痛を防止できなかった
とすれば、どうも夜更しなど無理がいけないのではないかと像想します どうか御身体おい
たはりなさる様切望します（奥さんの注意に従ふこと！）

「科学基礎論研究」の原稿については上田君に~~は~~是非書く様勧めてみませう。先日
ベッカー¹⁷⁷⁾の「数学基礎論史」¹⁷⁸⁾の Besprechung を近藤洋逸君に頼んで承諾し、「基礎
論研究」¹⁷⁹⁾に出すといつてゐますからこれも第四号に出す様学兄からも云つてやって下さい

末綱さんの総合研究¹⁸⁰⁾また出すと云つて来ました。僕も誰かと入代った方がよいかも知
れぬと思ふのですが時がないのでと角承諾書を送っておきました。

京都の冬は私共にはひどく寒でまるで寒中のやうな気がしません。それでも家に居る時は
コタツで万事やってゐます。時に暖かすぎて眠くなる位です。

1955 年は小生六十才、うそのやうです。

94 昭和 30 年（1955）3 月 21 日付 [封書・便箋 3 枚]

神奈川県逗子市桜山二〇七七 下村寅太郎様

京都市左京区松ヶ崎泉川町十六 三宅剛一

拝啓 大分暖かくなって来ました 今日はお彼岸だといふのに霧深くひどくしめっぽい日
です

先日西谷裕作君¹⁸¹⁾から奥様が病気で入院手術せられたことをはじめてき、驚きました

176) 前年、昭和 28 年（1953）発足したばかりの科学基礎論学会のこと。

177) Oskar Becker (1889–1964) 現象学、数理哲学。フライブルク大学でフッサールに師事。1929 –
1931 同大学員外教授。その後ボン大学教授。1930・5 から 1931・9 までフライブルクに留学した三宅は、
ベッカーをチューターとして、当時出版されたばかりの Heidegger, *Sein und Zeit* を講読した（他に
白井二尚、尾高朝雄、大小島真二が参加）。白井二尚「留学当時の思出」（『哲学研究』第 550 号、612 頁）

178) Oskar Becker, *Grundlagen der Mathematik in geschichtlicher Entwicklung*, 1954.

179) 科学基礎論学会編『科学基礎論研究』（『基礎科学』が改称されたもの）。

180) 文部省科学研究費の申請（総合研究、代表者：末綱恕一）。

もう家に歸ってゐられるのでせうがその後の経過は如何でせうか 大へん御丈夫なやうに
思つてゐたのですが御実家の件で心身の過労があつたのではないかと推察して居ります

私の知つてゐる奥さんも前に腎臓の一方を切除しましてその後ずっと元気でやつて居りま
すから後のことは別に心配はないのではないかと思います それにしても学兄もずい分困
られ不自由且つ心配されたことと思ひます 当分大にいたはってあげねばならぬでせう ??
これはこちらから言ふまでもないことでせうが

学年末の雑用ももう少しで片づくので天氣のよい日に奈良あたりまで出かけてみようと思
へて居ります

例の研究費審査のことで五月中旬文部省に来るやうにとのことなのでその頃出京、御会ひ
できることを楽しみにして居ります

京都の春は久し振りですが年六十に達して学成らず徒らに日を過してゐる焦燥の感に悩ま
されながらもぐうたらに時を空費して居る有様です

それでは又、奥様くれぐれも御大切に、どうかよろしく御傳へ下さい。

三月二十一日

三宅生

下村学兄

95 昭和 31 年（1956）3 月 15 日付〔封書・便箋 2 枚〕

神奈川県逗子市桜山二〇七七 下村寅太郎様

京都市左京区松ヶ崎泉川町 三宅剛一

御手紙拝見いたしました いよいよ御渡欧確定のよしよかったと思ひます¹⁸²⁾ この上は
文部省その他から何とかして引出し少くとも半年か十ヶ月滞在できる様御努力が大事と存じ
ます 高坂君も今月あたり渡米 ヨーロッパでは御一緒に旅行されるとかき、ましたがさう
なれば面白いでせう 井島君も三月末頃出発と申して居りましたがどう廻るのかまだきいて
居りません 先生思ったより臆病らしく若い弟子を同伴するとか。あまり苦しいスケジュール
をつくらずゆっくりと見て来られるのが宜しいでせう

五月二十六七日基礎論学会で御入洛のよし 少しゆっくり話せるように予定して御出で下
さい 西谷君は夫妻とも胃カイヨウとのこと ヘル西谷の方はもう元気になってゐます。裕
作君卒論聞きわに弱りついに一年延期しました おしいことです

正樹は修士コースにはいると申しております

181) 西谷裕作(1926－1994)：西谷啓治の長男。京大文学部卒。後京都大学文学部哲学科倫理学講座助教授。

182) 下村は昭和 31 年（1956）7 月日本学術会議から派遣され、イギリス・アペリストウウィズで開催
される学会に出席し、その後スペイン、フランス、ドイツ、スイス、イタリアを歴訪。9 月 13 日帰国。
竹田編「下村寅太郎の百年」参照。

小生の方は今日で試問を終りこれから少しゆっくり出来る筈です 昨日向坂の試問に立ち会いました えらいドンキホーテですね 博士コース志望とのこと、一考の要あり
奥さん御元気ですか どうかよろしく

三月十五日

剛一

下村学兄

96 昭和 31 年（1956）5 月 30 日消印〔封書・便箋 2 枚、封筒入フィンク宛の紹介状同封〕
神奈川県逗子町桜山二〇七七 下村寅太郎様
京都市左京区松ヶ崎泉川町十六 三宅剛一

フィンク君¹⁸³⁾から紹介状をもらはれたら宜しいでせう もしボンまで足を延ばされるなら別に Becker に紹介状を書いても宜しいが如何ですか 昨晚日独文化研究所（今度再興）の会でドイツの古い町や Bayern-Alpen の映画をみてそろ旅情をそゝられました（ミュンヘンには行かないのですか）

しかし何よりも近頃知人の誰かれがよく病気するのでその点心配で、出来るだけのん気に、日常義務からの解放としてこの機会を利用されることを幾重にも切望忠告致します 高坂君はどんな風か、活動家の彼のこと故中々気楽には出来ないのではないかと想像してゐます
この頃と角不順、湿気多くいけませんと奥さんも御丈夫でせうか

小宅この頃バラ満開で花の無心客が相当あります 御出発までに一度会いたいのですが一寸むづかしいかも知れませんね では又

三宅生

下村学兄

〔同封のフィンク宛紹介状〕

〔封筒〕

Herrn Prof. Eugen Fink, Universität Freiburg

Goichi Miyake, Kyoto Universität, Kyoto, Japan

（本文）

Kyoto, 29, Mai, 1956

183) Eugen Fink (1904-75) は三宅の留学当時フッサールの助手であった。フッサールの命により日本人留学生のために学問上の、生活上の世話をした。また三宅、尾高朝雄、臼井二尚、大小島真二、芳賀檀はフィンクに依頼して毎週 1～2 回の私的授業を受けた。こうして三宅とフィンクの間に友情が育った。学習院大学を定年退職した直後の昭和 40 年（1965）5 月～7 月、DAAD の招きで渡独した三宅は、懐かしのフライブルク大学にフィンクを訪ね、三十四年ぶりの再会を喜びあった。

Lieber Herr Professor Fink,

Es ist so lange her seitdem wir uns getrennt haben. Wieviele ist inzwischen geschehen! Ich fühle sehr viel sagen zu haben. Aber diesmal nur Geschäftsmässiges. Nur kann ich meine herzliche Kongratulation an Ihre Rückkehr als Professor an unserer Freiburger Universität nicht verschweigen.

Meinen Freund, Herrn Dr. T. Shimomura, Professor der Philosophie an der Pädagogischen Universität Tokyo, möchte ich Ihnen empfehlen. Er ist ein hochragender Schuler von Nishida, und er hat bisher viel Schönes über den geistesgeschichtlichen Hintergrund der modernen exakten Wissenschaften geschrieben. Er wünscht Heidegger zu besuchen, aber nicht aus gewöhnlicher leichtherziger Neugier. Er ist ein geschäftsführendes Mitglied des Internationalen Forschungsinstituts der Philosophie in Japan, wofür Heidegger grosse Interesse und Sympathie hat. Ich bitte Sie um Ihre Hilfe und um Ihren guten Rat dazu.

Nur muss ich mit Herzensschmerz von dem plötzlichen Tod von Herrn T. Otaka Ihnen mitteilen. Näheres könnten Sie von Herrn Shimomura hören? Bitte, schreiben Sie einmal!

Ihr herzlich ergebenster

G. Miyake

97 昭和 31 年 (1956) 5 月 30 日消印 [葉書]

逗子市桜山二〇七七 下村寅太郎様

京都、松ヶ崎泉川町 三宅剛一

別紙封書中フィンク君への紹介状の中で—— den geistesgeschichtlichen Hintergrund と書いた箇所—— die geistesgeschichtlichen Grundlagen とした方が宜しい (?) かなと思ふのでちょっと訂正しておいて下さい 尚湯浅誠之助¹⁸⁴⁾君が小さい貿易会社の社長をしてゐるのですがもし何か用があったら御紹介します

湯浅貿易株式会社、 (自宅は片瀬です)

東京都銀座東一ノ二、

98 昭和 31 年 (1956) 7 月 12 日付 [葉書]

神奈川県逗子市桜山二〇七七 下村智恵子様

京都市左京区松崎泉川町 三宅剛一

184) 「湯浅誠之助君に助けてもらって、「一般者の自覚的限定」についてのサンマリーをドイツ語でタイプして、ハイデッガーにみせたことがあった」(三宅「思い出すまま」)。

先日は御葉書をいたゞき有難うございました 書物も昨日確かに受取りました 正樹がちょっと病氣して居りますので 家内からの御返事が後れるかも知れませんが私から書きます 下村君も大へん愉快に旅行してゐる様子で結構なものと存じます 昔とちがって空からの旅なので 私共の行けなかった所へもたやすく行け 実にスマートな旅行が出来るわけですね 後で話をきくのが楽しみです

あの物しりが一層物しりになってこわいやうです

暑中御身体御大事に。

七月十二日

99 昭和 32 年（1957）1 月 30 日付〔封書・便箋 4 枚〕

神奈川県逗子市桜山二〇七七 下村寅太郎様

京都、左京 松ヶ崎泉川町 三宅剛一

先日は懇々御出で下さって恐縮でした

昨日安倍さん来宅しばらく話しました 僕の方では住宅のことが気が、りだからその問題さへ都合よく行けば行ってもよろしい 住宅といっても全部は無理かと思ひ宅地だけでも学習院の方で出して呉れるなら家はこちらで建てる（或は買う）ことにしても宜しいと云ふ様なことを申しましたが 安倍さんは考へておきませうといふ返事で、かなり漠然とした而も無造作な答なので少し心細い気がしました がとっさのことでさうとしか云へなかったのでせう 帰りに玄関でこの家の坪数や費用のことなどきいてゐました（この安家を目やすにされては困るのですが）。

いづれ何とかもう少し具体的にはっきりした話にしたいと思つて居りますが 学兄が安倍さんに御会ひの節は安倍さんの考をきいておいて下さいませんか 四月末か五月初めには一度上京するつもりでその時また色々お相談し、安倍さんとも会ってみようと思つて居ります

哲学科の講義のことなどあまりよく覚えてゐない様子でしたが院長としての苦心談のやうのことは少し聞かされました どうもかういふ話しは僕にはやりにくく こちらの意向がどれだけしっかり通じたか少し怪しいものです

先日河野与一君夫妻が来て学兄からきいたといふので東京轉出の話しをしました 僕としてはこれまで一度も自分の気に入った気持ちのよい家に住んだことがないので終着の住家だけでも落ついて勉強のできるところにしたいといふ気持ちです 高田君に話したら何とかして京都に留まれないかと云つてゐました 学習院の職員録や講義の表のやうなものがあつたら事務でもらつて送つてくれませんか

どうも申しおくれましたが学兄の出張講義の件¹⁸⁵⁾ 先日の教授会で決定しました どうか宜しく願ひます 時間三十時間（二単位）です 四単位六十時間にとも思ひましたがそれが

185) 下村、昭和 32 年（1957）京大文学部にて集中講義（「社会科学の生成過程」）。

とどうしても二回出張してもらふことになり御迷惑かと思ったので三十時間にしました 東京から来る人たちは大抵三十時間です（浅野さんは例外）

いろいろ申したいことがある様な気がしますますがまた書くことにします

奥様によろしく

一月三十日

三宅生

下村学兄

100 昭和 32 年（1957）2 月 17 日消印〔封書・便箋 3 枚〕

神奈川県逗子市桜山二〇七七 下村寅太郎様

京卜、松ヶ崎泉川町十六 三宅剛一

御手紙拝見いたしました 色々御配慮ありがたう 二三日前安倍さんから手紙が参り 家の方は今年中に空く公宅があるから 一先づそれにはいったらと申して来ました（目下学習院職員でない人が住んでゐる由）公宅といふのがどこにあってどんな家か分かりませんが¹⁸⁶⁾ 面倒がないといふ点ではよいのではないかと思います 安倍さんにもそんな様な返事をしておきました

高橋穰¹⁸⁷⁾さんからも手紙で哲学科の様子など報せて来ました かうしてどうも著々軌道がつくられて行くやうで 自分ではたゞそれに乗るだけになりさうです 安倍さんからは現在の待遇と恩給額を報せとあり 気の早いのに驚いてゐます

正樹の本代のドルクーボン御送り下さって有難うございました 正樹は大へん喜んで居ります 厚く御礼申し上げます いづれ上京の際清算させてもらひます

今の家のことですが、仙台にゐる奈緒子が正樹かのために将来入用となるかも知れず差当り誰かに貸しておいてはといふことも考へて居るのですが 貸すことは将来面倒が起る可能性もあり賣ってしまうことになるかも知れずまだ何れとも決めて居りません もし賣ることになる場合は川勝さんのことを第一に考へるつもりです どうもまだあまり実感がわいて来ないといふのが実状です 学校の用事は三月一杯で終る様ですから上京は四月半頃になるかも知れません

NHK 人生論の御放送¹⁸⁸⁾ね床で時々きいてゐます 家内はとてもよく解ると感心してゐま

186) 当時、木造一戸建ての舎宅が数軒、学習院中等科高等科の体育館の東に位置し、明治通りに隣接する敷地に存在した。現在は更地で当時の面影を残す建物は何もない。

187) 東北大学法文学部倫理学教授を定年退官後、成城学園総長を経て学習院大学哲学科教授。昭和 33 年 3 月学習院大学定年退職。同年 4 月その後任として三宅が着任する。書簡 40、注 31 参照。

188) 下村「科学史 古代・中世」（『NHK ラジオテクニク教養大学』9・10 月号、日本放送協会ラジオサービスセンター、昭和 31 年（1956））。

す 今学年は「人間存在論」の特講のしめくゝりをつける順序になってゐるのですが藝術とか宗教とかといふやうなことをやったものか ニワカ勉強でやれるものかなどと考へて居るところです

いづれまた。

三宅生

下村学兄

101 昭和 32 年（1957）4 月 28 日付〔推定〕〔葉書〕

神奈川県逗子市桜山二〇七七 下村寅太郎様

京ト、松ヶ崎泉川町 三宅剛一

〔オモテ〕

神戸の三田君から「基礎論学会」今度はやれないと云って来ました もし発表者不足なら直接すゝめてみて下さい。富川（サイバネテックス）ははりきって発表をまっています。

〔ウラ〕

御葉書拝見、一昨日大よその予定を書いたハガキを書しておきましたが私の用事はクナウスに会ふこと（これは到着の日（一日）か、二日の午前か）、学習院に一度安倍さんを訪ねること、六日の哲学会と東北大の会に出ること位で、あとは本屋を見て歩いたり、もし平塚見学があればそれについて行くことなどです、四日（土）に学習院を予定してゐて、その通りに行けば二、三、四、五と午後は空いてゐるので（見学を除き）自由にとれる筈です

102 昭和 32 年（1957）10 月 13 日付〔封書・便箋 1 枚〕¹⁸⁹⁾

神奈川県逗子市桜山二〇七七 下村寅太郎様

京都市左京区松ヶ崎泉川町 三宅剛一

二十四日に一度西谷君からマルセル¹⁹⁰⁾の話をきく会をやらうと云ってゐます 先生しきりに尻ごみしてゐますが。

とり急ぎ御返事まで。

十月十三日

三宅生

下村学兄

103 昭和 32 年（1957）11 月 25 日付〔推定〕〔封書・便箋 2 枚〕

189)「十二月十五日」？ という書き込みあり

190) 昭和 32 年 10 月、小島威彦の設立した国際哲学研究会の招きにより、ガブリエル・マルセル来日。

神奈川県逗子市桜山二〇七七 下村寅太郎様

京都市左京区松ヶ崎泉川町 三宅剛一

御手紙拝見いたしました。御令兄様思しくないとのこと御心痛の事と存じます。せめて来年まで持ちこたへられる様祈って居ります¹⁹¹⁾

学習院に参集のこと、貴兄からの御申傳えはたしかに届いてゐたのですが他の先生たちの都合で十二月一日になった次第です。目白辺りに宿を頼んでおいたのですがまだ返事なく〔二〕十七日迄に報せなければ他の宿にします。三十日はツバメで上京しますのでもし寛さん¹⁹²⁾から宿の報せがなければ逗子山荘に御厄介になります

二十八日に停年講義（近頃出来た行事）をやれば一切講義終了です。先日普通講義の最後の時間の後ちょっと妙な気もちでした。まあ一段落にちがひありません

マルセルの話は中々面白かったのですが話し方や態度はまがう方なき巴里人ですね

唐木君¹⁹³⁾にも会ひましたがシラフではまるで枯木ですね。一種の風格でせうが

いづれ予定が決ったら御報せします

二十五日

三宅生

下村学兄

104 昭和 33 ～ 39 年（1958 ～ 1964）7 月 20 日付〔封書・便箋 6 枚〕¹⁹⁴⁾

神奈川県逗子市桜山二〇七七 下村寅太郎様

東京都豊島区目白町一丁目学習院舎宅 三宅剛一

昨日は具合よく御会ひ出来て愉快でした。あの時話のあった国際哲学会¹⁹⁵⁾の会長の件につき、いづれ小島君¹⁹⁶⁾からまた話があるかと思ひますが、その前に小生の気持ちを申し上げておきたく存じます。昨夜も申した通り出来れば辞退したく、その線でもう一度御相談願ひます。しかしどうしても免かれ得なければ次の様な条件を認められるなら、御引受けしませう。この条件は小島君に口頭で申し述べてもウヤムヤに終る可能性が多いので貴兄に申し

191) 翌昭和 33 年（1958）1 月 7 日下村の長兄・下村直三郎没（享年六十歳）。

192) 寛泰彦（1908－2000）：東京帝国大学倫理学科卒。学習院大学哲学科教授。倫理学、日本思想史。

193) 唐木順三（1904－1980）：昭和 2 年（1927）京都帝国大学哲学科卒。明治大学教授。

194) 住所などから、昭和 33 ～ 39 年（1958 ～ 1964）の発信と推される。

195) 昭和 29 年社団法人「国際哲学研究会」設立：小島威彦（発起者）、下村寅太郎、高山岩男、鈴木成高、大島康正、ロゲンドルフ・アルムブルスター、吉川逸治、手塚富雄、中村元。

196) 小島威彦。旧幕臣の三男として明治 36 年（1903）神戸に生まれる。西田幾多郎を慕って東大から京都帝大哲学科に移り、昭和 3 年（1928）卒業。下村より二年後輩であって、同期に高山岩男、服部英次郎、速水敬二らがいた。その出自と縁戚を背景に、学者、政治家、財界人、芸術家を含むネットワーク作りに尽力した。明星大学教授。竹田、前掲書、72 頁。

上げ 小島君その他の中堅の人々に御傳へ願ひ度いのです

国際哲学会研究会はこれまでのところ 研究会といふよりもむしろ事業団体として活動して来たようで、私はさういふ事業的なことには全く興味が無いのです そればかりでなくさういふ事業団体の会長となる（別に外的に働くのでなくても）のは 自分の気持ち?? 大げさに云へば学究としての自分の志操に反することです。事業は事業として、哲学の傳達普及び宣傳の仕事として意味はあるでせうが それは私のたずさわるべき事ではないと思ふのです

先師の本や論文を外国語に訳して出すこともいゝことではあるでせうが、師に対して我々の第一義的にやるべきことは先師の哲学の研究検討と、師が考へたことを自分で考へることによって自分の道を見出すことだと思ひます

どうもこの頃我々は一体に一般の讀者聴衆?? 学生、インテリ、その他の人々?? に対して哲学を説く機会のみ多く、次第にそれに慣れて、同輩に対して発表し、批評をきゝ、真剣に論議することがだんだん無くなって行くやうで?? 特に東京といふ土地に居ればさうですが?? 次第におし流されてたゞ有名になり名士になって、学問はものにならずに終る危険が多いのではないでせうか。 それでも国際哲学会も事業と共に一方に研究の機関として、対外的活動ばかりでなく自分たちの研究を進める機関としてやって行ければ 私などもたゞのお役目以上の気持ちで参加出来ると思ひます それについては例へば?? 外部に発表しなくとも、実質的に「研究会」の中に、事業部と研究会といふ様なものをおき、研究部では定期的に仲間だけの発表討論の集まりをもつことにする。事業には金がかゝるでせうが研究会には殆んど金はかゝらず 数名の者の集まりとしてやって行けるでせう ~~日本の哲学~~我々も、年齢の点からも、いつまでも他人や外国のものにばかり目を向けてゐるべきではなく自分たちの?? 結局は銘々各自の哲学を打ち建てねばならぬ時期に来てゐると思ふのです それが出来れば「国際性」はおのづから出て来るでせう また研究会での発表を印刷するかどうかあとで附随的に起って来るでせうがそんなことは後のことでいゝと思ひます 事業部研究部といっても会員は別に分れる必要はなく、常任理事（?たしか貴兄と小島君）の分掌を決め、研究部は研究部として具体的なプログラムを立てゝやること、東京では従来も時々やってゐた様ですがそれを散発的にでなく、五人なり六人なりの委員が責任をもって計画的に各自の思想を話し、皆で討議する、これは東京在住者に限らずまたたゞの討議参加者は幾らか多くてもよろしからん。（発表者は多くしない 集る者時には三、四人でもよし） 皆忙しいし今更大人げなく面倒だといふなら 小生はたゞ引き退るだけです。会の資金については特別のファンドなしに始めたこと故これまで小島君の奔走に依存したわけですが そろそろ会として自立の方向に計画を進めること。

いま私の考へることは以上のやうなことです その他若い学究への補助も結構ですが それも資金の計画と連けいして考へたらよいと思ひます

一度お会いして話したいと思ひますがとりあへず手紙で申し上げます

七月二十日

三宅剛一

下村寅太郎様

105 昭和33年(1958)10月2日消印〔葉書〕

神奈川県逗子市桜山二〇七七 下村寅太郎様

東京豊島区目白町学習院舎宅 三宅剛一

その後お元気ですか。学期試験で今日から十日ばかり学校が休みになりました。

「現代哲学入門」¹⁹⁷⁾を頂戴しましたが貴論「唯物史観論」を粗讀致しました。論旨は全く同感で私の言ひたいこと或はそれ以上のことを実に適切に、而も大へん雄弁に言つてゐます。これだけ原理的に行き届いて論ぜられたものは恐らく我国にはなかったでせう。

この休みに歯科医に通はねばならないのですがそれが早く終わったら一日位どこかへ行きたいと思つてゐます

逗子山荘は御都合いかがですか。

106 昭和40年(1965)秋より前〔推定〕 27日付〔封書・便箋(文房堂製)2枚〕¹⁹⁸⁾

下村寅太郎様

三宅剛一

〔紹介状：郵便ではない〕

前略

突然ですが東北大学理学部助教授和泉良久君を御紹介申し上げます

同君は昭和十八年哲学科卒で私の後任として理学部で科学概論を担当して居りますが前から数学基礎論を研究し発表した論文も多数あります 哲学の方ではフッサールの現象学によく通じて居り新しい基礎論を現象学的に基礎づけることを試みて居ります。その題目について学位請求論文を書き上げ貴兄のところに提出したい希望であります 御多忙中で恐縮ですが一応論文の概要を和泉君からおき、下さって適宜御考慮下さいますれば幸甚です

197) 下村寅太郎編著『現代哲学入門—唯物論と人間』(有斐閣、昭和33年(1958)8月)。下村は「序言」、「序論」、「唯物史観—マルクスにおける「歴史科学」と「歴史の形而上学」—」を執筆した。

198) 年代不明。ただし、和泉良久は『無限論—第一巻序説』(創文社昭和41年3月)の出版にあたり昭和40年度文部省科学研究費補助金(研究成果刊行費)の交付を受けていること、そして同書の序文に三宅と下村の「多くの貴重な御示唆」への謝辞が見えることから、少なくとも昭和40年(1965)秋より前の発信と推定される。

何分時間がないのでトウ突な願ひとなりましたがどうかよろしく。

二十七日

下村学兄

三宅剛一

The Collected Letters from Gouichi Miyake to Torataro Shimomura (2)

Kiyoshi Sakai/ Yasuko Kase

In the first volume of *Jinbun* (2002) I published the first 23 letters from Gouichi Miyake to Torataro Shimomura, with a further plan to publish the remaining 33 letters in the second volume. However, after that first publication, one of the pupils closest to Shimomura, Professor Atsushi Takeda, discovered many more letters as he continued his search. Therefore, I thought it better to wait until all of these letters were discovered. The letters from Miyake to Shimomura had reached 106 when Professor Takeda died from cancer unexpectedly in 2005. This meant the loss of the sole person in charge of Shimomura's study and opus postumum. So I have decided to publish these remaining 83 letters in this number of *Jinbun* (Nr.7), though we cannot exclude absolutely the possibility that further letters may be found. While most of the first letters published were written before or during the war, most of this second batch of 83 letters were written after the war, and the last one can be dated approximately from the end of the 1950s to before 1964. We can see from the texts of these very valuable documents how the philosophers of the so-called "Kyoto School", the pupils of Kitaro Nishida (1870-1945), tried to promote their studies and to help each other during that difficult, catastrophic period; especially, how Miyake and Shimomura, pupils of Nishida, made great efforts to reconstruct Japanese philosophical society and to lead incoming scholars to the principle of academic philosophy and of "systematic thinking". As for the development of the philosophy of Miyake, one can notice that he already mentioned in that period his turn toward an empiricist standpoint after engaging with the philosophy of mathematics, the phenomenology of Husserl and Heidegger, and the history of philosophy from Greek to Kant and German idealism. This fact demonstrates Miyake's "Human-ontology" (Ningensonzairon) which is presented and thematised in his second main work *Human Ontology* (Tokyo, 1966), makes its appearance much earlier than one had once supposed. (Kiyoshi Sakai)

	付 (西暦)	付(年号)	消印	消印局	書簡日付	切 手	差 出	宛 先	形 態	内 容 概 略
1	1937		12.9.21	仙臺	なし	2 銭郵便はがき	三宅剛一	下村寅太郎	葉書	『人文』第1号〔1〕
2	1938	13.7.5	13.7.6	仙臺	昭和十三年七月五日	2 銭郵便はがき	三宅剛一	下村寅太郎	葉書	『人文』第1号〔2〕
3	1938	13.12.3	13.12.5	仙臺	十二月三日	4 銭 1 枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋 5 枚	『人文』第1号〔3〕
4	1939	14.9.10		仙臺	九月十日	4 銭 1 枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋 5 枚	『人文』第1号〔4〕
5	1941	16.11.12	16.11.13	仙臺	十一月十二日	4 銭 1 枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋 3 枚	『人文』第1号〔5〕
6	1941	16.12.5	16.12.6	仙臺	十二月五日	4 銭 1 枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋 3 枚	『人文』第1号〔6〕
7	1942	17.2.23	17.2.23	仙臺	二月二十三日	2 銭郵便はがき	三宅剛一	下村寅太郎	葉書	① Haldane の本へのお礼。 ② 「科学史の哲学」の評判について。 ③ 振興会の講演の腹案について。 ④ クザヌスの本がほしい、その他近況。
8	1942	17.7	17. .2	仙臺	なし	5 銭 1 枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋 3 枚	『人文』第1号〔7〕
9	1942		17.8.6		なし		三宅剛一	下村寅太郎	葉書	『人文』第1号〔8〕
10	1942	17.8 下旬 [推定]			なし		三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋 2 枚	① 公用の件お引き受けする。 ② 諸学振興会委員会 9 月 1 日欠席する。 ③ <i>Realenzyklopädie der kl. Altertumswissenschaft</i> のビュシスの項が出ている巻があったら拝借したい。 ④ 下村の東北旅行の予定を尋ねる。
11	1942	17.9.11	.9.11	仙臺	九月十一日		三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋 3 枚	『人文』第1号〔9〕
12	1942		17.9.21	仙臺	なし	2 銭郵便はがき	三宅剛一	下村寅太郎	葉書	9 月 25 日下村の来仙および来仙後の予定を尋ねる。
13	1943	18.1.17	18		一月十七日	5 銭 1 枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋 4 枚	『人文』第1号〔10〕
14	1943	18.3 [推定]			不明		三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋 3 枚?	① 身体を悪くしたという下村を気遣う。 ② 6 月下旬にある自然科学会の前の委員会のために 4 月か 5 月中旬には上京する予定。 ③ 西田先生の推薦もあって本が国民学術協会で表彰されることになった。 ④ 桑木さんの署名人の趣意書が届く。
15	1943		18.3.31		なし	2 銭郵便はがき	三宅剛一	下村寅太郎	葉書	4 月 6 日文部省の委員会のため上京、8 日西田先生訪問のお誘い、9 日国民学術協会の集りの予定。
16	1943	18.4.4	18.4.4	仙臺	四月四日	2 銭郵便はがき 12 銭 1 枚	三宅剛一	下村寅太郎	葉書	8 日鎌倉まじりの予定を 7 日に変更して再度お誘い、8 日晚下村宅にお邪魔したい。
17	1943	18.4.23	18.4.23	仙臺	四月二十三日	2 銭郵便はがき	三宅剛一	下村寅太郎	葉書	① 東京でお世話になったお礼。 ② 西谷（能）君が滞在中。 ③ 「哲学年鑑」を託して送る。 ④ 法文学部の聴講生と選抜試験、専攻生について。
18	1943	18.5.27 [推定]			五月二十七日		三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋 2 枚	① 東北旅行・北海道旅行について。 ② 高坂君の来仙の予定について。 ③ クザヌスの代金について。その他近況。
19	1943	18.7.6	18.7.	仙臺	七月六日夕	2 銭郵便はがき	三宅剛一	下村寅太郎	葉書 1 枚	『人文』第1号〔11〕
20	1944	19.3.5	19.3.5	仙臺	三月五日	5 円 1 枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋? 枚	下村御尊父様へのお悔やみ。「無限論の形成と構造」の感想。
21	1944	19.3 下旬 [推定]		仙臺	なし	2 銭郵便はがき	三宅剛一	下村寅太郎	葉書	下村からの便りのないことを心配する旨。弘文堂の世界史講座続けるのでヒストリクスを勉強しようと思っている。近況報告。
22	1944		19.5.29		昭和十九年五月吉日		三宅剛一	下村寅太郎・智恵	封書・印刷案内状	長女奈緒子の結婚式の案内（印字）。お祝へのお礼、三宅が上京するたび御世話になっていることへのお礼（文世さん? の直筆）

	付(西暦)	付(年号)	消印	消印局	書簡日付	切手	差出	宛先	形態	内容概略
23	1944		19.6.25	仙臺	なし	3 銭郵便はがき	三宅剛一	下村寅太郎	葉書	① こちらの卒業生の松本が上京の際お訪ねするので宜しく。 ② 「近代科学の哲学的問題」の合同研究について、下村の来仙を心待ちにしている旨。
24	1944	19.7.22 [推定]			七月二十二日		三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋 3 枚	① 文部省から研究課題につき、研究要項と助成金使用予定計算書を催促されたので相談したい。 ② 来仙の都合を知りたい、末綱さんは一緒に来るのか。 ③ 来仙の折りにホールデンの「科学と哲学」をもう一度お借りしたい。
25	1944	19.7.28	19.7.28	仙臺八幡町	七月二十八日	20 銭 1 枚 ?	三宅剛一	下村寅太郎	封書 ・ 200 字詰原稿用紙 5 枚	『人文』第 1 号 [12]
26	1944		19.8.17	仙臺八幡町	なし	3 銭郵便はがき 20 銭 1 枚	三宅剛一	下村寅太郎	葉書	① 金澤旅行について。 ② 文部省からの助成金交付について。 ③ いま世界史講座の歴史主義を書きかけている。
27	1944	19.8.25	19.8.26	仙臺八幡町	八月二十五日		三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋 3 枚	① 金澤行きについて。 ② 小切手の送付（文部省からの三千円の半分）。 ③ 科学論について。 ④ 東京に立寄り本探しの予定。松本にも立寄り食料調達。戦況についての感想。
28	1944	19.11.3	19.12.4		十一月三日	7 銭 1 枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋 4 枚	『人文』第 1 号 [13]
29	1944	19.11.19			十一月十九日	7 銭 1 枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書 ・ 200 字詰原稿用紙 3 枚	『人文』第 1 号 [14]
30	1944		19.11.29	仙臺	なし	3 銭郵便はがき	三宅剛一	下村寅太郎	葉書	『人文』第 1 号 [15]
31	1944	19.12.27	19.12.28		廿七日		三宅剛一	下村寅太郎	葉書	『人文』第 1 号 [16]
32	1945	20.1.10			一月十日	7 銭 1 枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書 ・ 250 字詰原稿用紙 6 枚	『人文』第 1 号 [17]
33	1945	20.1 下旬 ～ 2 月上旬			なし	5 銭封緘葉書 2 銭 1 枚	三宅剛一	下村寅太郎	封緘葉書	『人文』第 1 号 [18]
34	1945	20.2.9	20.2.9	茨城県	二月九日	3 銭郵便はがき	三宅剛一	下村寅太郎	葉書	① しばらくお便りがないのでどうかと思っている。 ② 福島経法専門学校の生徒に話をしに日立まで来たこと。
35	1945	20.3.11			三月十一日 、十三日（追記）	7 銭 1 枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋 4 枚 + 「日本諸學研究報告要項」1 枚	『人文』第 1 号 [19]
36	1945	20.4.26			四月二十六日	3 銭 1 枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書 ・ 200 字詰創元社原稿用紙 7 枚	『人文』第 1 号 [20]
37	1945	20.5.26			五月二十六日	10 銭 1 枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書 ・ 200 字詰創元社原稿用紙 4 枚	『人文』第 1 号 [21]
38	1945	20.7.16 [推定]			七月十六日	3 銭郵便はがき 2 銭 1 枚	三宅剛一	下村寅太郎	葉書	仙台の空襲の状況について。諸学振興からの助成金の予定書について。
39	1945	20.9.30	20.10.1	仙臺	九月三十日	5 銭 4 枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋 8 枚	『人文』第 1 号 [22]
40	1945	20.11.12 [推定]			十一月十二日	10 銭 1 枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋 5 枚	文理大からのお誘いを辞退する旨。来年から法文に移る話。

三宅剛一差出・下村寅太郎宛書簡（下）

	付(西暦)	付(年号)	消印	消印局	書簡日付	切手	差出	宛先	形態	内容概略
41	1946	21.3.25	21.3.25		三月二十三日	5 銭 2 枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋 5 枚	『人文』第 1 号 [23]
42	1946	21.4.28	21.4.29	仙?	四月二十八日	3 銭郵便往復はがき往信	三宅剛一	下村寅太郎	葉書	弘文堂の西谷君と話したこと。文部省の研究について。
43	1946	21.5.3 [推定]		宮城縣	五月三日	10 銭 1 枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋 4 枚	① 今年は特殊講義で数学基礎論をやること。 ② 哲学研究には数理哲学の歴史的研究という形でまとめる。 ③ Dutens のライブニッツを買っておいてください。 ④ 「文化」にライブニッツを書いた堀内操という人について。 ⑤ 「近代科学の思想系譜」別刷を、読んでくれる人にさしあげる。 ⑥ オッカムの本を注文したけれど未着。 ⑦ Nominalismus について文献を読む暇がない。 ⑧ Jagodinsky が発表したライブニッツについての論文。 ⑨ 白井君の病気について心配。
44	1946	21.6.23 [推定]			六月二十三日				封筒なし・便箋 6 枚	① 下村からの手紙がケンエツにかかっていること。 ② 共同研究のこと。 ③ 河出の増村が来て哲学叢書を頼まれたが、書けそうにないから卒業生に頼む。 ④ 京都の高坂、高山君のことなど。 ⑤ 岩手県に波多野さんを訪ねたこと。 ⑥ 理学部の後任のこと。 ⑦ 西田全集の計画のこと。 ⑧ 「哲論」の西田さんの日記を読んだ感想。 ⑨ その他近況。若菜君が正樹に英語を教えに来ていること。
45	1946	21.8.16 [推定]	. . 16		八月十六日	30 銭 1 枚 1 円一枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋 3 枚	① 千葉さんが帰ってきたので引越さねばならない。 ② 下村に会いにゆくプラン。 ③ 手紙がケンエツされていること。
46	1946	21.9.29			九月二十九日	30 銭 1 枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋 5 枚	① 出かけたときは別の家に帰ってきたこと。 ② 山内さんが来て京都の近世哲学史をやってほしいという話、講師だけということになる。 ③ 学界の状況を悲観する様子。 ④ 「ライブニッツとその時代」について。 ⑤ デイルタイの翻訳について。 ⑥ 西田先生の手紙を全集に入れることになったこと。その他近況など。
47	1946	21.12.9			十二月九日	30 銭 1 枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋 3 枚	① 時候の挨拶、返子の冬はちょっとうらやましい、仙台の冬はゆううつ ② 東北の倫理の人事について ③ 京都の審議会の様子について ④ 弘文堂の仕事について ⑤ 講義の内容について
48	1946	21.12 下旬 [推定]	. . 0			? 5 銭 1 枚	三宅剛一	下村寅太郎	葉書	下村の風邪と中耳炎を見舞う。休みに入り仕事にかかろうと思っている。冬の生活の様子。
49	1947	22.3.9 [推定]			三月九日	30 銭 1 枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋 5 枚	① 高坂君の新著と高山君の「文化国家」の感想。 ② 西田全集について。 ③ デュウイもヒュウムも頼んだけれど来ない。 ④ 休暇中に数理哲学思想を書きたい。 ⑤ Boyer を借りたい。

	付(西暦)	付(年号)	消印	消印局	書簡日付	切手	差出	宛先	形態	内容概略
50	1947	22.3.30 [推定]			三月三十日		三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋5枚	①Boyerを拝受。 ②数理哲学のこと。 ③基礎学の雑誌刊行の企てについて。 ④京都の文学部長からこちらの部長あてに近世哲学史の講師を頼みたいという問い合わせが事務的に届いたこと。 ⑤学校改革について。 ⑥お願いしてあるヒュウムについて。 ⑦カントの <i>r.Vernunft</i> の残本があったらほしい。 ⑧特殊講義は十九世紀哲学をやる予定。今度はドイツ哲学をやる。昨年は英仏をやった。 ⑨ディルタイの翻訳出版が頓挫。その他近況。
51	1947	22.4.27	22.4.27 /22.4.28		四月二十七日	2円2枚 1円1枚 10銭2枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋5枚	①時候の挨拶。 ②「科学とヒュウマニズム」のお礼と感想一言。 ③倫理学の後任教授のこと、西谷啓治君について相談。 ④京都の講師のこと、ありがたきお役目。 ⑤弘文堂と約束した本について、書き上げたが弘文堂が来仙せずそのまま机の上につんである。 ⑥家族の近況、正樹の植物採集、奈緒子の勤め。 ⑦仙台は桜について感慨に耽りながら、湘南を思う様子。
52	1947	22.6.1	22.6.1		六月一日	1円1枚 20銭1枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋4枚	①西谷君についての返答について、残念。 ②石津君が京都に行った時の話。 ③學兄の概論の盛況について。 ④数学会の話について、和泉君にききました。 ⑤「基礎科学」の編輯のこと。 ⑥自然弁証法について。 ⑦東京方面での唯物論・唯物弁証法の流行について。 ⑧特殊講義の進行状況、十九世紀のドイツ哲学。 ⑨田辺さんの近況についての御報告について、波多野さんの近況も併せて、「老先生たちの生活はいたましい氣がしてなりません」。 ⑩仙台はホトギスの鳴く季節になりました。
53	1947	22.8.24	22.8.25	仙臺	八月二十四日	1円20銭1枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋4枚	①「西田哲学」をありがとうございました。 ②現実と歴史というようなことについて考えていること。 ③西田全集が入手出来るよう口添えをお願いする。 ④ヒュウムは届いたけれど定価が分らずに困っている。 ⑤基礎科学の第一号を鶴首して待っている。 ⑥文部省に出した原稿について。 ⑦理科学的対象からお別れし新領域に足を踏み入れたい。 ⑧京都へ十月頃出かける。秋の哲学会で何か話すことになっている。 ⑨倫理の後任が矢島羊吉に内定したこと。その他近況。
54	1947	22.9.6	22.9.6		九月六日	15銭郵便はがき 35銭1枚	三宅剛一	下村寅太郎	葉書	①「若き西田先生」拝受。 ②高橋さんが山形校長に決定。 ③西田全集布川から十部送ってくれた。 ④引越しのこと。 ⑤ヒュウムのこと。
55	1947	22.9.27	22.9.28		九月二十七日	15銭郵便はがき 20銭1枚 15銭1枚	三宅剛一	下村寅太郎	葉書	京都行きの予定。十月四日に返りに泊りたい。帰りに東京でゆっくりしたい。

	付(西暦)	付(年号)	消印	消印局	書簡日付	切手	差出	宛先	形態	内容概略
56	1947		22.10.20		なし	50 銭郵便はがき	三宅剛一	下村寅太郎	葉書	① 京都での講義をしているところ。 ② 西谷君を訪ね、高坂君の家で高山、西谷、鈴木諸君と碁、将棋の会。田中美知太郎君にも会う。 ③ 下村の二十九日の予定を伺う。
57	1947	22.11.18	22.11		十一月十八日		三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋 2 枚	返子の火薬庫爆発のことを心配。歸仙後の近況。
58	1948	23.4.24 [推定]			四月二十四日	1 円 20 銭 1 枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋 5 枚	① 新居がなかなか決まらないなど近況。 ② 今年は概論をやる。特殊講義は「社会の認識」という題で六月開講。「自然的世界」から「歴史的社会的な世界」への切り替えをやる難しさ。人間の世界はとらえにくい。東京の空気について。 ③ 社会科学の方の本が思うようにない。 ④ 京都の講義について。 ⑤ 人文科学委員会で松本君が入選。 ⑥ 河内君は卒論でヘーゲル。 ⑦ 基礎科学のこと成果があがらない。自分自身の思想確立は難しい。哲学にはいつてくる新人生への当惑。 ⑧ 大学新制度の計画の見通しははっきりせず。 ⑨ 西田全集編纂委員会へ手紙を送ったこと。 ⑩ 倫理の矢島先生が来て話したこと。
59	1948	23.8.1	23.8.2		八月一日		三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋 4 枚	① 務台君が学長をやめることになったこと、後任に杉村氏。 ② 「哲学研究の葉」目下努力中、これについてお尋ね。 ③ 今秋「人文科学委員会」哲学部会を仙台でやる。 ④ 新制大学難産、人事まるで見当もつかない。
60	1948	23.10.10 [推定]	23.10.11		十月十日	50 銭郵便はがき 1 円 50 銭 1 枚	三宅剛一	下村寅太郎	葉書	① 下村は京都に出張講義中ではないかと思うが。 ② 「哲学研究の葉」書きあげて送りました。 ③ 引越したこと。 ④ 今月末の人文科学の哲学会へのお誘い。
61	1948	23.10.28	23.10.28		十月二十八日	2 円郵便はがき	三宅剛一	下村寅太郎	葉書	① 平凡社の辞典の「形式主義と直観主義」を書き終えたので発送します。「公理主義」がなかったら加えてください。 ② 選挙熱がさかんで少しくすぐったい。
62	1948	23.12.23			二十三日		三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋 3 枚	① 京都の出張講義御苦労様でした。 ② アテネ文庫の「物質とはなにか」という題の座談会に参加する。 ③ あまりありがたない新制大学について。 ④ 英国からの本を楽しみにしている、だんだん経験論的な見方に親しみを覚えるようになったこと。
63	1949	24.1.22	24.1.22	仙臺	二十二日	2 円郵便はがき	三宅剛一	下村寅太郎	葉書	先日御世話になったお礼。宮本君のこと。
64	1949	24.2.18 [推定]			二月十八日	5 円 1 枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋 3 枚	① 手紙のお礼、座談会のあと病気になる下村への見舞い。 ② 宮本君の人事の件。 ③ 相原君の人事の件。 ④ 座談会の筆記の件。 ⑤ 発表の件。 ⑥ 近況報告、講義が終っても卒業論文、リポート、試験と仕事が多まって息つくこともできないが、休みになったことがうれしい。 ⑦ 家内への贈物へのお礼。
65	1949	24.4.29 [推定]			四月二十九日		三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋 4 枚	① 淡野君の学位論文について期待外れの感じをもらす。 ② 三学部独立、新制大学形式的には決まりがついたが、まだまだごたつきそう。

	付 (西暦)	付 (年号)	消印	消印局	書簡日付	切 手	差 出	宛 先	形 態	内 容 概 略
66	1949	24.9.4	24.9.5	仙臺 宮城縣	九月四日	8 円 1 枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋 2 枚	①「精神史の一隅」が出来上がったお祝ひと、これにまつわるなつかしい思い出等。 ②「教育大学」問題、よき解決を祈る次第。
67	1949	24.9.19	24.9.19	仙臺 宮城縣	九月十九日	8 円 1 枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋 4 枚	座談会辞退と代案について (西谷君に告げたことなど)、「哲学とはなにか」についてコメント。
68	1950	50.5 or 6 [推定]	. 8		なし		三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋 4 枚	①西田先生の「意識の問題」のこと。そして「個体」の論文の初めの掲載雑誌について。 ② <i>Vernunft in der Geschichte</i> と「哲学研究入門」のことなど。 ③河野君の後任その他人事に苦心している状況。 ④学校でのイールズ事件以来の騒々しさ。 ⑤大学院創設への事務的な仕事への憂慮。 ⑥下村の確率論への取り組みを激励。 ⑦近況、仙台でも甘いものならは昔にかえったよう
69	1950	25.6.19	25.	仙台	六月十九日	2 円郵便はがき	三宅剛一	下村寅太郎	葉書	科学概論の項目を本多修郎君にやってももらったという提案
70	1950	25.7.30	25.	仙?	七月三十日		三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋 4 枚	① 務臺君の還暦記念論文集の計画。 ② 河野君の後任のこと (前の手紙の補足)。 ③ ハイデッガーの <i>Holzwege</i> について。 ④ この夏休みの計画、ハイデッガーが終わったら八月中頃から弘文堂の仕事、どこかへ静養に出かけたいのだが無理のようだ。
71	1950		25.9.4 [推定]	仙台	なし	8 円 1 枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋 2 枚	① 先日御世話になったことへのお礼。 ② 哲学辞典の決定項目 (第一回) の中で不要と思われるものを数学自然哲学方面からひろい出す。 ③ 初秋がやって来ました。 ④ 子供たちに御手を頂いたお礼。
72	1950	25.9.17 [推定]			九月十七日				封筒なし・便箋 2 枚	辞典の項目について。平凡社の理科辞典の件。弘文堂の辞典について。辞書を書く為に Sorley の英国哲学史が見つかったら買って送ってほしい。
73	1950	25.10.1		仙台	十月一日	2 円郵便はがき	三宅剛一	下村寅太郎	葉書	① 哲学辞典の項目の分担。 ② Sorley の英国哲学史の出版社を知りたい。 ③ 年の暮れに移転する予定。
74	1951	26.2.26	26.2.26	仙台	二月二十六日	2 円郵便はがき	三宅剛一	下村寅太郎	葉書	務台記念会から電報。他の記念論文集のために書いた原稿「経験的現実としての社会」を廻します。
75	1951	26.3.27	26.3.27	仙台	二十七日	2 円郵便はがき	三宅剛一	下村寅太郎	葉書	① 先日は御世話になりました。 ② 平凡社の理科学事典の小生宛の項目 (実証主義、合理主義、实在論) も松本君にやってほしい。(松本君には「デカルト、バグソン、ド・ラメトリ」が指定されていたが)。下村に「自然哲学」をお願いする。「メイエルソン」はどうするか。
76	1951	26.4.13 [推定]			四月十三日	8 円 1 枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋 2 枚	① しばらく御無沙汰。学年がわりは教師には忙しい。 ② 今年は哲学の卒業生は就職難の年。 ③ 演習のテキストについて、Dewey をやる。 ④「十九世紀哲学史」正誤表を封入。
77	1951	26.4 or 5 [推定]	26.	仙台	なし	2 円郵便はがき	三宅剛一	下村寅太郎	葉書	① 務台博士記念論文集着。 ② 学年初めの用事も近く一通り片づく。京都まで図書館見学へ。ついでに岡山の御里へ。東京には往きに公用、逗子は帰りの楽しみ。 ③ 建築の飯田氏に時々会います。
78	1951		26.10.10	仙台	なし	2 円郵便はがき	三宅剛一	下村寅太郎	葉書	① 理科学事典の原稿のこと、松本君への催促先。 ② 北海道の帰りにお立ち寄りください。

三宅剛一差出・下村寅太郎宛書簡 (下)

	付(西暦)	付(年号)	消印	消印局	書簡日付	切手	差出	宛先	形態	内容概略
79	1952		27.2.22 /27.2.23	仙台／ 逗子	なし	30円1枚 5円1枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋4枚	① すっかり御無沙汰して居ります。 ② 末綱さんの企画による総合研究課題「数学基礎論」一応お断りしたいが、必要なら考えます。東北の哲学関係でも総合研究をやっている(代表)来年も継続する。 ③ 大学院の専攻の分け方に困っている様子。 ④ 創文社倫理講座「実存の倫理」書きたくない。 ⑤ 学習院の高山問題について。 ⑥ アプレ学生など近況。正樹は入試。
80	1952		27.3.2 /27.3.3	仙台／ 逗子	なし	30円1枚 5円1枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋1枚	① 末綱さん代表の総合研究についての連絡。 ② 本日学長選挙をやり高橋さんが再選しました。
81	1952		27.8.4	仙台	なし	5円郵便はがき	三宅剛一	下村寅太郎	葉書	① 永らく御無沙汰しております。 ② 末綱研究の集りも近くあるのではないかと心待ち。 ③ このごろ考えがまとまらずものが書けなくて困る。
82	1952		27.8.15	仙台	なし	5円郵便はがき	三宅剛一	下村寅太郎	葉書	① 末綱研究の集りの予定について。 ② 西田全集の附録月報に何か書くこと、日記を讀んだりして興味深い。
83	1952		27.9.6	仙台	なし	5円郵便はがき	三宅剛一	下村寅太郎	葉書	仙台に帰ってきたこと。ゆっくりお話できて大変愉快だったこと。
84	1952	27.10.26	27.10.28	仙台	十月廿六日	10円1枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋4枚	① 挨拶、御手紙拝見、正樹お世話になったお礼 ② 十一月三十日に基礎科学の会に出られるということ ③ 下村が名古屋で集中攻撃を受けたことについて、「戦闘力のある学兄でよかった」 ④ 先日哲学会のこと、「務台君に御苦勞を願ひ公開講演会も具合よくやれました」 ⑤ 戦前創元社でやりかけたディルタイ著作集について ⑥ こちらは急に寒々とした様子になりました ⑦ 「基礎科学」の論文について
85	1952		27.11.23	仙台	なし	5円郵便はがき	三宅剛一	下村寅太郎	葉書	予定：28日朝仙台を立つ、夕逗子着下村山荘に御厄介になる。30日会合出席。3日歸仙。
86	1953		28.8.16	仙台	なし	5円郵便はがき	三宅剛一	下村寅太郎	葉書	① 御無沙汰して居ります。 ② 弘前大学講義に出かけられるときお立ち寄りください。 ③ 相談したいことがある。 ④ 秋の仙台での日本哲学会に公開講演をお願いしたい。
87	1945	28.8.23	28.8.23	仙台	八月二十三日		三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋2枚	下村の東北旅行についてスケジュールの提案。
88	1953	28.9.26	28.9.26 /28.9.27	仙台／ 逗子	九月二十六日	25円1枚 10円1枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋3枚	① 御手紙拝見、札幌から二十二日の夜帰る。 ② 哲学会の公開講演を御辞退のことまことに残念。 ③ 自身の後任を高坂君に頼む準備。10月12日東京で高橋さんと高坂君が会えるよう、下村に高坂君への連絡を頼む、その為下村の九州旅行の予定伺い。
89	1953	28.10.20	28.10.20		十月二十日	10円1枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋4枚	① 下村の九州に出かけることもならない事情について。 ② 哲学会無事終了の報告。 ③ 高坂君のことについて。
90	1953	28.11.7	28.11.7	仙台	十一月七日	10円1枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋3枚	① 29日の会(題目は「確率と帰納法」、引続き京都へ集中講義に行く。 ② 高坂君を仙台に迎えるのは難しい。自身の京大への転任のこと。
91	1954		29.7.11	左京	なし	10円1枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋4枚	① 大分御無沙汰しました。揉み療治など京都での近況。 ② 9月20日頃から一週間ばかり仙台へ出講。
92	1954	29.7.18	29.7.19	左京	七月十八日	5円1枚	三宅剛一	下村寅太郎	絵葉書	① 御手紙のこと、上田君としてみましょう。 ② 近藤洋逸君に原稿のことを頼んでおきました。 ③ 醍醐から法界寺の方に行ったこと。 ④ 高田三郎君が学部長に選ばれたこと。

	付(西暦)	付(年号)	消印	消印局	書簡日付	切手	差出	宛先	形態	内容概略
93	1955		30.1.	左京	なし	5円郵便はがき	三宅剛一	下村寅太郎	葉書	① 下村の神経痛をいたわる。 ② 「科学基礎論研究」の原稿を上田君に書くよう勧めてみる。 ③ ベッカー「数学基礎論史」の書評は近藤洋逸君に頼んで承諾を得た。 ④ 末綱さんの総合研究のこと。小生六十才、うそのよう。
94	1955	30.3.21	30.3.21		三月二十一日		三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋3枚	① 奥様が病気で入院手術されたとのこと驚きました。 ② 学年末の雑用が片ついたら奈良あたりに出かけた。 ③ 研究費審査のことで五月中旬頃出京、お会いできることを楽しみにしている。
95	1956	31.3.15	31.3.15	左京	三月十五日	10円1枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋2枚	① 下村の渡欧のこと。 ② 5月26.7日基礎論学会、ゆっくり話せるよう予定しておいでください。 ③ その他近況。正樹は修士コースにはいると申している。
96	1956		31.5.30	左京	なし	10円1枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋2枚	① フィンク君から紹介状をもらわれたら宜しい。Beckerに紹介状を書いても宜しい。 ② 日独文化研究所で映画を見たこと。 ③ 知人がよく病気をすることなど近況。
	1956				Kyoto, 29, Mai, 1956		Goichi Miyake	Eugen Fink	フィンク宛封筒 ・便箋1枚	しばらく御無沙汰している。フィンクがフライブルク大学の教授として戻ったことのお祝。 友人下村を推薦する。
97	1956		31.5.30	左京	なし	5円郵便はがき	三宅剛一	下村寅太郎	葉書	フィンクへの紹介状の字句訂正。湯浅誠之助を紹介する。
98	1956	31.7.12		左京	七月十二日	5円郵便はがき	三宅剛一	下村智恵子	葉書	① お葉書のお礼。正樹が病氣中なので家内からの返事が遅れる。 ② 下村は欧州旅行中。後で話をきくのが楽しみ。
99	1957	32.1.30	32.1.30	左京	一月三十日	10円1枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋4枚	先日はおいでくださって恐縮。東京転出の話で安倍さんと話した住宅のことなど。
100	1957		32.2.17	左京	なし	10円1枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋3枚	① 安倍さんからの手紙、学習院の舎宅にはいること。 ② 高橋様さんから学習院の様子など報せてきた。 ③ 正樹の本代のお礼。 ④ 今の家のことをどうするか。 ⑤ NHK人生論のこと。 ⑥ 今学年「人間存在論」の特講のしめくりで、芸術や宗教をやったものかと考えている。
101	1957	32.4.28 [推定]	32.4.28	左京	なし	5円郵便はがき	三宅剛一	下村寅太郎	葉書	上京の予定。クナウスに会う。学習院に安倍さんを訪ねる。哲学会と東北大の会に出る。平塚見学があれば行く。 追伸：神戸の三田君が、「基礎論学会」今度はやれないと言ってきた。発表者が不足なら富川にすすめてみて下さい。
102	1957	32.10.13	32.10.14	左京	十月十三日	10円1枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋1枚	24日に西谷君から、マルセルの話をきく会をやらうと言ってきた。
103	1957	32.11.25 [推定]			二十五日	10円1枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋2枚	① 下村御令兄の病氣見舞い。 ② 12月1日学習院に参集。宿のことなど。 ③ 28日に京大の停年講義。 ④ マルセルの話。 ⑤ 唐木君はシラフではまるで枯木ですね。
104	1958	33 ~ 39.7.20 [推定]	.7.21		七月二十日	10円2枚	三宅剛一	下村寅太郎	封書・便箋6枚	① 昨日お会いできて愉快だった。 ② 国際哲学会会長は辞退したい理由。引き受ける条件など。
105	1958		33.10.2	落合長崎	なし	5円郵便はがき	三宅剛一	下村寅太郎	葉書	① 学期試験で今日から10日ばかり学校が休み。 ② 「現代哲学入門」の感想。 ③ 歯科医に通わねばならない。 ④ 一日位逗子山荘に行きたい。
106					二十七日		三宅剛一	下村寅太郎		和泉良久君が学位請求論文提出を希望しているので御考慮願いたい。